

石巻市文化財調査報告書第 17 集

石森城跡・中沢館跡

—県道石巻鮎川線給分浜復興道路関連遺跡発掘調査報告書 I —

令和 4 年 3 月

石巻市教育委員会

石森城跡・中沢館跡

—県道石巻鮎川線給分浜復興道路関連遺跡発掘調査報告書 I —



巻頭図版 石森城跡から大原湾を望む（北東から） 右の杉林が途切れた部分が調査区

発刊のことば

東日本大震災から 11 年が経ち、最大の被災地である本市は、世界の復興モデル都市となるべく、復興の途を歩み続けてまいりました。市民の暮らしの再生を図るためにも、長い歴史の中で先人たちが築き上げてきた伝統や文化を再認識し、継承していくことが不可欠であると考えます。

本書は、平成 31 年度・令和 2 年度の県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業に伴う工事に先立ち実施した、石森城跡と中沢館跡の発掘調査成果をまとめたものです。

石森城跡と中沢館跡は、ともに牡鹿半島南部に位置し、仙台湾に面した丘陵に立地する中世の城館跡として登録されている遺跡です。今回の調査では、石森城跡で近世以降の土塁や石塁が確認されたほか、新たに縄文時代の遺物包含層が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で非常に貴重な成果が得られました。こうした成果が広く市民の皆様や各地の研究者の方々に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、両遺跡の発掘調査に際し、作業員として参加いただいた多くの地元住民の皆様をはじめ、関係機関の皆様から多大なる御支援、御協力を賜りましたことに、心から感謝申し上げます。

令和 4 年 3 月

石巻市教育委員会

教育長 宍戸 健悦

例言

1. 本書は、宮城県東部土木事務所、石巻市教育委員会、宮城県教育委員会の協議に基づいて平成31年度・令和2年度に実施した県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業に伴う、石森城跡・中沢館跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は石巻市教育委員会が主体となり、宮城県教育委員会の協力を得て実施した。
3. 発掘調査および資料整理・報告書の作成に関しては、以下の方々および機関からご指導・ご協力を賜った（五十音順、敬称略）。
石森彦一（大原行政区）、泉田邦彦（石巻市博物館）、遠藤三知郎（瑞浪市陶磁資料館）、須貝慎吾（仙台市教育委員会）田中則和（宮城県考古学会）、谷口宏充（東北大大学）、宮城県東部土木事務所
4. 本書第2図・第3図は、国土地理院ホームページの地理院地図を使用して作成した。
5. 本書で使用した測量基準点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。なお、方位Nは座標北を表している。
6. 本書で使用した遺構記号は、以下の通りである。
SA：柱列跡 SD：溝跡 SF：土壙・石壙・石積み遺構 SX：遺物包含層・整地層 P：ピット
7. 遺構図および遺物図の縮尺は、それぞれスケールを付して示している。遺物の写真図版については、縄文土器は1/2とし、それ以外のものについては縮尺数値を付している。
8. 土色・遺物の色調は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）に依拠して記載した。
9. 本書は調査を担当した各調査員の協議を経て、第1章を木暮亮、第3章5と6の縄文土器を村田晃一、それ以外の部分を黒田智章が執筆した。また、第2章3は石巻市博物館の泉田邦彦氏に執筆を依頼した。編集は黒田が行った。
10. 発掘調査・整理作業員の派遣については、株式会社マルテックに委託した。遺跡の航空写真撮影は、株式会社イビソクに委託した。遺物の写真撮影は、株式会社アートプロフィールに委託した。
11. 調査成果は、令和元年度宮城県遺跡調査成果資料集・宮城県教育文化財課ホームページなどでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合は本書がこれに優先する。
12. 発掘調査の記録類や出土遺物は、石巻市教育委員会が保管している。

目次

巻頭図版

発刊のことば

例　　言

目　　次

第1章　調査に至る経緯 1

第2章　遺跡の位置と環境

- | | |
|-----------------------|---|
| 1 地理的環境 | 3 |
| 2 歴史的環境 | 3 |
| 3 中世遠島の地域的特性と城館 | 6 |

第3章　石森城跡

- | | |
|---------------------|----|
| 1 石森城跡の歴史 | 12 |
| 2 石森城跡の地形と縛張り | 12 |
| 3 調査の方法と経過 | 14 |
| 4 基本層序 | 17 |
| 5 検出遺構と遺物 | 18 |
| 6 総括 | 56 |
| 写真図版 | 65 |

第4章　中沢館跡

- | | |
|--------------------|----|
| 1 中沢館跡の歴史と現況 | 85 |
| 2 調査の方法と経過 | 86 |
| 3 基本層序 | 89 |
| 4 検出遺構と遺物 | 90 |
| 5 総括 | 91 |
| 写真図版 | 93 |

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第31図 SX7 遺物包含層出土石器（2）	38
第2図 周辺の遺跡	2	第32図 SX7 遺物包含層出土石器（3）	39
第3図 石森城跡・中沢館跡周辺の地形と遺跡	5	第33図 SX7 遺物包含層出土石器（4）	40
第4図 中世遠島地域の中世城館跡分布図	8	第34図 SF2 石垣平面図	43
第5図 中沢館跡新発見板碑	12	第35図 SF2 石垣立面図（部分）、SX1 遺物 包含層・SF2 石垣東西断面図	44
第6図 石森城跡略図	12	第36図 SF5 石積み構造・SD6 構跡平面図	45
第7図 石森城跡の地形と調査区配置図	13	第37図 SF2 石垣・SF5 石積み構造・SD6 構跡断面図	46
第8図 石森城跡調査図想定図	13	第38図 SF5 石積み構造出土遺物	47
第9図 石森城跡基本層序柱状図	14	第39図 SF9 土壌平面図	48
第10図 石森城跡構造配置図	15	第40図 SF9 土壌断面図	49
第11図 SX1 遺物包含層・SD8 構跡平面図	18	第41図 SF9 土壌出土遺物	49
第12図 SX1 遺物包含層断面図	19	第42図 SF12 石積み構造平面図	50
第13図 SX1 遺物包含層出土土器（1）	20	第43図 SF12 石積み構造断面図	50
第14図 SX1 遺物包含層出土土器（2）	21	第44図 SF12 石積み構造立面図（部分）	51
第15図 SX1 遺物包含層出土土器（3）	22	第45図 SF12 石積み構造出土遺物	51
第16図 SX1 遺物包含層出土土器（1）	23	第46図 SD6 構跡出土遺物	52
第17図 SX1 遺物包含層出土土器（2）	24	第47図 SX1 遺物包含層・SD8 構跡断面図	52
第18図 SX1 遺物包含層出土土器（3）	25	第48図 SX10 整地層平面図	53
第19図 SX1 遺物包含層出土土器（4）	26	第49図 SX10 整地層断面図	53
第20図 SX7 遺物包含層・SX11 整地層平面図	27	第50図 SX10・11 整地層出土遺物	54
第21図 SX7 遺物包含層・SX11 整地層断面図（1）	28	第51図 構造外出土遺物	55
第22図 SX7 遺物包含層・SX11 整地層断面図（2）	29	第52図 中沢館跡略図	85
第23図 SX7 遺物包含層出土土器（1）	30	第53図 中沢館跡の地形と調査区配置図	85
第24図 SX7 遺物包含層出土土器（2）	31	第54図 中沢館跡基本層序柱状図	86
第25図 SX7 遺物包含層出土土器（3）	32	第55図 中沢館跡構造配置図	87
第26図 SX7 遺物包含層出土土器（4）	33	第56図 SA1 柱列跡平面図	89
第27図 SX7 遺物包含層出土土器（5）	34	第57図 SA1 柱列跡・ピット断面図	90
第28図 SX7 遺物包含層出土土器（6）	35	第58図 SX2 整地層・自然流路断面図	90
第29図 SX7 遺物包含層出土土器（7）	36		
第30図 SX7 遺物包含層出土土器（1）	37		

写真図版目次

図版1 石森城跡航空写真（1）	65	図版15 SX7 遺物包含層出土土器（4）	77
図版2 石森城跡航空写真（2）	66	図版16 SX7 遺物包含層出土土器（5）	78
図版3 SX1 遺物包含層	67	図版17 SX7 遺物包含層出土土器（6）	79
図版4 SX7 遺物包含層	68	図版18 SX7 遺物包含層出土土器（7）	79
図版5 SF2 石垣	69	図版19 SX1 遺物包含層出土土器（1）	80
図版6 SF5 石積み構造・SD6 構跡	70	図版20 SX1 遺物包含層出土土器（2）	81
図版7 SF9 土壌	71	図版21 SX7 遺物包含層出土土器（1）	81
図版8 SF12 石積み構造	72	図版22 SX7 遺物包含層出土土器（2）	82
図版9 その他の遺構	73	図版23 SX7 遺物包含層出土土器（3）	83
図版10 SX1 遺物包含層出土土器（1）	74	図版24 中沢館跡遺跡写真	93
図版11 SX1 遺物包含層出土土器（2）	75	図版25 II-A 区	94
図版12 SX7 遺物包含層出土土器（1）	75	図版26 III-A～E 区	95
図版13 SX7 遺物包含層出土土器（2）	76	図版27 SA1 柱列跡、SX3 整地層など	96
図版14 SX7 遺物包含層出土土器（3）	76		

調査要項

遺跡名：石森城跡（宮城県遺跡地名表登録番号 74011）

所在地：石巻市大原浜字台町屋敷

調査原因：県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業

調査主体：石巻市教育委員会

調査担当：石巻市教育委員会生涯学習課

調査協力：宮城県教育庁文化財課

調査員：木暮 亮・佐藤佳奈・須藤良介（石巻市教育委員会）

黒田智章・古川一明・村田晃一・矢内雅之（宮城県教育委員会）

調査期間：令和 2 年 8 月 3 日～11 月 27 日

調査面積：5,150 m²

遺跡名：中沢館跡（宮城県遺跡地名表登録番号 74018）

所在地：石巻市大原浜字向山

調査原因：県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業

調査主体：石巻市教育委員会

調査担当：石巻市教育委員会生涯学習課

調査協力：宮城県教育庁文化財課

調査員：（平成 31 年度）須藤良介（石巻市教育委員会）

傅田恵隆・矢内雅之（宮城県教育委員会）

（令和 2 年度）木暮 亮（石巻市教育委員会）

黒田智章・古川一明・矢内雅之（宮城県教育委員会）

調査期間：令和元年 8 月 5 日～10 月 31 日、令和 2 年 6 月 8 日～7 月 27 日

調査面積：4,120 m²

第1章 調査に至る経緯

県道（主要地方道）石巻鮎川線は、石巻市渡波の国道398号との接続部を起点とし、牡鹿半島の西側を通って半島南端部の鮎川へと至る全長28.4kmの道路で、沿線住民の貴重な生活道であるとともに、三陸復興国立公園（旧南三陸金華山国定公園）を擁する牡鹿半島・金華山への主要な観光道路となっている。

牡鹿半島では、平成23年に発生した東日本大震災による被害からの復興と、事後の災害（津波）対策として、丘陵上に防災集団移転団地が整備された。このうち、大原浜地区、給分浜地区、小湊浜地区においては、これらの団地を連絡する石巻鮎川線のバイパス道路として、宮城県による給分浜復興道路の新設が計画された。

平成24年度に宮城県東部土木事務所から埋蔵文化財に関する協議を受け、石巻市教育委員会では、路線上に立地する石森城跡、中沢館跡、中沢遺跡、小寺遺跡、羽黒下遺跡の各埋蔵文化財包蔵地について、宮城県文化財保護課（現文化財課）の指導・助言を得ながら、事業者と協議を重ねた。一方、同年から平成27年度にかけては、防災集団移転団地建設に伴う中沢遺跡と羽黒下遺跡の大規模な埋蔵文化財発掘調査が実施されており、また、この建設に伴う計画変更などにより、最終的には石森城跡、中沢館跡、中沢遺跡、小寺遺跡の確認調査を復興道路建設のための環境整備が整う平成27年度から31年度までに実施することとなった。事業者からは平成27年5月20日付で文化財保護法第94条に基づく発掘通知が提出され、その後実施した確認調査の結果、石森城跡、中沢館跡、中沢遺跡について本発掘調査を実施する必要が生じた。

石森城跡は、大原浜に面した丘陵上に立地する中世の城館跡として登録されており、曲輪、土塁、石塁などの地上顕在遺構が確認されていた。確認調査は平成30年10月に実施し、複数の溝跡などを検出した。これらの遺構は城館跡に関連する事が想定されたため、令和2年8月から宮城県文化財課の協力を得て本発掘調査を開始し、土塁・石塁やそれに伴う近世の陶磁器などのほか、新たに縄文時代の遺物包含層を検出した。調査は同年11月末に終了した。なお、取付道路部分の調査は令和3年度以降に実施する予定である。

中沢館跡は、昭和60年（1985）に曲輪・土段・空堀などの地上顕在遺構が確認され、中世の城館跡として登録された。確認調査は平成30年9月に実施し、20基以上のピットを検出した。これらは城館跡に関連する遺構であることが想定されたため、令和元年8月（平成31年度）から、宮城県文化財課の協力を得て本発掘調査を開始した。調査は南半部を平成31年度、北半部を令和2年度に実施した。平成31年度の調査では複数のピットを検出し、10月に終了した。また、令和2年度



第1図 遺跡の位置

の調査では、時期不明の整地層を検出し、7月で調査を終了した。

なお、中沢遺跡については、対象地が平成24・25年度実施の防災集団移転団地建設に伴う本発掘調査区北側の隣接地であり、まとまった量の遺物が発見されることが予想されていた。令和元年12月に確認調査を実施し、遺物包含層と多くの遺物を発見した。本発掘調査は令和3年度に実施し、10月に終了した。



第2図 周辺の遺跡

No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	石森城跡	段丘	城郭	中世	25	福貴星敷御跡	丘陵	城郭	中世
2	中沢館跡	丘陵	城郭	中世	26	福貴星敷日坂	丘陵麓	貝塚	縄文前・古代
3	中沢遺跡	段丘	散布地	縄文前	27	スケカリ高瀬跡	海岸段丘	貝塚	縄文前・中・平安
4	小寺遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	28	黒崎城跡	丘陵斜面	城郭	中世
5	羽佐下遺跡	丘陵	散布地	縄文前・中	29	水手の跡	丘陵	板碑	中世
6	楓吉宿跡	丘陵	散布地	中世	30	アチャ浜遺跡	丘陵	散布地	調査草
7	船分浜貝塚（後山貝塚）	丘陵	貝塚	縄文前～後・弥生	31	吉祥寺境内板碑	丘陵	板碑	中世
8	小瀬遺跡	丘陵	散布地	縄文中	32	造代日遺跡	段丘	散布地	調査草
9	十九戍遺跡	丘陵	城郭	中世	33	萩浜遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文
10	鶴川遺跡	丘陵	散布地	縄文中	34	翠浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・弥生
11	黒崎遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文	35	熊子浜遺跡	丘陵麓	散布地	古代
12	金華山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前	36	野ヶ浜遺跡	丘陵麓	散布地	縄文前・中・晚・弥生中
13	金華山日塚	丘陵斜面	貝塚	縄文早・中	37	野ヶ浜日遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生
14	網地遺跡	丘陵	散布地	縄文中	38	長者浜遺跡	丘陵斜面	散布地	古代
15	網地製鹽遺跡	海岸	製塩	平安	39	大原の遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・弥生・平安
16	網地製鹽D遺跡	海岸	製塩？	平安？	40	横頭A遺跡	丘陵麓	散布地	古代
17	網地製鹽C遺跡	海岸	製塩？	平安？	41	横頭B遺跡	丘陵麓	散布地	縄文・古代
18	一鬼城崎遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文前	42	名不加板碑群	丘陵麓	板碑	中世
19	田代島十三塚	丘陵斜面	散布地	近世	43	横浦遺跡	丘陵	城郭	中世・近世
20	県史跡 仁斗田貝塚	丘陵	貝塚	縄文前～後	44	三国防跡	丘陵尾根	寺院	中世？
21	松前社下遺跡	丘陵麓	散布地	平安	45	變々寺跡	丘陵斜面	寺院	中世？
22	二渡貝塚	段丘	貝塚	縄文時	46	落落遺跡	丘陵麓	散布地	旧石器・縄文前・中
23	御須道跡	丘陵斜面	散布地	縄文時	47	青木浜遺跡	貝塚・散布地	奈良・平安	
24	小倉合共同墓地内終塚	丘陵	終塚	中世	48	風敷貝塚	丘陵	貝塚	縄文前～後・奈良・平安

第2章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

石森城跡は石巻市大原浜字屋敷ほか、中沢館跡は石巻市大原浜字向山ほかに所在する。石巻市役所から南東に約18km離れた場所にあり、牡鹿半島南部の旧牡鹿町にあたる。海沿いにはリアス海岸による湾がいくつも連なり、このうち石森城跡と中沢館跡の西方にひろがる南北約2.5kmの小湾は大原湾と呼ばれている。この海岸部に向かって、半島中央部を南北に貫く標高400mほどの山地から樹枝状に複数の丘陵が張り出し、小河川により開析された谷が刻まれている。石森城跡の北側には中田川、南側には中ノ川、中沢館跡の南北にはともに同名の中沢川が流れ、その下流域に沖積作用による小規模な平地が形成されている。この平地を南北に走る旧街道に沿って、かつて大原浜集落の中心部が広がっていたが、東日本大震災により大きな被害を受け、現在の集落は高台に移転している。大原浜集落は北側を小綱倉浜・清水田浜集落と、南側は給分浜集落と、それぞれ接している。

石森城跡は大原浜集落の中心部にある大原小学校の北東に位置し、東西180m、南北220mの範囲が遺跡として登録されており、今回の調査対象地はこの南部にあたる。中沢館跡は大原浜と給分浜の境に位置し、東西310m、南北220mの範囲が遺跡として登録されており、今回の調査対象地はこの西側にあたる。

2 歴史的環境

石森城跡と中沢館跡が位置する牡鹿半島南部は、リアス海岸に面した丘陵上等に縄文時代の貝塚や散布地が数多く存在する。これまで、その多くは発掘調査が行われることはなく、長く実態が不明なままであった。東日本大震災後、復興事業に伴う発掘調査が各地で実施されたことで、その様相が明らかになりつつある。

大原湾に面する中沢遺跡では、東日本大震災後の防災集団移転事業にともない、平成24・25年度に本発掘調査を実施し、丘陵上に大型の竪穴建物跡・掘立柱建物跡が弧状に並ぶ縄文時代前期の集落が明らかになった。丘陵斜面に形成された遺物包含層からは多量の遺物が出土し、特に縄文時代前期前葉から中葉にかけての土器（大木2b～3式）は、宮城県内では類例の少ない時期の良好な資料である（石巻市教育委員会2018）。中沢遺跡の南約300mの丘陵上に立地する羽黒下遺跡でも、防災集団移転事業にともなう調査を平成26・27年度に実施し、前期の竪穴遺構4基や、前期から中期の遺物包含層が検出されている（石巻市教育委員会2021）。また、中沢遺跡と羽黒下遺跡の中間に位置する小寺遺跡でも、縄文時代前期の土器や石器が採集されている（牡鹿町誌編纂委員会1988）。

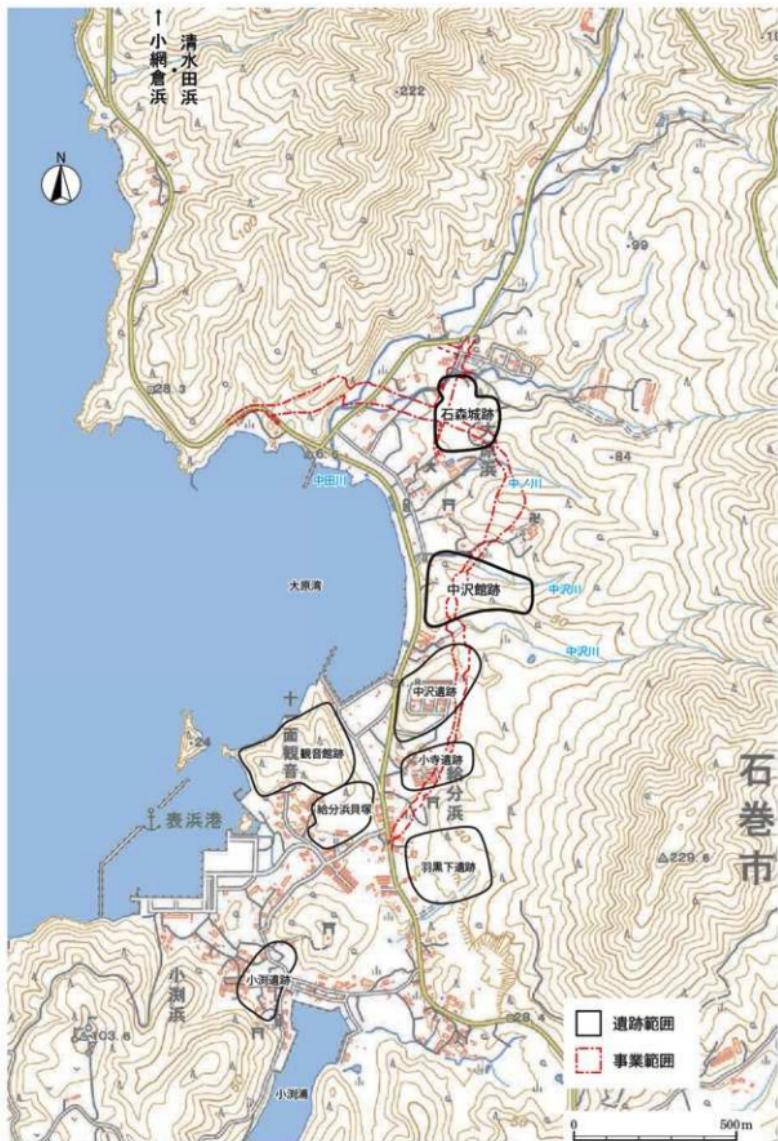
上記3つの遺跡とは県道を挟んで西側、観音館跡南東の丘陵斜面に広がるのが給分浜貝塚で、縄文時代中期を主体とした土器・石器・骨角器が採集されている（東北歴史資料館1989）。同じく中期主体の貝塚として、石巻湾に浮かぶ離島・田代島の仁斗貝塚があり、クボガイやアワビなどの岩礁産貝類が多い事が特筆され、鹿角製の漁労具が多数出土している（楠本正助1973、石巻市史編さん委員会1995）。このほか、小測遺跡でも中期の土器が採集されている（牡鹿町誌編纂委員会1988）。

後期以降の遺跡は少ないが、離島の金華山貝塚で縄文時代晩期の貝層が確認されている（東北歴史資料館1989）。

弥生時代以降も牡鹿半島南部では遺跡の少ない時代が続くが、中沢遺跡の調査で古墳時代中期の竪穴建物跡が1棟、平安時代の竪穴建物跡が3棟検出されている。平安時代の1棟については鍛冶関連の工房の可能性が指摘されている（石巻市教育委員会2018）。

中世になると牡鹿半島は葛西氏の影響下に入り、半島南部では観音館跡など6つの城館跡が確認されている。ただし、由来等の詳しい伝承は少なく、その詳細は不明である。また、各地で板碑の造立がみられ、給分浜の観音館跡南側にある弘安8年銘の板碑をはじめ、中沢館跡では南側と西側で計4基が確認されている。羽黒下遺跡の調査では、11～14世紀とみられる掘立柱建物跡1棟や火葬遺構2基を検出している。火葬遺構は仙台平野から郡山盆地で主にみられる凸形系火葬遺構と呼ばれるもので（田中2005）、その最北の事例となる。これらの遺構周辺で出土した陶磁器には、常滑産や渥美産、さらに龍泉窯青磁などがみられるものの、同時期の仙台平野周辺の遺跡で一般的にみられる在地産の陶器は含まれない事から、半島南部の地理的な特性を示すものと考えられる（石巻市教育委員会2021）。

近世に肝入や御仮屋守を務めた大原浜の石森氏は、戦国末の葛西氏滅亡後に登米郡石森荘から落ち延びてきたと伝えられている。御仮屋は、伊達政宗が遠島の鹿狩りの際に滞在する場として元和元年（1615）に大原浜に建てられ、寛文2年（1662）に廃止されるまで度々藩主により使用された事が記録されている（牡鹿町誌編纂委員会1988）。



第3図 石森城跡・中沢館跡周辺の地形と遺跡

3. 中世遠島の地域的特性と城館

泉田邦彦（石巻市博物館）

（1）遠島の地域的特性

石森城跡及び中沢館跡が所在する大原浜は、中世は「遠島」と呼ばれる領域に属した。遠島は、近世中期以降の仙台藩領において、牡鹿郡陸方おしかたに対する、牡鹿郡浜方はまかたの女川・十八成・狐崎の三組（= 牡鹿半島）を指す言葉として捉えられてきたが、中世のそれとは必ずしも一致しない。すなわち、大石真正が指摘するように、中世の遠島は、牡鹿・桃生両郡の浜だけ構成される独立した領域であり、牡鹿・桃生両郡とは区別されていたのである〔大石 1986・1996〕。

牡鹿・桃生両郡の浜のみで構成される「遠島 五十四浜」については、「浜」に由来する地域的特性が存在する。以下、中近世の史料を整理しながら、遠島の地域的特性を確認しておく。

中世の遠島は、牡鹿郡石巻城や登米郡寺池城を居城とした葛西氏が領有していた。特に、天正 17～19 年（1589～1591）にかけて、葛西晴信が給人たちに対し、遠島の漁業権を認めていた点は注目される。

史料 A：天正 17 年 2 月 2 日付中沢左近丞・遠藤右近丞宛葛西晴信黒印状写（『石巻の歴史』8- 中世編 358、「牡鹿郡十八成組給分浜風土記」）

史料 B：天正 17 年極月 1 日付沼田藤八郎宛葛西晴信黒印状（『石巻の歴史』8- 中世編 376、一関市花泉町 千葉文書）

史料 C：天正 18 年 6 月 16 日付石森掃部左衛門宛葛西晴信黒印状（『石巻の歴史』8- 中世編 383、石巻市博物館蔵毛利コレクション）

史料 D：天正 19 年 3 月 3 日付石森掃部左衛門宛葛西晴信黒印状（『石巻の歴史』8- 中世編 441、仙台市博物館蔵「斎藤報恩会所蔵文書」）

史料 A は「牡鹿都遠嶋之内小寺網」の取り立てを中沢左近丞・遠藤右近丞に認めたもの、史料 B は「遠嶋之内孤崎浜一網出置候」と沼田藤八郎に網役を認めたもの、史料 C・D は石森掃部左衛門に対し、小渕但馬の「あとめ（跡目）」を認めたもの（史料 C）、「かしかつあミーちやう」を認め、その網役のうち油四斗・塩代役・肴代の三役を課したもの（史料 D）である。史料 A 宛所の両名について、遠藤右近丞は給分浜觀音堂の別当遠藤土佐の子孫であり、中沢左近丞は天正 16 年（1588）に葛西晴信から戦勝祈願の立願状とともに代物・神馬・懸物を奉納されていることから（「牡鹿郡十八成組給分浜代数有之御百姓書出」）、中沢神明社の神主と推定される〔入間田 1996〕。いずれも宗教者としての性格を有する葛西氏の給人と位置づけられよう。そのほか、小渕但馬は遠島の小渕浜を名字とする者と考えられ、沼田藤八郎は流庄沼田小屋屋主、石森掃部左衛門は登米郡石森城主（葛西氏滅亡後、遠島大原浜に移転）である〔入間田 1996〕。

葛西晴信黒印状による知行宛行のうち、牡鹿郡陸方に相当する地域では、勝間田主計助に「真野之内作場田五百刈、沼津之内牧司屋鋪」を（『石巻の歴史』8- 中世編 440、仙台葛西文書）、都沢豊前守に「高木在家」を与えており（『石巻の歴史』8- 中世編 455、仙台葛西文書）、「陸」と「浜」の違いは対照的である。すなわち、同じ宛行行為であっても、牡鹿郡真野村（近世の牡鹿郡陸方）では土

地を、遠島（近世の牡鹿郡浜方）では網役を対象としていたのであった。このことは、中世遠島には、「武」や「農」ではなく、「漁」を主な生業とする者たちの生活空間－「浜」の世界－が広がっていたことを示唆するものである。

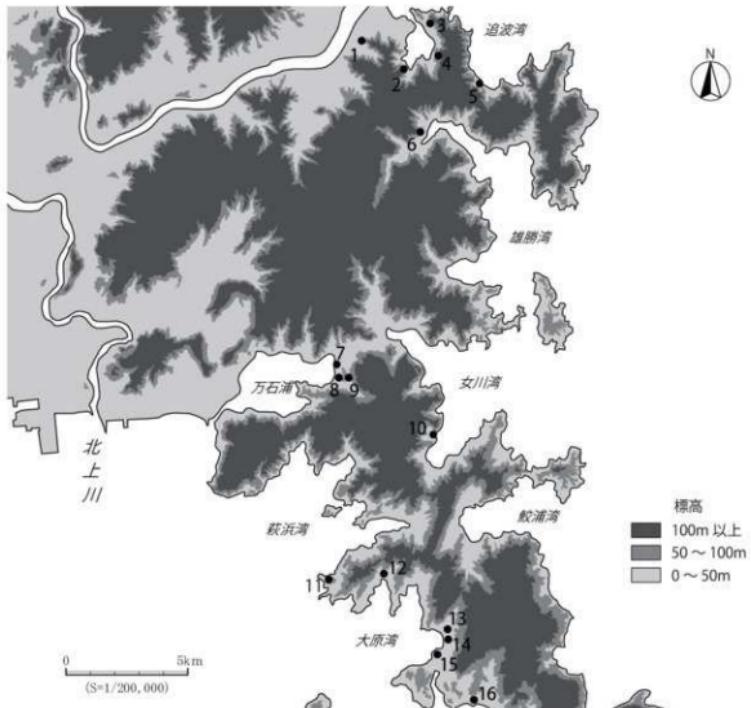
統いて、近世初期の史料から遠島の性格を確認したい。最も特徴的なのは、牡鹿郡浜方のみに賦課された「海上年貢」の存在である。水田の生産力の低い牡鹿郡浜方では、浜先漁場の漁獲高を見積もって設定する「海上御役」＝海上年貢が存在しており〔平川 1998〕、すでに寛永 18 年（1641）の孤崎組年貢割付状にその存在が確認できる（『石巻の歴史』9・近世編 177、石巻市博物館蔵『孤崎組大肝入平塚家文書』）。また、寛永元年（1624）の史料には、「桃生之内拾五浜・小鹿之内ミなど両所かこ御役」がみえ（『石巻の歴史』9・近世編 336、『石母田家文書』）、遠島には船の漕ぎ手に課せられる「水主役」が存在したことが判明する。天正 19 年（1591）11 月 2 日付粟野大膳宛伊達政宗過所黒印状では、名取郡闇上から牡鹿郡大原浜へ「俵物二百俵」を船で廻送させることを認めていることから（『仙台市史 伊達政宗文書』4-3605、『政宗君記録引証記』17）、すでに中世段階から遠島へつながる海の道が機能していたこと、遠島には操船技術に長け、漁業を生業とする者たちが住んでいたことが史料から裏づけられる。

以上、葛西晴信の家臣に対する網役の実行事例や、近世における年貢賦課のあり方からも窺えるように、中近世の遠島には「浜」に由来する地域的特性が存在していた。この点について、葛西氏滅亡後、牡鹿郡出身の葛西氏旧臣は一人も仙台藩士になっておらず、「牡鹿郡はまことに海民をはじめとする非農業民の定住地としての性格が強いところだった」とする大石直正の指摘は示唆的である〔大石 1992〕。地方知行制が採られた近世仙台藩においても、遠島に知行地を持つ給人はほとんどいない。わずかに牡鹿郡鮎川浜に「田宅」を有する村田善兵衛（召出、知行高 9 貢 581 文）がみえるものの、その知行地はすべて桃生郡内にあった〔石巻文化センター 1995〕。中近世の遠島を考察するには、「浜」としてのあり方を踏まえる必要があるといえよう。

（2）遠島の中世城館跡

中世遠島に該当する地域では、16 か所の中世城館跡の伝承地がある（第 4 図）。旧牡鹿郡浜方のうち、旧石巻・牡鹿地区に 6 か所（孤崎浜の孤崎城跡、福貴浦の福貴屋敷館跡、十八成浜の十八成館跡、大原浜の觀音館跡・石森城跡・中沢館跡）、女川町に 4 か所（針浜の館崎館跡・石塔場館跡・館の森館跡・横浦の横浦館跡）、旧桃生郡南方十五浜のうち、雄勝地区に 2 か所（雄勝浜の雄勝古館跡、名振浜の京ヶ森館跡）、河北地区に 4 か所（釜谷浜の長石武山城跡、尾崎浜の宮下館跡・大浦館跡・滝浜館跡）である。1 市 6 町が合併した現石巻市域では 100 か所を超える中世城館跡の伝承があるから、遠島における中世城館跡の分布密度は低いことが指摘できる。

次に、中世城館の構造に目を向けてみたい。いずれの城館跡も縄張図を欠き、略図が掲出されるにとどまる。城館跡の構造を正確に記録したものとしては、わずかに宮城県教委が作成した館崎館跡の測量図があるのみである。遠島の中世城館の傾向として、最も高い曲輪を中心に、数段の腰曲輪（段築）で構成される点が挙げられる。上位の曲輪と下位の腰曲輪は、土塁や空堀をもって独立して存在しているわけではなく、なだらかな段築によって緩やかに連結する傾向にあり、その関係が明瞭ではない



No.	城館名	市町村	所在地	墳丘伝承	発掘調査(参考)	面積	古跡類	出典	
1	長石武山城跡 (山城跡)	桃生郡 河北町	美谷浜 武山後	—	東西 80m、南北 20m 山頂平場に被削遺構なし、2段の土堤、2箇の空堀跡	—	A, B		
2	瀬戸城跡	桃生郡 河北町	花崎浜 武山十郎右(左)面前	—	平道、施設	—	A, B		
3	芦下城跡	桃生郡 河北町	尾崎浜	—	東西 120m、南北 80m 平道、南側に3~4段の土堤、二重堀	—	A, B		
4	大原城跡	桃生郡 河北町	尾崎浜	—	東西 50m、南北 25mの平場 南側に2段の土堤	—	A, B		
5	京・森御附跡 (史跡)	桃生郡 雄勝町	名脇浜	—	現在は埋め化され遺構不明	—	A, B		
6	舞鶴古城跡	桃生郡 舞鶴町	上郷野	—	東西 200m、南北 100 m 平道、簡易輪、西側尾根を扼する空堀	—	A, B		
7	船崎城跡	杜世郡 女川町	針浜	—	中世の遺構・遺物無し	東西 80m、南北 50m、3段の平場の跡	—	A, B, E, F	
8	石塔御附跡	杜世郡 女川町	針浜	—	—	東西 100m、南北 80m 遺構は確認できず、詳説不明	—	A, B, E	
9	相の森城跡	杜世郡 女川町	針浜	—	—	2段の輪塁	—	A, B, E	
10	横瀬御附跡 (史跡)	杜世郡 女川町	横瀬 木村上総	中世の遺構・遺物無し、 東西 200m、南北 100m 空堀は無く、廣々とした	—	（社）郡営横瀬村材木上 総（出典）	A, B, E, G		
11	乳崎城跡	杜世郡 石巻市	乳崎浜 既西一ノ段の乳崎尻部	—	人工的な段差、山頂間に石礫遺構	東西 200m、南北 200 m 木丸の平場、3段の輪曲輪、東西の輪曲輪の下に空	（社）郡営乳崎尻部材木上 総（出典）・既西乳崎跡	A, B, C	
12	島森御附跡	杜世郡 石巻市	福賀浦	—	—	東西 200m、南北 200 m 木丸の平場、3段の輪曲輪、東西の輪曲輪の下に空	—	C	
13	石森城跡 (大原城)	杜世郡 大原町	大原浜	戰国期は大原郡介合、 朝朝代滅滅後、石森姓 が在地開拓と耕作。	表土から中世陶器片 1 点	平道、施設、輪曲輪、石堀	「奥州御用西宮室御城 之伝記」・既西乳崎跡	A, B, D	
14	中沢城跡	杜世郡 大原町	辻分浜	—	中世の遺構・遺物無し	平道、施設、輪曲輪	—	B	
15	楓谷城跡	杜世郡 大原町	辻分浜	—	—	平道、南側に3段の土堤、空堀	—	A, B, D	
16	十八城城跡	杜世郡 大原町	十八城	—	—	平道、施設、南北へ細長い土城と石垣、木丸と輪曲	—	B	

参考書

- A:『聖橋正隆『史料 杜松藤内古城・城』第2巻、1973年
 B:『日本城郭大系 第7巻 山形・宮城・福島』新人物往来社、1961年
 C:『佐渡の歴史』第7巻、1995年
 D:『佐渡町史』上巻、1998年
- E:『女川町誌』編纂、1991年
 F:『宮城県文化財調査報告書第137集 大貫城山城跡はか』、1991年
 G:『宮城県文化財調査報告書第210集 平成26年度東日本大震災復興事業関連調査報告書』、2016年

第4図 中世遠島地域の中世城館跡分布図

ものが多い。後世に改変されてしまったのか、当初から設けられなかったのかは不明であるが、自治体史等の情報を通覧する限り、土塁・堅堀・横堀・堀切・切岸といった基本的な防御構造が存在しないものもあるようだ。

中沢館跡の場合、中世にさかのぼるような遺構・遺物は今回の発掘調査では検出されていない。これまで報告されていた館跡東部の空堀に関しても、現地踏査によって堀というよりも溝に近い規模であることを確認した。石森城跡は、今回の発掘調査により、平場の一部や土塁・石塁などの遺構の年代が17世紀以降であることが判明した。また、両館跡の近くにある、給分浜の觀音館跡について、現地踏査を行ったところ、これまで指摘されてきた平場と土塁は確認できたものの、城館遺構らしきものは確認できなかった（この点について、紫桃正隆は山頂の平場と南面の数段の土壇以外「城館の遺構らしいものは何も見つからない」とするが、『牡鹿町誌』上巻では北東部の岬と西側に空堀、土塁と土壇に囲まれて独立した長方形の平地の存在を主張する）。1989年に宮城県教育委員会が発掘調査を実施した館崎館跡についても、自然地形を生かした3段の平場で構築され、本丸と二の丸とみなせる平場や通路状の平場があることは確認されたが、館跡全体の約三分の一に相当する本丸北東部からは城館にかかる遺構も遺物も検出されていない〔宮城県教委1990〕。横浦館跡では、遺跡全体の約67%を占める館跡西部について発掘調査を実施したが、遺構・遺物は確認されず、館跡にともなう造成や構築の痕跡も認められなかった〔宮城県教委2016〕。発掘調査を行った城館跡が限られているため、地下に眠る遺構や遺物に関する情報は詳らかではないが、中世の遺構や遺物はほとんど確認されていないのが現状である。

なお、館崎館跡の発掘調査報告では、宮城県遺跡地図に掲載している中世城館跡について、紫桃正隆の成果を根拠としながら城館名・位置を記載したものの、紫桃説に対しては「調査成果の一部には中世の館跡としての遺構があるかどうか疑問をもたれているものがある」ことを指摘する。すなわち、紫桃が比定した石塔場館跡の位置は『日本城郭大系 第三巻 宮城県』では詳細不明とされ〔藤沼ほか1981〕、女川町字針浜にある善五郎館跡は近世初期の可能性が指摘されているように〔藤沼ほか1981〕、その信憑性を疑問視した見解がある。前述の横浦館跡に関しては、発掘調査の結果、紫桃が報告した「空堀」は小径としての利用及び筆界を示すきわめて新しい「敵」と「溝」である可能性が指摘され、館跡西部は単なる「自然地形の丘陵である」ことが明らかとなり、遺跡範囲が改められている〔宮城県教委2016〕。

県主体の中世城館跡分布調査が実施されていない宮城県において、県内全域の中世城館跡の情報を網羅的に集積した紫桃の成果は非常に大きい。しかし、大浦館跡の事例が象徴するように、紫桃自身の踏査によって、從来貝塚だと言われてきた場所を、「江戸時代以前の館（或は富有的者の屋敷）あとと推定、一応、書き上げて置いた。解明は今後の課題」と述べた箇所があることには注意を払いたい〔紫桃1973〕。紫桃の調査は、遺跡の性格を保留したまま、情報を網羅的に拾い上げた側面があることには留意すべきであろう。刊行から半世紀近く経つ現在もなお、紫桃の成果は県内の城館調査の基礎文献であり続けるが、そろそろ内容を再検討する段階に来ているのかもしれない。

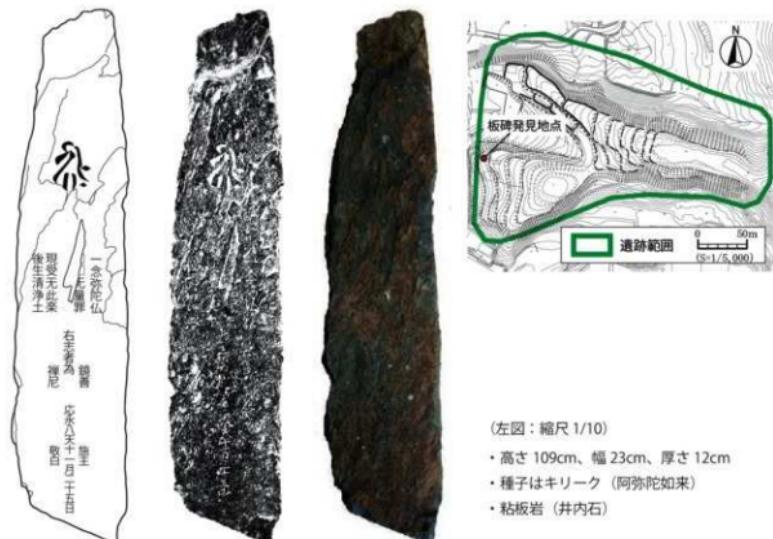
ところで、16か所の伝承地のうち、古記録等に城主伝承が確認できるのは、孤崎城の孤崎民部、

大原城（石森城）の大原掃部介、横浦館の木村上総に限られる。「葛西真記録」に本吉郡十三浜の小滝浜城主とみえる武山十郎左衛門は、滝浜城から移転したことが推定されるが、ほとんどの城館跡に城主が伝わっていない。中世の遺物や大規模戦争に対応しうる防御遺構が確認できることを踏まえると、遠島の中世城館伝承地を、ただちに武士或いは領主層の拠点として理解してしまうことには慎重でありたい。

遠島の中世城館伝承地は、海がよくみえる丘陵上に多い。遠島の性格が「浜」である点を踏まれば、それらの場所の役割は、防御施設というよりも、むしろ物見台など、漁業や船の航行における役割を想定する方が相応しいのではなかろうか。横浦館の木村上総は、天正20年（1592）伊達政宗の黒印状により、横浦からの「俵物うんそうの船」について、名取郡閑上・蒲崎・宮城郡塩釜・磯崎の4か所から順次第に、1月に1搜ずつ、廻船させることを命じられている（『仙台市史 伊達政宗文書』2-924、木村（信二）家文書『牡鹿郡横浦風土記書出』所載）。この事例が示すように、遠島の城館主は海と密接な関わりを持つ者たちであった。その中世城館に関しても、海を含めた生活空間から捉え直すことで、位置づけがより明瞭になると考える。

遠島の中世城館をめぐっては、文献史料に加えて、縄張図作成調査や発掘調査による確かな成果を蓄積し、①城館跡の構造や性格を明らかにすること、②既存の報告が中世城館跡と認定してきた場所を再評価することが今後の課題といえよう。

（3）中沢館跡の板碑



第5図 中沢館跡新発見板碑

中沢館跡の所在する大原浜中沢では、親応3年（1352）・応永2年（1395）・応永35年（1428）の紀年銘を有する板碑3基が確認されている（『牡鹿町誌 中巻』）。これらに加えて、今回の発掘調査に伴う周辺踏査の過程で、中沢館跡から応永8年（1401）の紀年銘を持つ、粘板岩（井内石）の板碑を発見した。令和2年（2020）大原区長を通じて石巻市教育委員会に寄贈され、現在は石巻市博物館資料として収蔵している。本調査区域の範囲外ではあるものの、中沢館跡に関する貴重な文字情報であることを鑑み、当板碑の基礎情報を以下に記す（第5図）。

史料E：中沢館跡採取板碑

一念弥陀仏			
[^(omg)]	无量罪	鏡善	施主
阿彌陀如來 [キリーケ]	右志者為	応永八天十一月二十五日	
現受無此樂	禪尼	敬白	
後生清淨土			

応永8年11月25日、鏡善禪尼（女性）を供養するために立てられた板碑で、種子はキリーケ（阿弥陀如来）、偈の出典は『觀世音菩薩往生淨土本縁經』である。同一の偈を持つ板碑は、遠島では桃浦字向（『石巻の歴史』8-板碑 半島部・田代島32）、寄磯浜の熊野神社行屋跡（『牡鹿町誌』中巻・板碑 寄磯浜10）、針浜集会所前（『女川町の板碑』31）、横浦字名不知（『女川町の板碑』23）などに確認できる。

石巻の板碑の特徴として、①地元産の石材（粘板岩の井内石・雄勝石）の使用、②1300年前後から「右為」を中心におく、独創的な銘文配列の出現、③多様な種子や偈の存在、④改刻・再利用の板碑が多いことなどが指摘されている〔千々和1995〕。当板碑は、「右志者為」を中心配置し、石材に地元産の粘板岩が使用されるなど、石巻特有の地域性がよく現れている。

【引用参考文献】

- 石巻市史編さん委員会 1992 『石巻の歴史 第8巻 資料編2 古代・中世編』、石巻市
石巻市史編さん委員会 1995 『石巻の歴史 第7巻 資料編1 考古編』、石巻市
石巻文化センター 1995 『企画展 石巻地域の伊達家臣』、石巻文化センター
入間田宣夫 1996 『中世編 第4章 中世の民衆生活』（『石巻の歴史 第1巻 通史編上』、石巻市）
大石直正 1986 「奥羽の莊園公領についての一考察—遠島・小鹿島・外が城—」（同『中世北方の政治と社会』校倉書房、2010年）
大石直正 1992 『葛西氏の歴史 第4章 葛西・大崎一揆』（『石巻の歴史 第6巻 特別編』、石巻市）
大石直正 1996 『中世編 第1章 北上川の中世のはじまり』（『石巻の歴史 第1巻 通史編上』、石巻市）
牡鹿町誌編纂委員会 1988 『牡鹿町誌』上巻、牡鹿町
牡鹿町誌編纂委員会 2005 『牡鹿町誌』中巻、牡鹿町
女川町教育委員会 2001 『女川町文化財調査報告書第2集 女川町の板碑』
女川町誌編さん委員会 1991 『女川町誌』統編、女川町
紫桃正隆 1973 『史料 仙台領内古城・館 第2巻』、宝文堂
千々和到 1995 「石巻の板碑と「東北型」板碑の再検討」（『六軒丁中世研究』第3号、東北学院大学中世史研究会）
平川 新 1998 「近世編 第5章 浜の生活」（『石巻の歴史 第2巻 通史編下の1』、石巻市）
藤原邦彦・小井川和夫ほか 1981 『日本城郭大系 第三巻 宮城県』、新人物往来社
宮城県教育委員会 1990 『館崎館跡』（『宮城県文化財調査報告書第137集 大貫館山跡ほか』）
宮城県教育委員会 2016 『横浦館跡』（『宮城県文化財調査報告書第240集 平成26年度東日本大震災復興関連遺跡調査報告Ⅲ』）

第3章 石森城跡

1 石森城跡の歴史

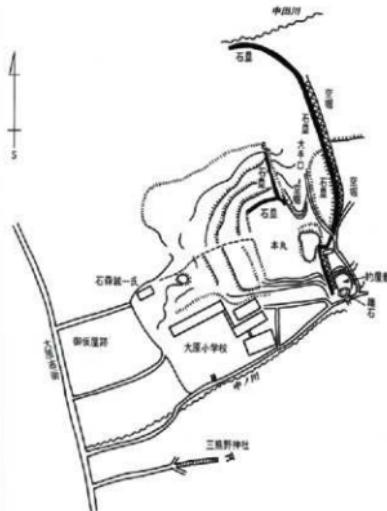
石森城跡に関する明確な記録は、中世および近世の文書には認められない。石森城という名称は、石森氏に由来する。石森氏は葛西氏と祖を同じくし、歴代登米郡中田の石森（現在の登米市中田町石森）を領地としていた。葛西氏滅亡後、石森捕部左衛門らは浦知行を持っていた牡鹿郡の大原浜へと落ち延び、石森城に居を構えて隠棲したと伝えられている（牡鹿町誌編纂委員会 1988）。一方、幕末の文久元年に作成された『奥州領葛西臣家（家臣）居城之傳記』には、大原村にある「大原城」の記載があり、東西四十間、南北三十一間、城主は大原捕部と記されている。近世に成立したとされる『葛西真記録』にも大原邑主として「大原捕部介」の名がみえる（東北歴史資料館 1990）。この大原捕部介と前記の石森捕部左衛門について、紫桃正隆は同一の人物ととらえているが（紫桃 1973）、『牡鹿町誌』は別人とし、元は大原氏が築いた城の跡を石森氏が居館としたと述べている。その後藩政期に入ると、石森捕部左衛門の息子3人は伊達家へ仕官する。元和5年（1615）、藩主が鹿狩りなどの際に滞在する御仮屋が大原浜に設けられると、石森氏はその留守居役である御仮屋守を命ぜられた。また、大肝入も務めるなど、石森氏はその後も地域における有力な存在であった事が分かる。

石森城跡に関する調査は、紫桃正隆により先鞭がつけられており、地形から東側が大手口にあたると推測し、全体に城砦的というよりは屋敷らしい構造の城館と評価している（紫桃 1973）。また、藤沼邦彦は城の東側に位置する南北方向の長大な石塁と空堀に着目し、尾根を遮断し東側の境となるものと想定しているが、この石塁は250

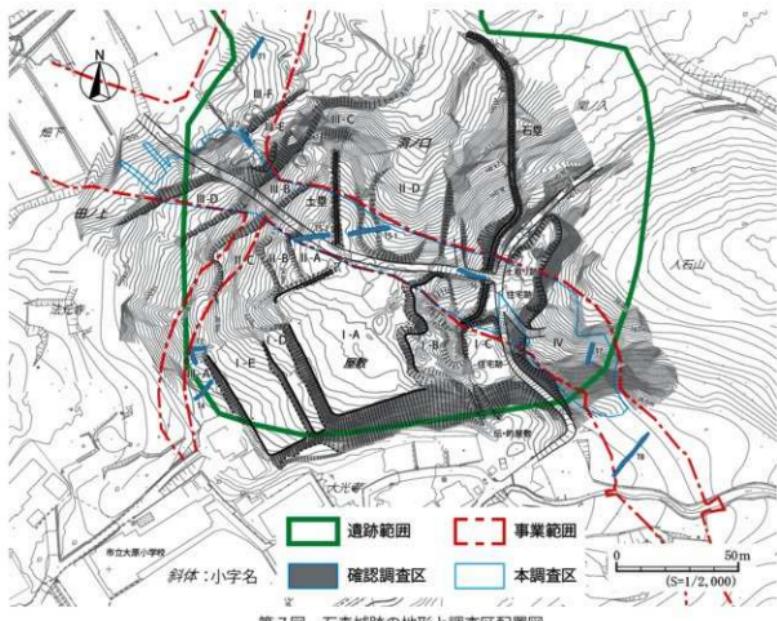
m以上も続き、猪除けともいわれていると付言している（藤沼 1981）。『牡鹿町誌』はこの石塁を城跡に伴うものととらえ、石森城は厳重な構えの城であると述べている（第6図）（牡鹿町誌編纂委員会 1988）。

2 石森城跡の地形と縄張り

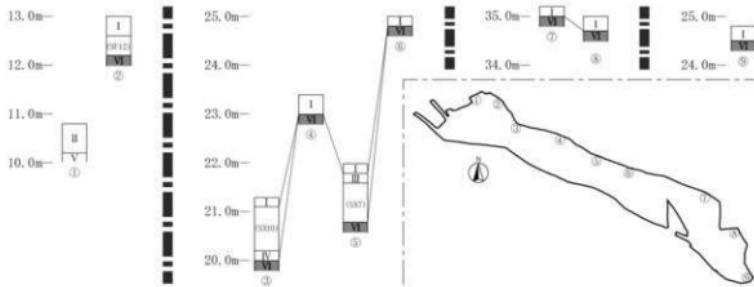
今回の発掘調査に当たって、事前に行った地形測量および踏査の結果は第7図のとおりである。調査前は山林となっていた。本丸と伝わる平場（I-A）とその西側に連なる2段の平場（I-D・E）は非常に平坦で、端部も明瞭に認められる。さらに西も平場状を呈するが、現在は宅地になっている。I-Aの北東隅部へは北から深い谷が入り込む（II-D）。I-Aの東には自然



第6図 石森城跡略図（『牡鹿町誌』所収）



第8図 石森城跡縄張り想定図



第9図 基本層序柱状図

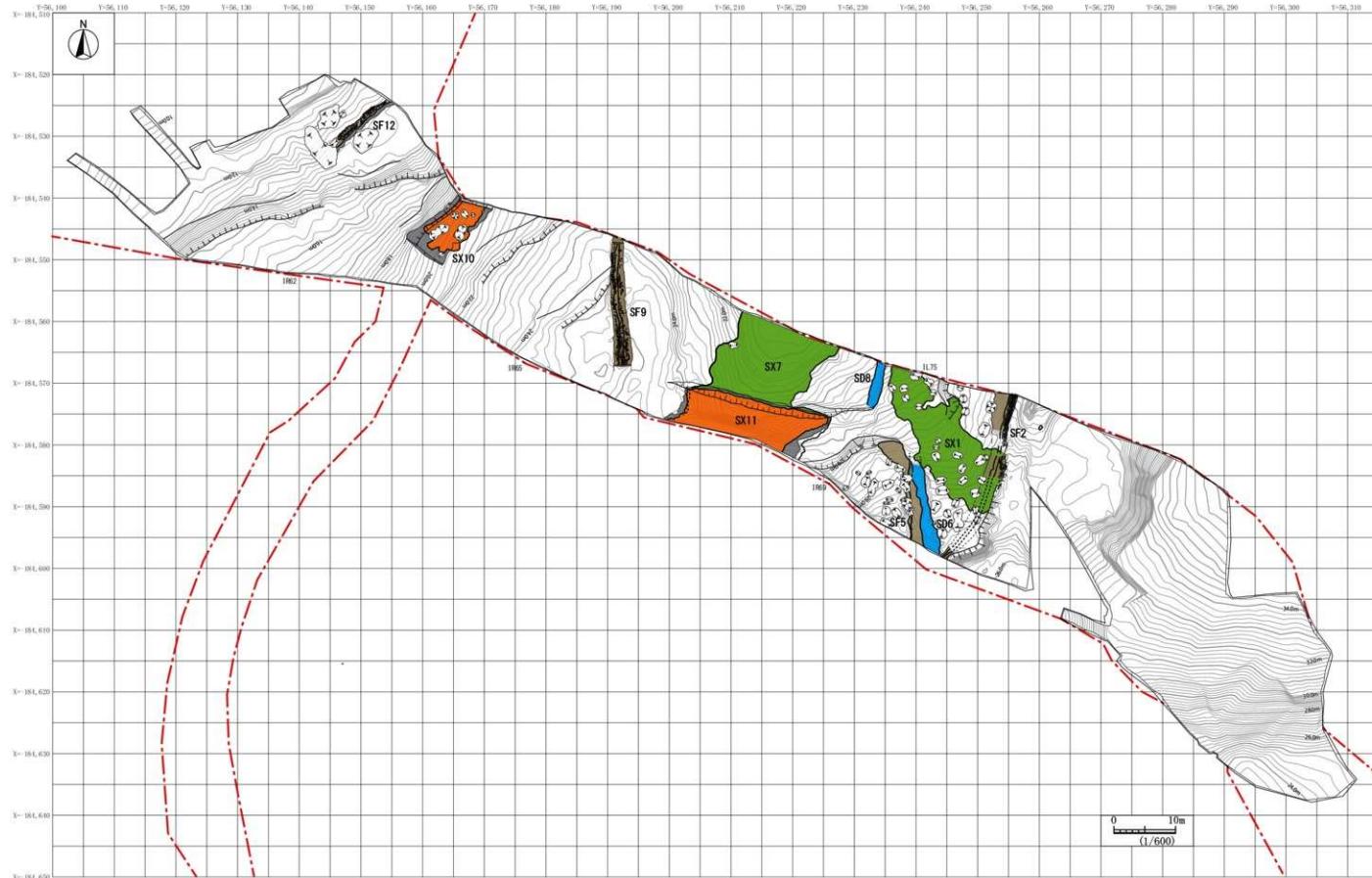
地形を残した高まり（I -B）があり、その東側には段状となっている部分が認められた。そのさらに東側には上記の石壁が北に向かって延びている。その外側は近代に土取りや宅地のため削平を受けた部分（I -C）を挟んで、丘陵尾根の自然地形（IV）が続いている。平場 I -A の北西にも何段かの平場状の段が続くが（II -A ~ C）、段差は明瞭ではない。このうち II -A から北に向かって南北方向の土壁が延びているが、斜面手前で途切れている。北西部の III -B • D • E は緩斜面と急傾斜により段状を呈しており、その外側（III -F）は旧水田の低地となっている。

以上の観察の結果から、想定される石森城跡の縄張りを第8図に示す。平場と想定したのは平場 I (第4図の I -A)、平場 2 (同 I -D)、平場 3 (同 I -E)、平場 4 (同 III -C) である。南西側を正面とする4段の平場から構成され、堀や土壁等の明確な防御施設は伴わない屋敷跡としての姿を推定した。平場群の北西に広がるいくつかの段は、端部が不明瞭で段差も低く、畠等耕作に伴うものとみられる。平場 I 北側の土壁、および北東側にある長大な石壁については、平場群と方向が異なり、平場を守るような配置でもないことから、土壁は土地の区画に伴うもの、石壁は猪垣等の獣除けの施設と考えられる。平場 I 北辺にも北から延びる土壁の続きが部分的に認められるが、これは西辺や南辺には認められず、平場に本来伴っていたものとは考えられない。各平場の北西隅部は形が明瞭でなく、下から平場 I へ登るスロープ状の坂道となっているが、この部分を通路として利用し、浜側の集落と行き来をしていたと想定される。

3 調査の方法と経過

調査対象地は遺跡範囲の南側、城跡の主要な平場群の北辺部にあたる。県道石巻鮎川線給分浜復興道路は、この場所を北西から南東に貫くルートで計画され、本線部分のほか、県道牡鹿半島公園線（コバルトライン）への接続道路、大原浜集落からの取付道路部分が含まれる。調査対象面積は約 6,000 m² である。

発掘調査にあたって、事前に対象地およびその周辺の現地形測量を実施した。測量は電子平板を使用し、令和2年6月11日から2週間ほどかけて行った。その結果を元に、対象地周辺を I ~ IV 区に区分し、地形の特徴などからそれをさらに細分した。このうち調査対象範囲に含まれるのは、主郭



第10図 石森城跡遺構配置図

北端部などの一群（I-A～C区）、主郭に隣接する北側の平場と谷部（II-A・C・D区）、丘陵北下部の平場と低地部（III-B・D～F区）、対象地東端の一段高い尾根上部分（IV区）が該当する。

発掘調査は8月3日から開始した。調査は東端のIV区から開始し、順次西側へと進める形で掘削・精査を行った。その結果、土壙・石壙等4条、溝跡2条、整地層2箇所、遺物包含層2箇所などを検出した。

調査区や遺構の平面図作成には電子平板を使用し、測量に際しては事業側が打設した基準点等を使用した。主な基準点は以下の通り。

IR62 X=-184,552.596 Y=56,139.149 IR65 X=-184,566.816 Y=56,176.510

IR69 X=-184,586.339 Y=56,225.949 IL75 X=-184,568.279 Y=56,241.057

また、断面図は1/20の縮尺で手実測により作成したが、一部電子平板も併用した。写真撮影には2,416万画素のデジタルカメラを使用した。11月18日にはラジコンヘリコプターおよびドローンによる空中撮影を行った。遺構精査および記録については11月25日に完了し、11月27日に機材等を撤収して調査を終了した。

4 基本層序

調査区は、標高20～35m程の丘陵上から、西端部の丘陵裾部から広がる標高10m程の低地である。現況は丘陵上が山林、低地が旧水田の低湿地となっている。遺構確認面はV層だが、西端の低地に位置するIII-F区では確認できず河川堆積物による砂礫層（V層）が認められた。

I：表土。暗褐色（10YR3/3）のシルトが主体だが、I-B区など一部では灰黄褐色（10YR4/2）の粘土質シルトもみられる。層厚20～40cm。

II：水田耕作土。グライト化した粘質土。調査区西端のIII-F区に広がる低地部で確認した。層厚60cm。

III：近世以降の流入土。SX7 遺物包含層・SX11 整地層の崩壊土等による2次堆積層である。II-D区北側の谷状地形でのみ確認した。灰黄褐色（10YR4/2）のシルトで、小砾や縄文土器片を少量含む。層厚10～25cm。

IV：縄文時代前期以降の旧表土。黒褐色（10YR3/2）の粘土質シルトが主体。谷状地形や整地層下などで確認した。層厚20～50cm。

V：河川堆積層。砂礫層。調査区西端のIII-F区に広がる低地部で、水田耕作土の下から確認した。遺跡の北側を流れる小河川の中田川に由来する堆積物とみられる。

VI：地山。地点により大きく様相が異なり、調査区東側のIV区では砂礫を多く含む黄褐色シルト、I-C区以西では黄褐色の粘土質シルトが主体を占めるが、II-A区のSF9 土壙付近では灰白色～暗褐色を呈する凝灰岩質の岩盤が露出している。

5 検出遺構と遺物

土壙・石壙等4条、溝跡2条、整地層2箇所、ピット1個、遺物包含層2箇所を検出した。これらの遺構は、層序や遺構の埋土・遺物などにより、遺物包含層が縄文時代、それ以外が近世以降に大別できることから、以下の各遺構と遺物の説明は縄文時代と近世以降に分けて記述する。遺物は縄文土器、石器、中世陶器、近世陶磁器があり、総量はコンテナ51箱である。

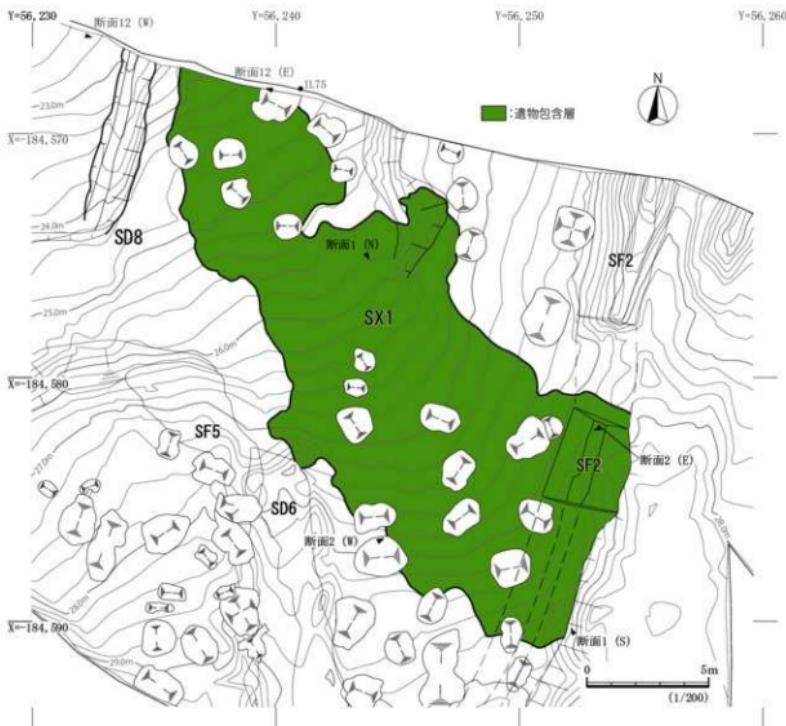
(1) 縄文時代

A. 遺物包含層

【SX1 遺物包含層】(第11～19図)

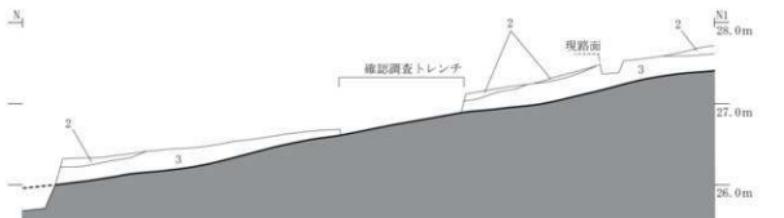
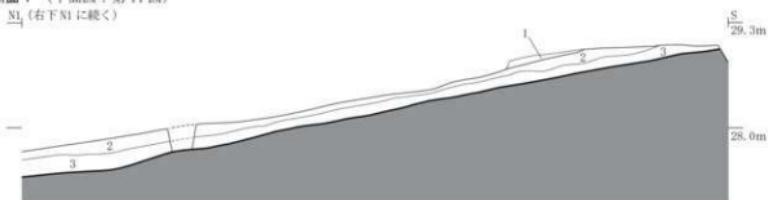
I-B区で検出した。南東から北西に向かって傾斜する斜面に分布しており、さらに調査区外の北側へ広がる。SF2石壙・SD6溝跡より古い。

〔規模〕幅約9.5m、奥行き約25.5m、厚さは最大で0.5mである。

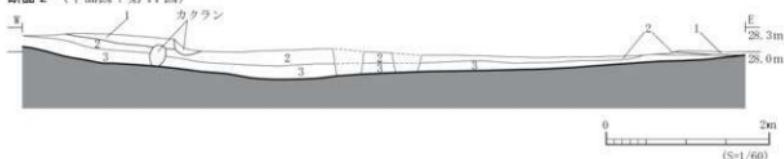


第11図 SX1 遺物包含層・SD8 溝跡平面図

断面1 (平面図: 第11図)



断面2 (平面図: 第11図)



層	土色	土性	混入物など	番号	大別層
1	暗褐色 (10YR5/3)	シルト	炭化物・焼土・遺物を少し含む	SX1-1層	大別1層
2	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・焼土を含む。遺物を多く含む	SX1-2層	大別2層
3	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・焼土・遺物を含む	SX1-3層	大別2層

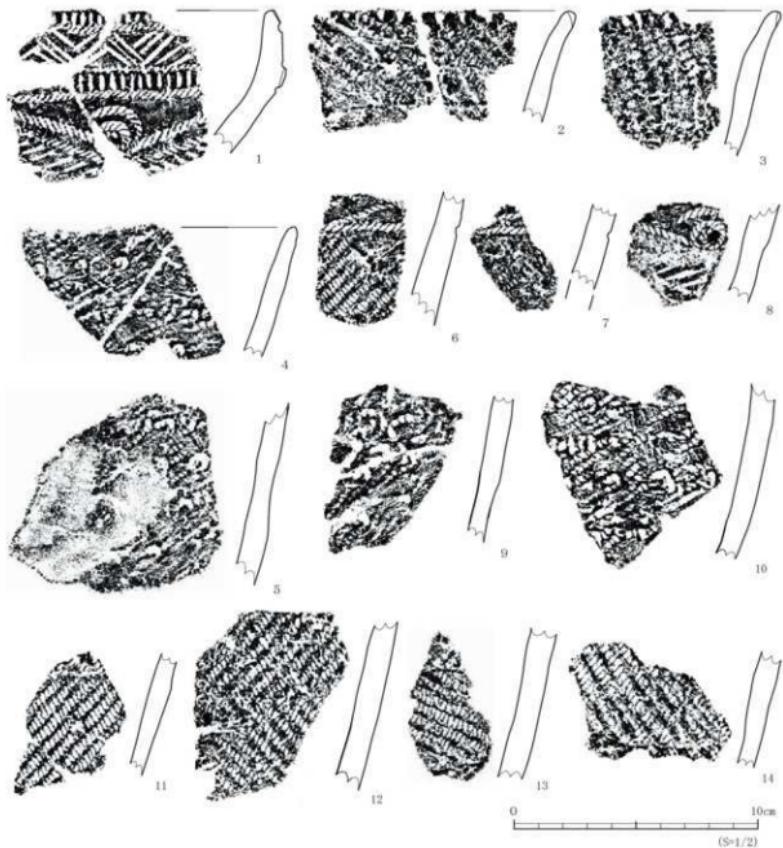
第12図 SX1 遺物包含層断面図

[堆積土] 3層に分けられる。最上層の1層は斜面上方に分布し、層厚は最大15cm、暗褐色シルトで、炭化物・焼土・遺物を少し含む。2層はほぼ全体に分布し、層厚は最大20cm、黒褐色シルトで、炭化物・焼土を含み、遺物を多く含む。3層もほぼ全体に分布するが、層厚は斜面下方が比較的厚く最大25cm、暗褐色シルトで、炭化物・焼土・遺物を含む。

[出土遺物] 遺物は1～3層の各層や確認面から縄文土器・石器が出土している。層の状態や遺物出土状況をみると、3層・2層は全体に分布し遺物が多く出土した一方、1層は部分的にしか残っておらず、2層とは土色や混入物の量に違いが認められた。このため、遺物の特徴は3層・2層と1層・確認面に分けて記述する。

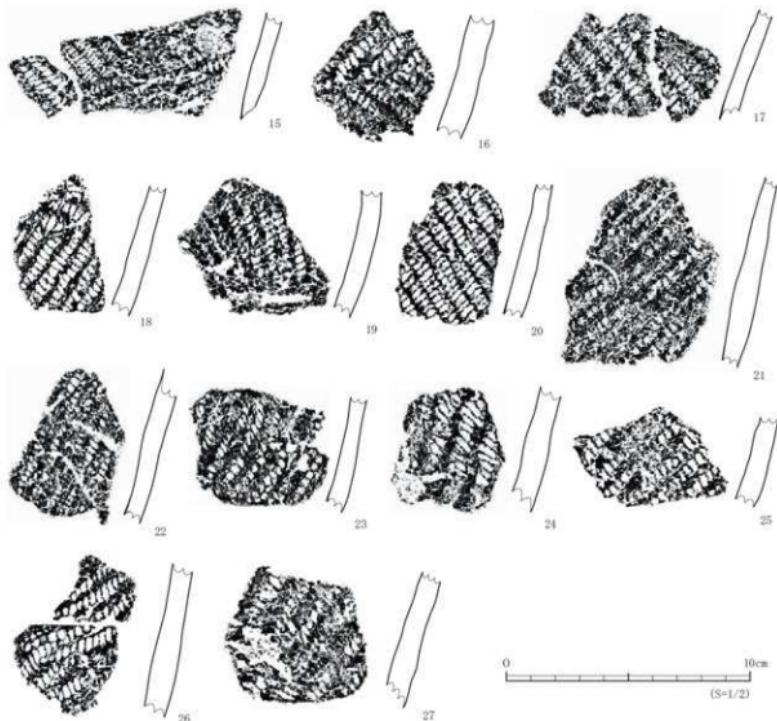
①大別2層（3層・2層）

抽出土器は40点、図示したのは27点で、器種はすべて深鉢である（第13・14図）。平線で、口縁部は2・3が外傾し、1は内湾の直立する。ほかに弱い外反が認められる。1～3は口縁上端



No.	器種	部位	種類	外観	内面	破損	通考	参考文献記述
1	陶文土器	口縁部	口縁部	2層 口縫上端に斜目(縦目)。溝巻状撓糸压痕(L・R) + 斜沈線+斜目	△ガキ	○	601	10-1
2	陶文土器	口縁部	口縁部	2層 口縫上端に斜目(縦目)。斜行彫文(RL)	ナゲ	○	605	10-2
3	陶文土器	口縁部	口縁部	3層 口縫上端に斜目(縦目)。斜行彫文(RL)	ナゲ	○	571	10-3
4	陶文土器	口縫部	口縫部	2層 側面ハーフ文(LR)	ナゲ	○ 4・5は同一個体	609	10-4
5	陶文土器	口縫部	口縫部	2層 側面ハーフ文(LR)	ナゲ	○ 4・5は同一個体	609	10-9
6	陶文土器	口縫部	口縫部	2層 撓糸压痕(L・R)。非結束羽状彫文(LR・RL)	ナゲ	○	602	10-5
7	陶文土器	口縫部	口縫部	2層 撓糸压痕(R)。非結束羽状彫文(LR・RL)	ウ(マメツ)	○	603	10-6
8	陶文土器	口縫部	口縫部	2層 溝巻状撓糸压痕(L・R) + 斜沈線	ナゲ	○	604	10-7
9	陶文土器	口縫部	口縫部	3層 直筋大端ハーフ文(LR)	ナゲ	○	580	10-8
10	陶文土器	口縫部	口縫部	3層 側面ハーフ文(LR)	ナゲ	○	578	10-10
11	陶文土器	口縫部	口縫部	3層 非結束羽状彫文(LR・RL)	ナゲ	○	588	10-12
12	陶文土器	口縫部	口縫部	3層 非結束羽状彫文(LR・RL)	ナゲ	○	581	10-11
13	陶文土器	口縫部	口縫部	3層 非結束羽状彫文(LR・RL)	ナゲ	○	589	10-14
14	陶文土器	口縫部	口縫部	3層 非結束羽状彫文(LR・RL)	ナゲ	○	579	10-13

第13図 SX1遺物包含層出土土器(1)一大別2層

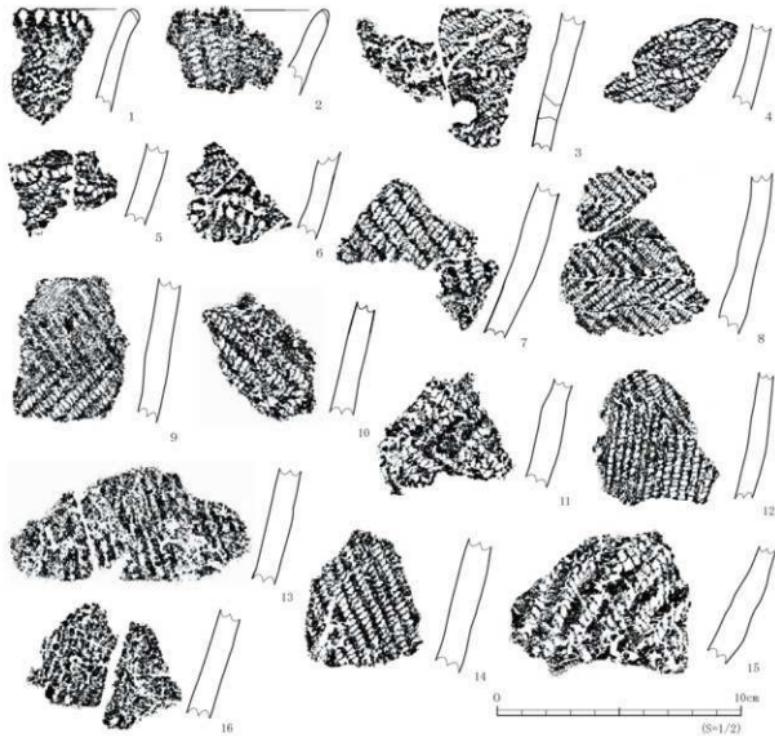


No.	器種	部位	層位	外面	内面	堆積	発見	既報	参考文献
15	縄文土器・深鉢	鉢部	3層	非結束羽状縄文 (LR+RL)	ナデ	○	菱形に施文	582	10・15
16	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	非結束羽状縄文 (LR+RL)	ナデ	○		698	10・16
17	縄文土器・深鉢	鉢部	3層	斜行縄文 (BL)	ナデ	○		599	10・17
18	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	非結束羽状縄文 (LR+RL)	ナデ	○		696	10・18
19	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (BL)	ナデ	○		613	10・19
20	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (RL)	ナデ	○		611	10・20
21	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		612	10・22
22	縄文土器・深鉢	鉢部	3層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		596	10・21
23	縄文土器・深鉢	鉢部	3層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		598	10・23
24	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		615	10・24
25	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		610	10・27
26	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		614	10・25
27	縄文土器・深鉢	鉢部	2層	斜行縄文 (LR)	ナデ	○		697	10・26

第14図 SX1 遺物包含層出土土器 (2) 一大別2層

に刻目を持つ。文様は、1・6～8が渦巻状の燃糸圧痕や短沈線で広い文様帯を形成するが、2・3は刻目の下が縄文である。

縄文は6・7・11～18が非結束羽状縄文、2・3・17・19～27が斜行縄文、4・5・10が側面ループ文、9が重層末端ループ文である。抽出土器全体でみると、縄文は0段多条がほとんどで、非結束羽状縄文が多く、次いで斜行縄文、ループ文の順となる。内面はナデがほとんどで、ミガキはわずかに認められる。



No.	器種	部位	層位	外面	内面	縞様	備考	登録・写真図版
1	圓文土器・深鉢	口縁部	II段上端に斜目(縞位)	斜行縞文(HL)	ナゲ	○		621 11-28
2	圓文土器・深鉢	口縁部	II段上端に斜目(縞位)	斜行縞文(HL)	ナゲ	○		622 11-29
3	圓文土器・深鉢	口縁部	II段上端に斜目(縞位)	斜行縞文(HL), 捻袖孔	ミガキ	○		623 11-32
4	圓文土器・深鉢	腹部		縞認面 剥離ループ文(LR)	ミガキ	○		625 11-30
5	圓文土器・深鉢	腹部		縞認面 未端ループ文(LR)	ミガキ	○		624 11-31
6	圓文土器・深鉢	腹部	1層	粘附斜行縞文(HR)	ナゲ	○		617
7	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行束縛斜行縞文(HR+HL)	ナゲ	○		618 11-35
8	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行束縛斜行縞文(HR+HL)	ワ(マツフ)	○		626 11-33
9	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行束縛斜行縞文(HR+HL)	ワ(マツフ)	○		627 11-34
10	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行束縛斜行縞文(HR+HL)	ナゲ	○		616 11-36
11	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行束縛斜行縞文(HR+HL)	ナゲ	○		629 11-37
12	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行縞文(HR)	ナゲ	○		628 11-40
13	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行縞文(HR)	ナゲ	○		631 11-41
14	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行縞文(HR)	ナゲ	○		630 11-38
15	圓文土器・深鉢	腹部	1層	斜行縞文(HL)	ナゲ	○		619 11-39
16	圓文土器・深鉢	腹部	1層	擦痕文(R)	ナゲ	○		620

第15図 SX1遺物包含層出土土器(3)一大別1層

石器は24点出土した。石鎚1点、石匙2点、楔形石器1点、打製石斧5点、磨製石斧1点、磨石・敲石類6点、石皿・台石類4点、不明石製品2点、石核が出土している。このうち7点を図示した。

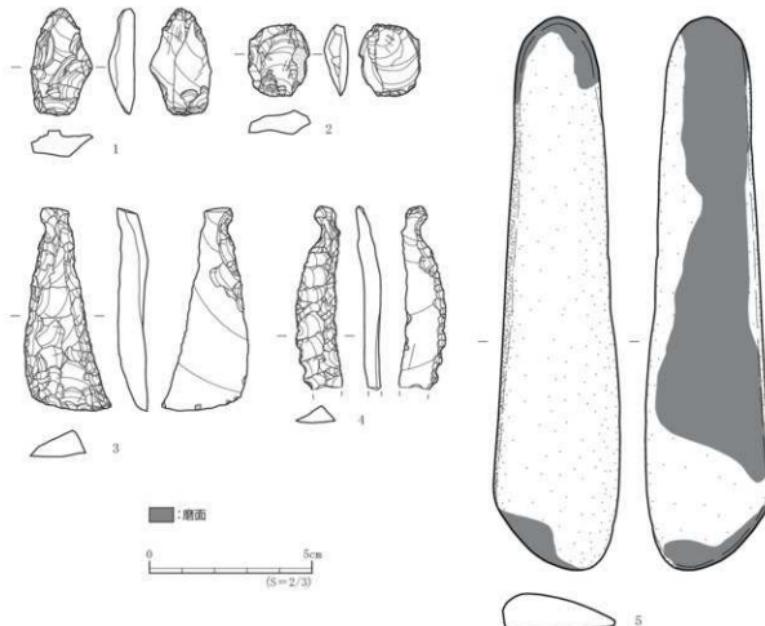
石鎚は未成品である(第16図1)。楔形石器は対になる2辺1組に両極剥離痕を有する(第16図2)。石匙はつまみ部に対して先端部が縦型のものである(第16図3・4)。打製石斧は左右対称で全体の

形状が楕円形を呈するもので、刃部が欠損している（第 17 図 1）。磨石・敲石類は円礫を素材とし、磨面や敲打痕がみられる（第 17 図 2）。不明石製品は細長い礫を素材とし、研磨により扁平な棒状に加工している（第 16 図 5）。

②大別 1 層（1 層・確認面）

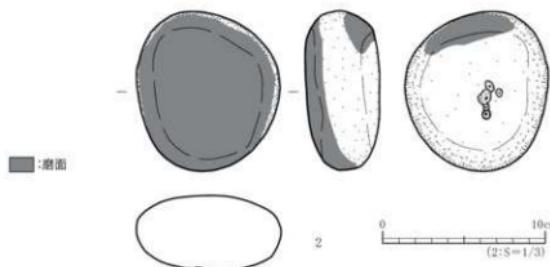
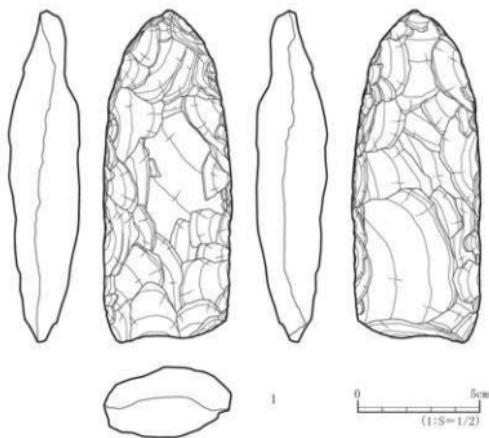
抽出土器は 25 点、図示したのは 16 点で、器種はすべて深鉢である（第 15 図）。平縁で、口縁部は 1・2 とも外傾し、上端に刻目を持つ。縄文は 7～11 が非結束羽状縄文で、1・2・6・12～15 が斜行縄文、3・5 が末端ループ文、4 が側面ループ文、16 は撚糸文である。抽出土器全体でみると、縄文は 0 段多条がほとんどで、斜行縄文が多く、次いで非結束羽状縄文、ループ文、撚糸文の順となるが、撚糸文は極めて少ない。内面はナデが多いが、ミガキも認められる。

石器はサブトレンチで出土し、1～3 層として取り上げた物も含めて 15 点出土した。石鏹 1 点、石匙 1 点、箆状石器 1 点、板状石器 1 点、打製石斧 3 点、磨石・敲石類 5 点、石皿・台石類 2 点、石棒・



No.	遺構・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	残存	備考	登録 No.	写真図版
1	SX1 2 層	石鏹	32.2	18.1	7.1	4.2	珪質岩	破片	未製品	S075	19-1
2	SX1 3 層	複形石器	22.8	18.2	7.0	2.9	珪質岩	完形	両端に微小削離痕	S054	19-2
3	SX1 2 層	石匙	63.4	22.2	7.6	11.3	珪質岩	完形		S032	19-3
4	SX1 3 層	石匙	(55.9)	12.4	5.3	3.9	珪質岩	一部欠	先端部欠損	S043	19-4
5	SX1 3 層	不明石製品	168.9	38.4	11.7	106.5	粘板岩	完形	研磨による成形	S071	19-6

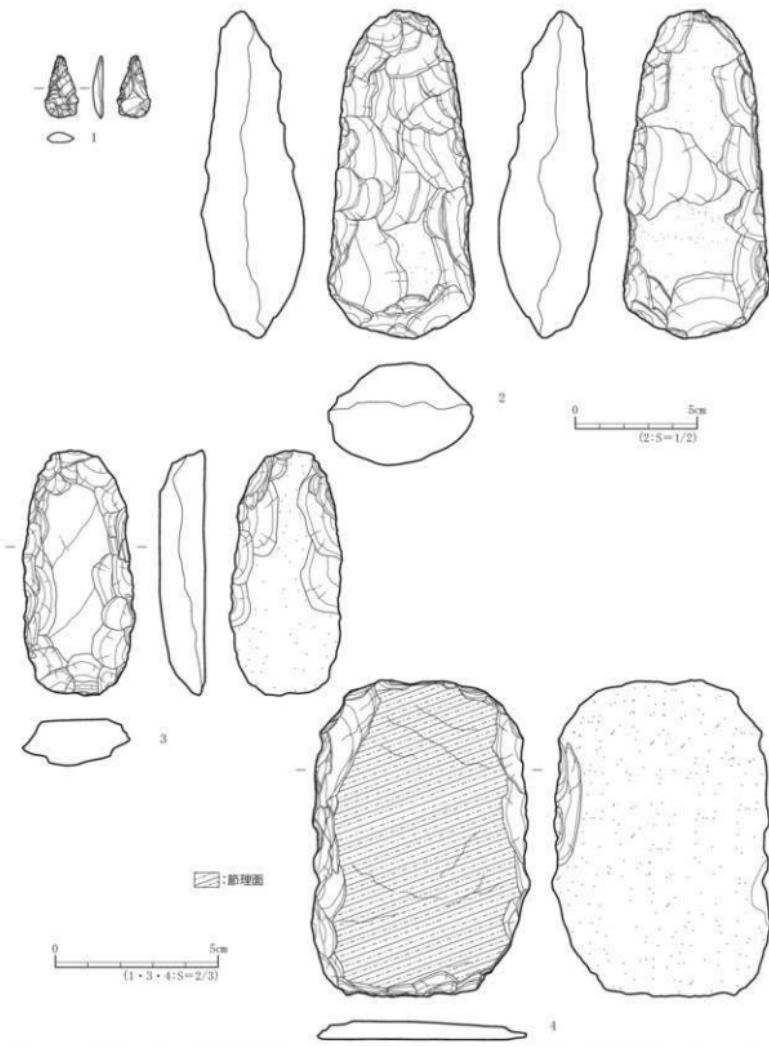
第 16 図 SX1 遺物包含層出土石器（1）



No.	遺物・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重巻 (g)	石材	残存	備考	登録No.	参考図版
1	SX1-2層	打製石斧	131.2	50.3	29.8	230.7	安山岩	一部欠		5064	19-5
2	SX1-3層	磨石・敲石類	98.9	88.8	45.5	577.5	砂岩	完形		5049	19-7

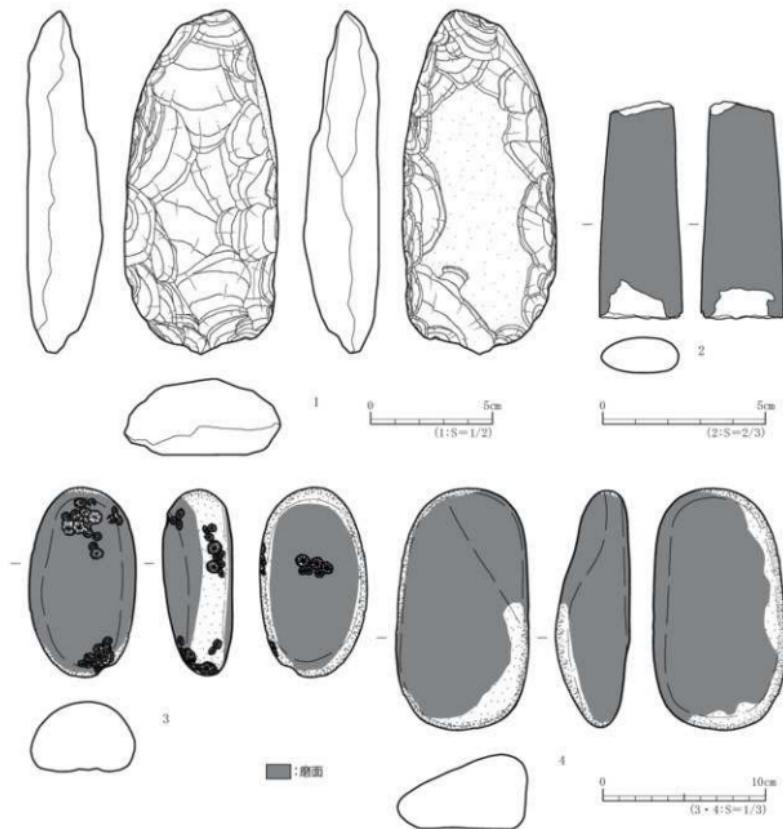
第17図 SX1遺物包含層出土石器（2）

石剣類1点が出土している。このうち8点を図示した。石鎌は基部が平基のものである(第18図1)。箋状石器は左右対称のもので、裏面に自然面を残す(第18図3)。板状石器は扁平な粘板岩を素材とし、縁辺に剥離を有する(第18図4)。打製石斧は刃部がやや開くもの(第18図2)と、全体の形状が梢円形を呈するもの(第19図1)がある。磨石・敲石類は梢円礫を素材とし、磨面や敲打痕が認められる(第19図3・4)。石棒・石剣類は全面を研磨しているが、破片のため全体の形状は不明である(第19図2)。



No.	遺構・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	残存	備考	登録 No.	写真復数
1	SX1 1～3層	心礫	18.9	10.2	3.0	0.6	珪質岩	完形		S036	19-8
2	SX1 1～3層	打制石斧	132.1	57.7	43.2	369.5		完形		S038	19-10
3	SX1 1層	抛光石器	74.5	33.5	14.4	50.5	安山岩	完形		S043	19-9
4	SX1 1～3層	板状石器	98.8	65.8	6.6	69.0	粘板岩	完形		S039	19-11

第18図 SX1遺物包含層出土石器（3）



No.	遺構・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	性状	備考	登録No.	写真図版
1	SX1 確認面	打製石斧	140.9	63.2	31.0	323.0	珪質頁岩	はげ完形	全体磨滅	S018	29-1
2	SX1 確認面	石棒・石削器	87.5	33.5	15.6	67.2	粘板岩	破片		S019	29-2
3	SX1 確認面	磨石・敲石盤	144.7	64.6	42.6	423.0	砂岩	完形		S024	29-3
4	SX1 確認面	磨石・敲石盤	187.5	78.7	45.3	713.0	砂岩	完形		S025	29-4

第19図 SX1 遺物包含層出土石器 (4)



第20図 SX7 遺物包含層・SX11 整地層平面図

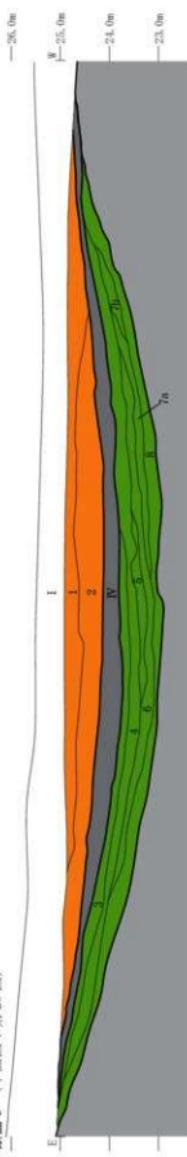
【SX7 遺物包含層】(第20～33図)

I-A区とII-D区で検出した。南から北へ傾斜する谷に分布しており、さらに調査区外の南北へ広がっている。SX11 整地層より古い。

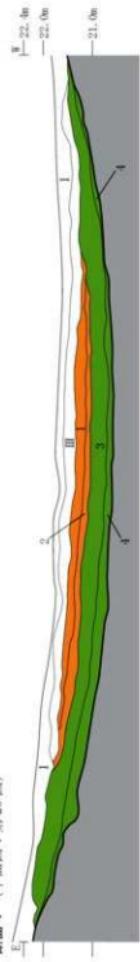
〔規模〕幅16.8m、奥行き16.7m、厚さは最大で0.9mである。

〔堆積土〕7層に分けられる。最上層の1層は斜面上方に分布し、層厚は最大20cm、黒褐色シルトで、炭化物・遺物を含む。2層は斜面上方に分布し、層厚は最大20cm、黒褐色シルトで、炭化物・遺物を含む。3層は斜面上方に部分的に分布し、層厚は最大20cm、暗褐色粘土質シルトで、炭化物・焼土を含み、遺物を多く含む。4層はほぼ全体に分布し、層厚は最大30cm、炭化物・焼土を含み、遺物を多く含み、小礫を少し含む。5a層は斜面上方では西部に、斜面下方では全体に分布し、層厚は最大で20cm、褐色粘土で、炭化物・焼土を含み、遺物を多く含む。5a層の西側では、同じく粘土ではあるものの、暗褐色の層を確認し、5b層とした。5b層は層厚が最大20cm、炭化物・

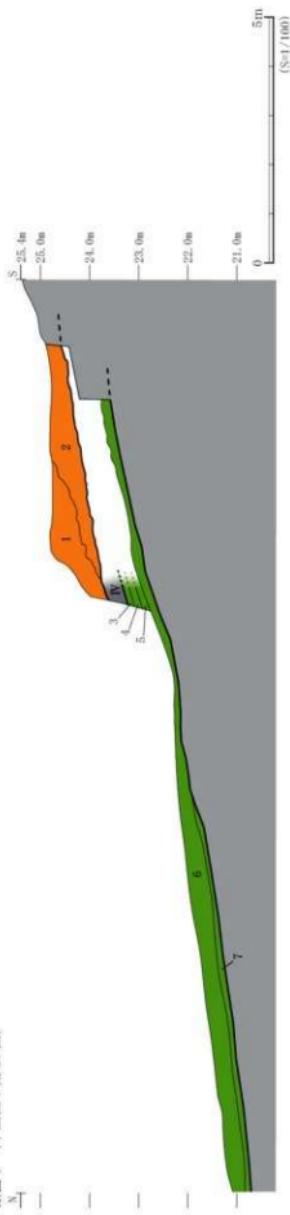
断面3 (平面図: 第20図)



断面4 (平面図: 第20図)

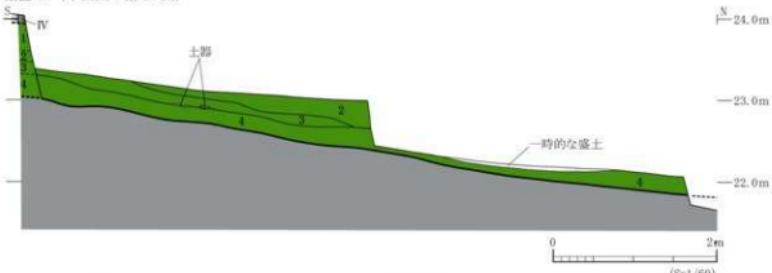


断面5 (平面図: 第20図)



第21図 SX7 遺物包含層・SX11 整地断面図 (1)

断面6 (平面図: 第20図)



No.	土色	土性	鉄入物など	編号	SX7 大別層
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	拳大塊をわずかに、小礫を少し含む	SX11-1 層	
2	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	拳大塊を多く含む	SX11-2 層	
3	黒褐色 (7, 5YR3/2)	シルト	炭化物・遺物を含む	SX7-1 層	
4	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・遺物を含む	SX7-2 層	大別1層
5	暗褐色 (7, 5YR3/2)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を含む	SX7-3 層	大別2層
6	暗褐色 (7, 5YR2/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を多く含む	SX7-4 層	
7a	褐色 (7, 5YR4/4)	粘土	炭化物・焼土・遺物を多く含む	SX7-5a 層	大別3層
7b	暗褐色 (7, 5YR3/3)	粘土	炭化物・焼土・遺物を含む	SX7-5b 層	
8	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を含む	SX7-6 層	大別4層
9	暗褐色 (7, 5YR2/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を多く含む	SX7-7 层	
断面3	褐色 (7, 5YR4/4)	粘土	炭化物・焼土・遺物を多く含む	SX7-8a 層	大別3層
断面4	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を含む	SX7-8b 層	大別4層
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	小礫・遺物をわずかに含む	SX7-9 層	
1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	拳大塊をわずかに、小礫を少し含む	SX11-1 層	
2	明黄褐色 (10YR6/6)	シルト	拳大塊を多く含む	SX11-2 層	
3	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を含む	SX7-6 層	大別4層
4	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	シルト	小礫・遺物をわずかに含む	SX7-7 層	
5	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・遺物を含む	SX7-8 層	大別1層
6	暗褐色 (7, 5YR2/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を多く含む	SX7-9 層	大別3層
7	褐色 (7, 5YR4/4)	粘土	炭化物・焼土・遺物を多く含む (西側のみに分布)	SX7-5 層	
8	暗褐色 (10YR3/3)	粘土質シルト	炭化物・焼土・遺物を含む (上面から一括剥出)	SX7-6 層	大別4層

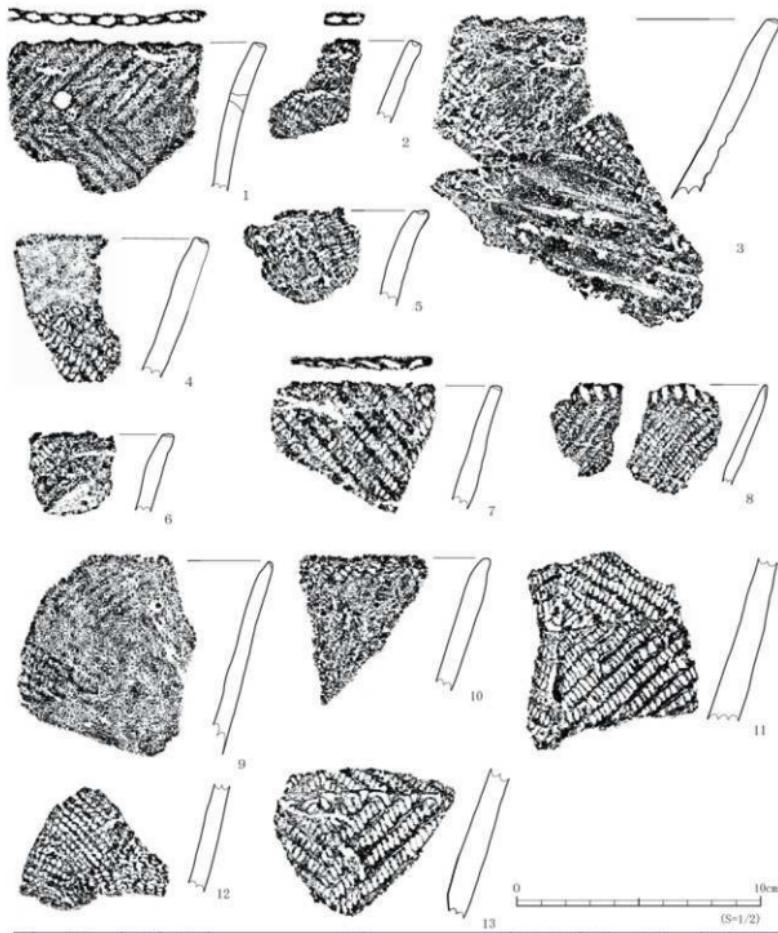
第22図 SX7 遺物包含層・SX11 整地層断面図 (2)

焼土・遺物を含む。6層はほぼ全体に分布し、層厚は最大35cm、暗褐色粘土質シルトで、炭化物・焼土・遺物を含む。7層は斜面下方にあたる調査区北側に分布し、層厚は最大20cm、にぶい黄褐色粘土質シルトで、小礫・遺物を微量含む。

〔出土遺物〕 遺物は1~6層や確認面から多く出土した一方、7層はわずかである。また、層の状態や遺物の出土状況は、6層上面に廃棄した土器のまとまりが認められたこと、それを直接覆う4・5層から遺物が多く出土したこと、3層は遺物が多く出土したが4・5層とは土色が大きく異なること、2層以上は3層以下と比べて遺物が少なかった。このため、出土遺物の記述は6層・6層上面、5層・5層上面・4層、3層・3層・3層・2層・1層・確認面に分けて行うこととする。

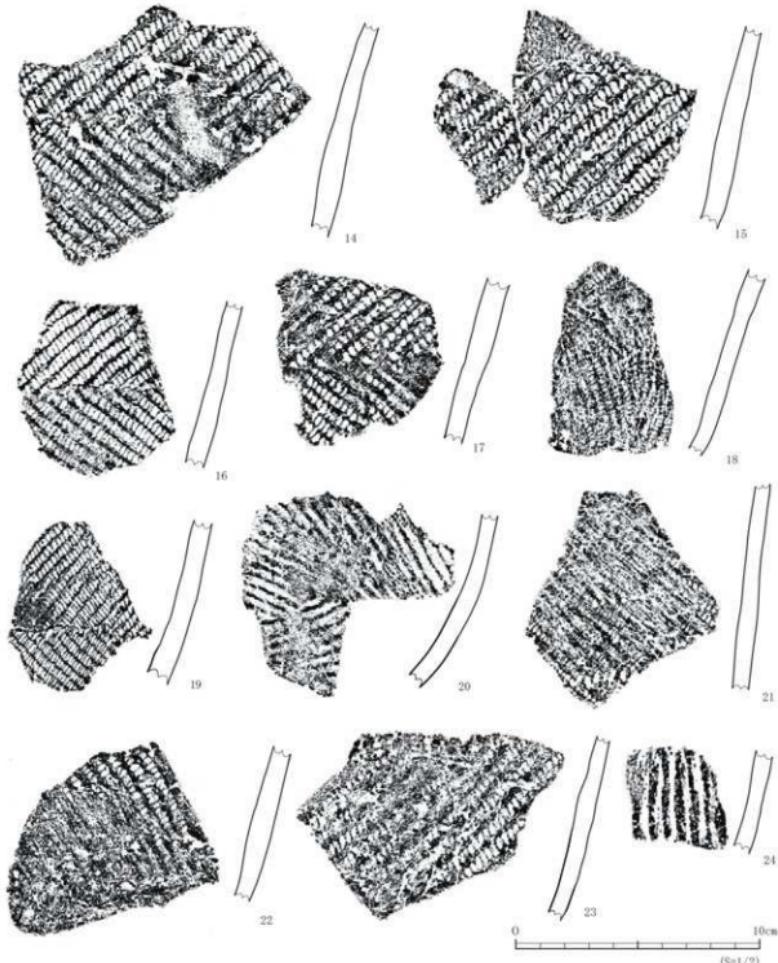
①大別4層 (6層・6層上面)

抽出土器は99点、図示資料は24点で、器種は鉢が1点、他はすべて深鉢である(第23・24図)。平縁で、口縁部は2~4・6~10が外傾、1・4が弱い外反である。1・2・4・5は口唇部に刺突、3・6~9は口唇部や口縁上端に刻目を持つ。このうち7は刻目の傾きが異なり、両者が隣り合う部分は「ハ」字状となっている。文様はこれのみとなるものが多いが、口縁部に2段の撚糸圧痕による文様(2)が施されるものがある。



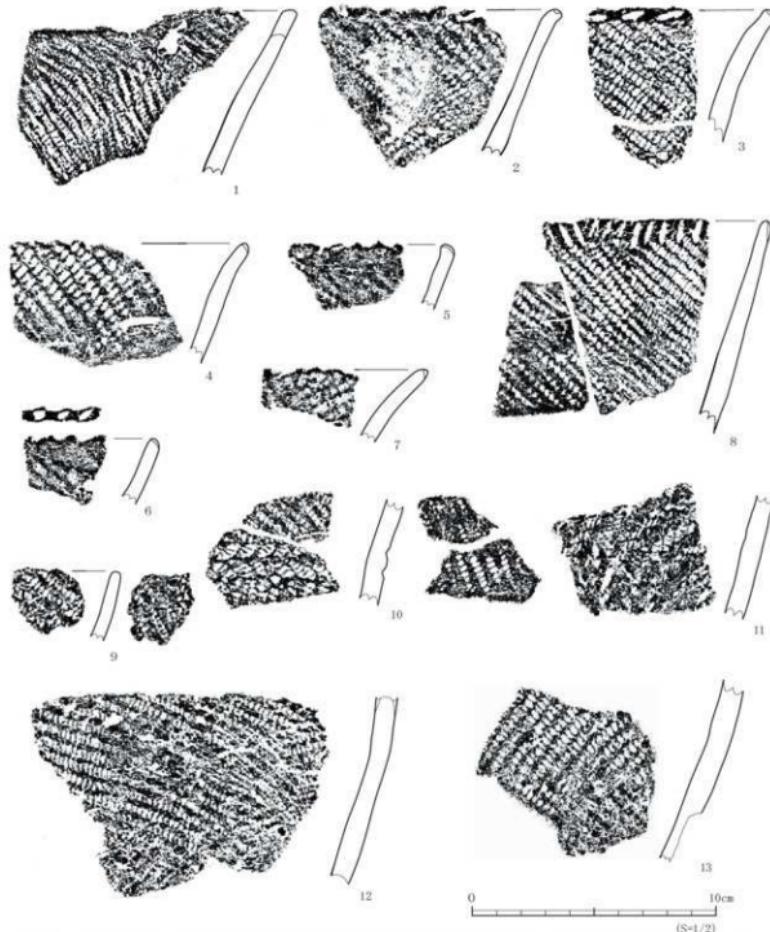
No.	器種	部位	層位	外面	内面	網織	備考	登録番号
1	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層	口唇部に斜目。非結束羽状溝文 (LR・RL)。補修孔	ナデ	○		327 12-1
2	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層	口唇部に斜目。斜行溝文 (RL)。一撲系江瓶 (RL)	ナデ	○		341 12-4
3	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層上面	口唇部に斜目。非結束羽状溝文 (LR・RL)。一沈線文	ナデ	○	斜線は竹貫の質を利用して刷文	392 12-3
4	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層	口唇部に斜目。非結束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		308 12-5
5	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層	口唇部に斜目。斜行溝文 (RL)	ナ (マメツ)	○		340 12-9
6	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層上面	口唇部に斜目 (斜位)。斜行溝文 (LR)	ナデ	○	斜位斜目は 1 面所でハ字状	398 12-7
7	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層上面	口唇部に斜目 (斜位)。斜行溝文 (RL)	ナデ	○	斜位斜目は 1 面所でハ字状	345 12-2
8	圓文土器・盆	口縁部	6 層上面	口縁上面に斜目 (斜位)。斜行溝文 (LR)	ナデ	○		397 12-8
9	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層	口唇部に斜目 (斜位)。非結束羽状溝文 (LR・RL)	ナ (マメツ)	○		307 12-10
10	圓文土器・深鉢	口縁部	6 層上面	斜行溝文 (LR)	ナ (マメツ)	○		395 12-6
11	圓文土器・深鉢	胸腔	6 層上面	非結束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○	表面に施文	376 12-13
12	圓文土器・深鉢	胸腔	6 層上面	非結束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		353 12-12
13	圓文土器・深鉢	胸腔	6 層上面	非結束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○	表面に施文	351 12-11

第23図 SX7遺物包含層出土土器(1) 大別4層



No.	器種	部位	層位	外面	内面	組織	纖号	鉢底 写真図版
14	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印結束羽状彫文 (L.R.)	ナデ	○	346	13-14
15	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印結束羽状彫文 (L.R.)	ナデ	○	349	13-20
16	陶文土器	深鉢	胴部	6層 印結束羽状彫文 (L.R.)	ナデ	○	318	13-22
17	陶文土器	深鉢	胴部	6層 印結束羽状彫文 (L.R.)	ナデ	○	328	13-17
18	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印結束羽状彫文 (L.R.)	ナデ	○	380	13-18
19	陶文土器	深鉢	胴部	6層 印結束羽状彫文 (L.R.)	ナデ	○	322	13-19
20	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印結束羽状彫文 (L.R., 周.)	ナデ	○	375	13-24
21	陶文土器	深鉢	胴部	6層 印行彫文 (周.)	ナデ	○	303	13-15
22	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印行彫文 (L.R.)	ナデ	○	363	13-23
23	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印文 (L.)	ナデ	○	348	13-16
24	陶文土器	深鉢	胴部	6層上面 印文 (L.)	ナデ	○	396	13-21

第24図 SX7遺物包含層出土土器(2)一大別4層



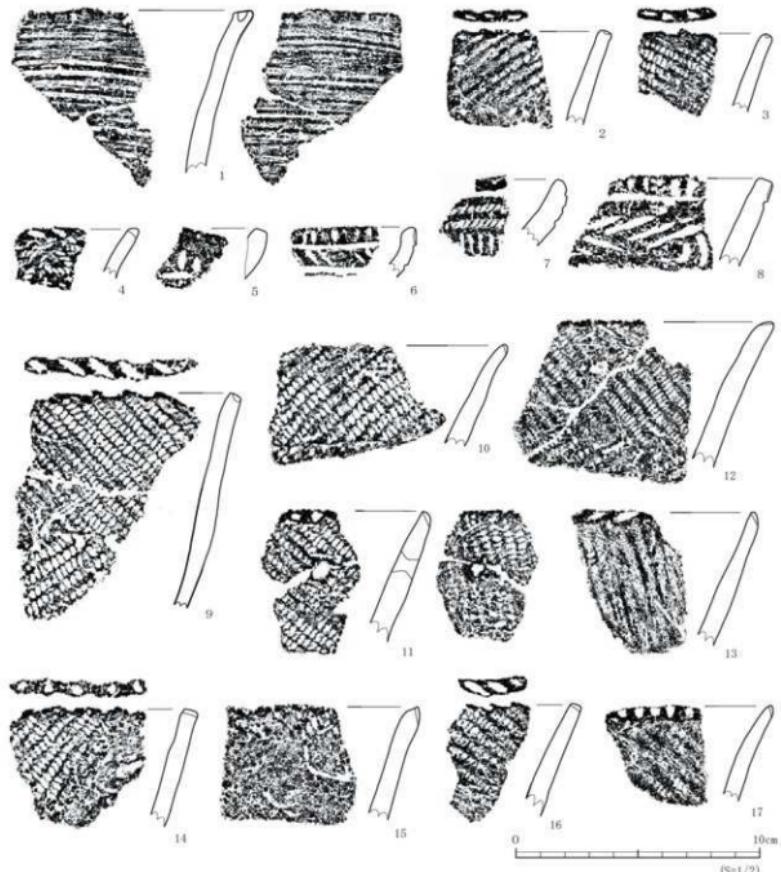
No.	器種	部位	層位	外觀	内面	縹緲	備考	登錄	写真図版
1	陶文土器・深鉢	口縁部	5層	平縫・突起。斜行縹文 (RL)	ナデ	○		406	14-3
2	陶文土器・深鉢	口縁部	4層	口縁部に刺突。非結合束状斜縹文 (LR+RL)	ナデ	○		425	14-2
3	陶文土器・深鉢	口縁部	4層	口縁上端に刺目 (斜位)。非結合束羽状縹文 (LR+RL)	ナデ	○		426	14-8
4	陶文土器・深鉢	口縁部	5層	口縁部に刺目。斜行縹文 (RL)	ナデ	○		400	14-9
5	陶文土器・深鉢	口縁部	5層	口縁部に刺目。斜行縹文 (RL)	ナデ	○		429	14-7
6	陶文土器・深鉢	口縁部	5層	口縁部に刺目。斜行縹文 (RL)	ナデ	○		419	14-5
7	陶文土器・深鉢	口縁部	5層	口縁部に刺目。斜行縹文 (LR)	9 (マツメ)	○		416	14-8
8	陶文土器・深鉢	口縁部	5層上面	口縁上端に刺目 (斜位)。斜行縹文 (RL)	ナデ	○	斜位刺目は1箇所でハ字状	423	14-1
9	陶文土器・深鉢	口縁部	5層	斜行縹文 (RL)	ナデ	○	内面に斜行縹文 (RL)	421	14-6
10	陶文土器・深鉢	口縁部	4層	非結合束羽状縹文 (LR+RL) → 條帶正縫 (LR+RL)	ナデ	○	内面に斜行縹文 (RL)	427	14-11
11	陶文土器・深鉢	口縁部	4層	條帶正縫 (LR+RL) → 條帶正縫 (LR+RL)	ナデ	○		428	14-30
12	陶文土器・深鉢	胸部	5層	非結合束羽状縹文 (LR+RL)	ナデ	○		403	15-12
13	陶文土器・深鉢	胸部	5層	非結合束羽状縹文 (LR+RL)	ナデ	○		402	15-14

第25図 SX7遺物包含層出土土器(3)一大別3層



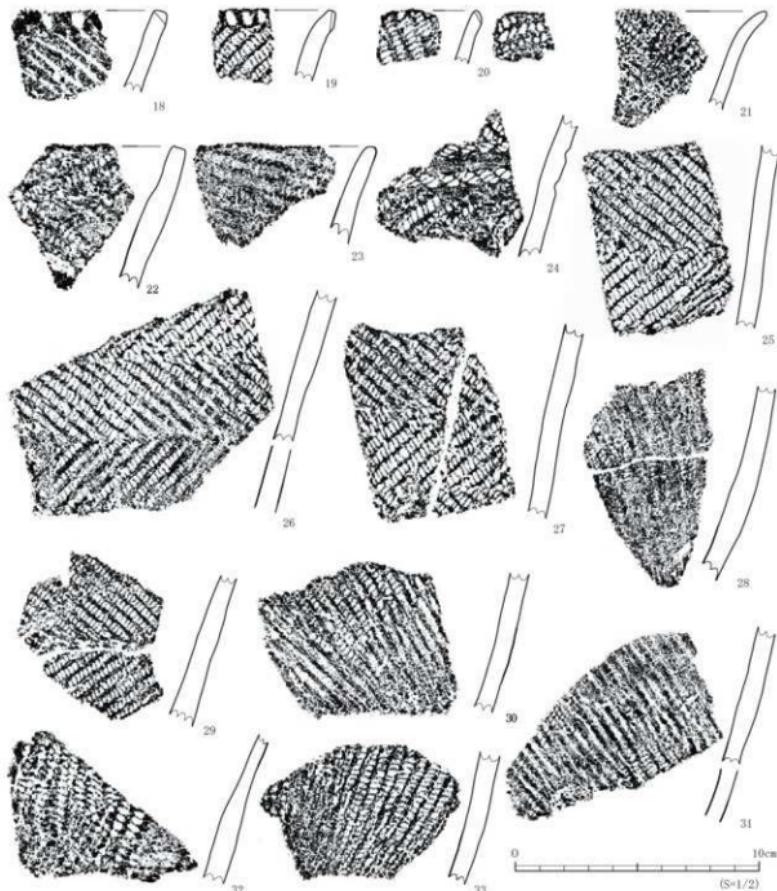
No.	器種	部位	場所	外面		内面	構造	通考	登録	写真復元
				外觀	内面					
14	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	非結東羽伏掛文 (LR+RL)		ナゲ	○		433	15-16
15	陶文土器・深鉢	鉢底	5層上端	非結東羽伏掛文 (LR+RL)		ナゲ	○		424	15-13
16	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	非結東羽伏掛文 (LR+RL)		ナ (マメツ)	○		430	15-19
17	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	非結東羽伏掛文 (LR+RL)		ナ (マメツ)	○		429	15-17
18	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	非結東羽伏掛文 (LR+RL)		ナ (マメツ)	○	卷形に施文	431	15-18
19	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	斜行溝文 (RL)		ナ (マメツ)	○		434	15-21
20	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	斜行溝文 (RL)		ナゲ	○		432	15-23
21	陶文土器・深鉢	鉢底	5層	斜行溝文 (RL)		ナゲ	○		412	15-15
22	陶文土器・深鉢	鉢底	4層	斜行溝文 (LR)		ナゲ	○		409	15-22
23	陶文土器・深鉢	鉢底	5層	斜行溝文 (RL)		ナゲ	○		449	15-24
24	陶文土器・深鉢	底部	5層	非結東羽伏掛文 (LR+RL)		ナゲ	○		422	15-20

第 26 図 SX7 遺物包含層出土土器 (4) 一大別 3 層



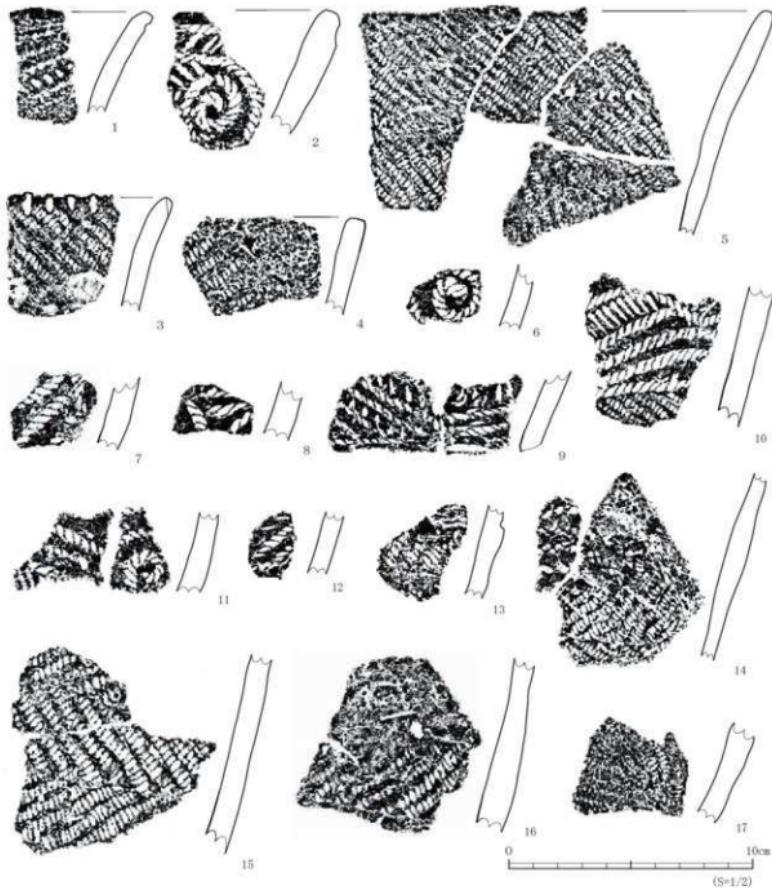
No.	器種	部位	層位	外面	内面	網版	備考	登錄	零真厚度
1	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目。条痕	条痕	○		456	16-1
2	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目。非結束束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		468	16-2
3	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目。非結束束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		460	16-3
4	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目 (鉤位)。圓唇状燃毛正脈 (L・R)	ナデ	○		452	16-6
5	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	波状線。	ナデ	○		507	16-9
6	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。虎齒・周沈繩	ナデ	○		455	16-5
7	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	虎齒・周沈繩 (R)・粗沈繩	ミガキ	○		453	16-7
8	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。圓手状虎齒・周沈繩	ナデ	○		454	16-8
9	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目 (鉤位)。非結束束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		463	16-4
10	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目 (鉤位)。非結束束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		457	16-11
11	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。非結束束羽状溝文 (LR・RL)・補修孔	ナデ	○		464	16-12
12	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。非結束束羽状溝文 (LR・RL)	ナデ	○		459	16-10
13	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。斜行溝文 (RL)	ナデ	○		462	16-13
14	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目。斜行溝文 (LR)	ナデ	○		461	16-17
15	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。斜行溝文 (LR)	ナデ	○		469	16-18
16	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁部に刺目 (鉤位)。斜行溝文 (RL)	ナデ	○		508	16-15
17	圓文土器・深鉢	口縁部	3層	口縁上端に刺目 (鉤位)。斜行溝文 (RL)	ナデ	○		466	16-16

第27図 SX7遺物包含層出土土器(5)一大別2層



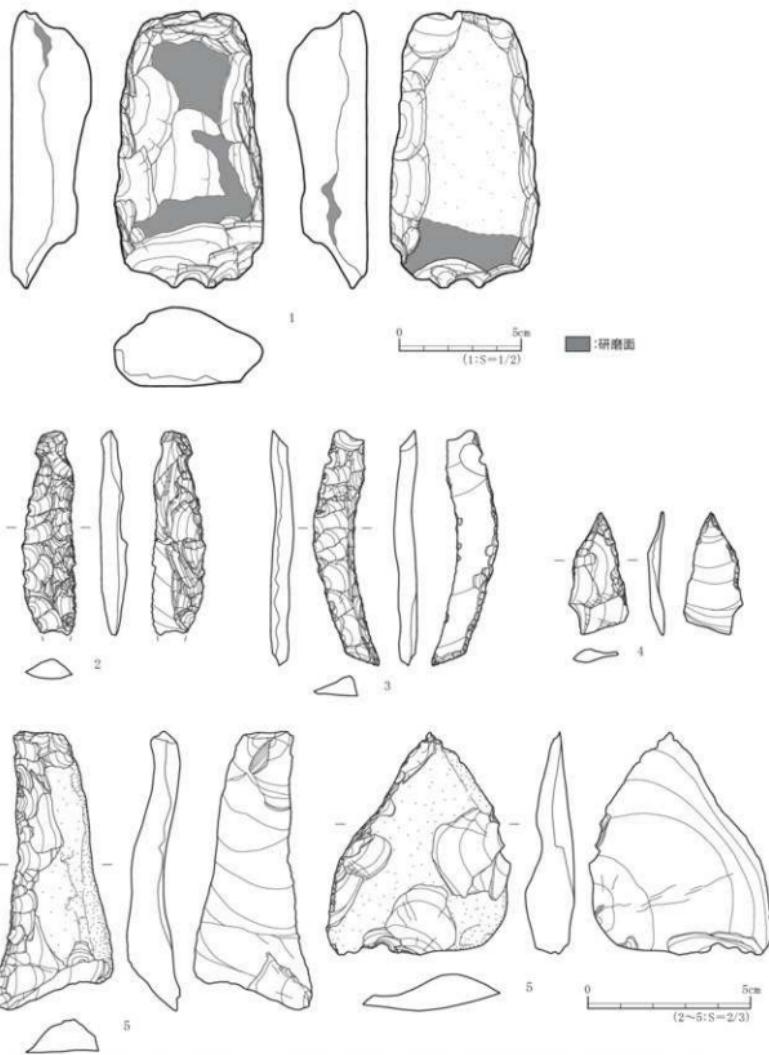
No.	器種	部位	層位	外面	内面	縹跡	備考	登録番号
18	陶文土器	深鉢	口縁部	3層 口縁上端に網目(縦位)、斜行調文(BL)	ナデ	○		967 16-14
19	陶文土器	深鉢	口縁部	3層 口縁上端に網目(縦位)、斜行調文(LR)	ナデ	○		470 16-19
20	陶文土器	深鉢	口縁部	3層 口縁上端に網目(縦位)、斜行調文(LR)	ナデ	○	内面に斜行調文(BL)	865 16-20
21	陶文土器	深鉢	口縁部	3~6層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)	ナデ	○		539 16-21
22	陶文土器	深鉢	口縁部	3層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)	ナデ	○		458 16-22
23	陶文土器	深鉢	口縁部	3層 斜行調文(BL)	9(マメフ)	○		471 16-23
24	陶文土器	深鉢	口縁部	3層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)→撫拂痕(LR+BL)	ナデ	○		451 16-25
25	陶文土器	深鉢	胸元	3層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)	ナデ	○		473 16-28
26	陶文土器	深鉢	胸元	3層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)	ナデ	○		472 16-29
27	陶文土器	深鉢	胸元	3層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)	ナデ	○		474 16-27
28	陶文土器	深鉢	胸元	3層 斜行調文(BL)	ナデ	○		482 16-26
29	陶文土器	深鉢	胸元	3層 表面粘着弱い斜行調文(BL+LR)	ナデ	○		476 17-32
30	陶文土器	深鉢	胸元	3層 斜行調文(BL)	ナデ	○		480 17-34
31	陶文土器	深鉢	胸元	3層 斜行調文(BL)	ナデ	○		479 16-24
32	陶文土器	深鉢	胸元	3層 斜行調文(LR)	ナデ	○		483 17-31
33	陶文土器	深鉢	胸元	3層 斜行調文(LR)	ナデ	○		478 17-33

第28図 SX7遺物包含層出土土器(6)一大別2層



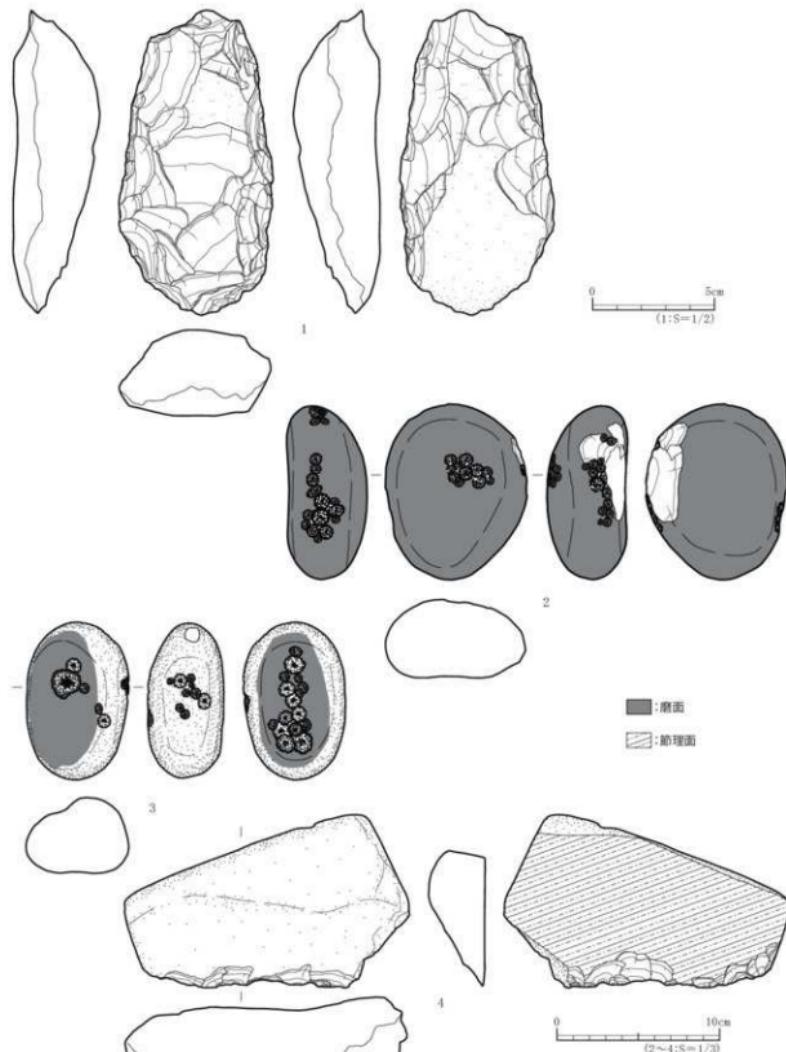
No.	器種	部位	層位	外観	内面	網目	備考	参考	登録	写真図版
1	縄文土器・深鉢	口縁部	2層	直縁・手捻式深鉢・切欠洞	ナデ	○		545	18-1	
2	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	撫系圧痕(既)・満背状捺壓痕(既)・粗沈痕	ミガキ	○		549	18-2	
3	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	口縁上端に鋸目(網目)、斜行縞文(既)	ナデ	○		558	18-3	
4	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	斜行縞文(既)	ナデ	○		574	18-11	
5	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	斜行縞文(既)	ナデ	○		557	18-4	
6	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	直巻型捺壓痕(既)	ミガキ	○		562	18-6	
7	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	撫系圧痕(既)	ミガキ	○	7・11は同一個体	552	18-9	
8	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	繩認面・撫系圧痕(既)	ナデ	○		570	18-13	
9	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	満背状捺壓痕(既)・粗沈痕	ミガキ	○		567	18-5	
10	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	満背状捺壓痕(既)	ミガキ	○		550	18-12	
11	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	直巻型捺壓痕(既)	ミガキ	○	7・11は同一個体	551	18-8	
12	縄文土器・深鉢	口縁部	1層	繩認面・撫系圧痕(既)	タ(マメツ)	○		569	18-7	
13	縄文土器・深鉢	胸部	2層	半纏竹管の押引き文、非結束束縛縞文(LR+RL)	タ(マメツ)	○		548	18-10	
14	縄文土器・深鉢	胸部	1層	撫系圧痕(既)、弧状。非結束束縛縞文(LR+RL)	タ(マメツ)	○		555	18-14	
15	縄文土器・深鉢	胸部	1層	非結束束縛縞文(LR+RL)	ミガキ	○		559	18-17	
16	縄文土器・深鉢	胸部	1層	斜行縞文(既)	ナデ	○		573	18-16	
17	縄文土器・深鉢	胸部	2層	斜行縞文(既)	ナデ	○		547	18-15	

第29図 SX7遺物包含層出土土器(7)一大切1層



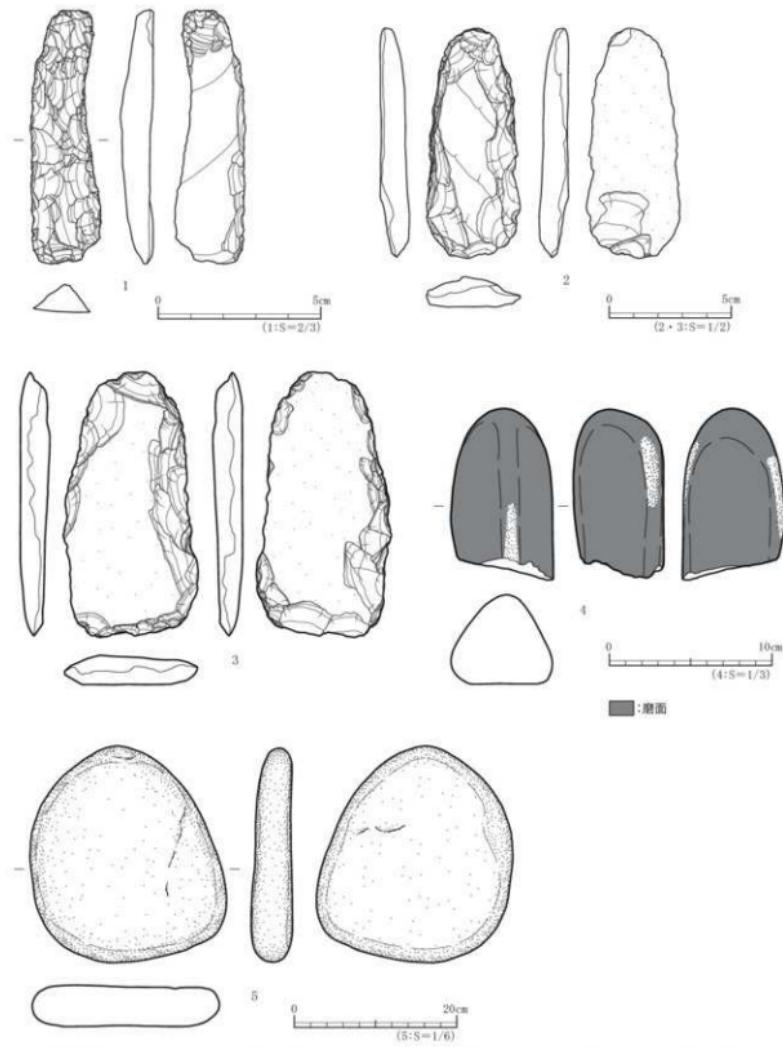
第30図 SX7遺物包含層出土石器（1）

No.	遺物・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	既存	備考	登録No.	写真図版
1	SX7 6層上面	打製石斧	113.9	60.7	32.4	291.0	安山岩	完形		S170	21-1
2	SX7 5層	石斧	(62.8)	16.3	7.9	6.9	珪質頁岩	一部欠	先端部欠損	S150	21-2
3	SX7 5層	石斧	(72.4)	13.1	5.5	5.6	珪質頁岩	一部欠	つまみ先端欠損	S152	21-3
4	SX7 4層	不定形石器	37.5	17.3	4.1	2.1	珪質頁岩	完形		S134	22-1
5	SX7 4層	不定形石器	96.0	37.7	14.4	34.6	碧玉	完形		S133	22-2
6	SX7 4層	不定形石器	52.9	73.5	14.7	47.1	珪質頁岩	完形		S138	22-3



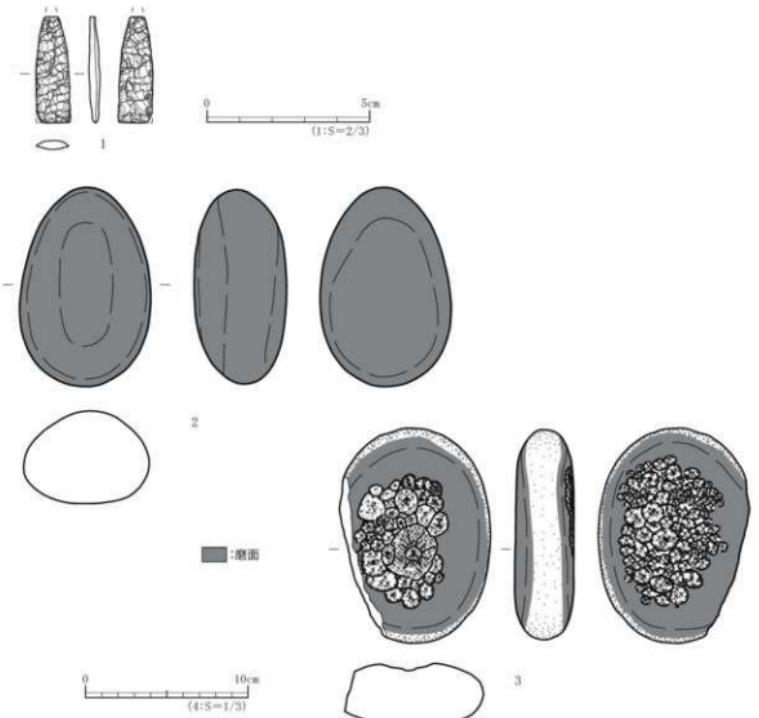
No.	遺構・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重数 (g)	石材	残存	備考	登録No.	写真図版
1	SX7 4層	打製石斧	118.0	55.5	35.0	298.9	安山岩	完形		S132	22-4
2	SX7 4層	磨石・敲打石	104.9	84.3	51.0	576.5	砂岩	完形	磨面・敲打痕	S142	22-5
3	SX7 4層	磨石・敲打石	93.9	61.3	46.5	342.5	砂岩	完形	磨面・敲打痕	S145	22-6
4	SX7 4層	刮器	165.9	101.0	40.3	768.0	粘板岩	完形		S140	22-7

第31図 SX7遺物包含層出土石器 (2)



No.	遺構・層位	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	石材	既存	備考	登録No.	写真図版
1	SX7 3層	不定形石器	78.3	21.0	8.9	15.4	珪質頁岩	完形		S110	23-1
2	SX7 3層	打製石斧	93.6	37.9	11.1	49.1	粘板岩	完形		S111	23-2
3	SX7 3層	打製石斧	117.6	52.1	12.3	91.9	安山岩	完形		S116	23-3
4	SX7 3層	磨石・敲石類	(10.2)	62.1	57.0	506.0	安山岩	一部欠 磨面		S113	23-4
5	SX7 3層	石器・台石類	226.5	216.1	52.9	5650.0	砂岩	全体表面化		S127	23-5

第32図 SX7遺物包含層出土石器（3）



第33図 SX7 遺物包含層出土石器 (4)

縄文は1・3・4・9・11～20が非結束羽状縄文で、このうち11・13は菱形に施文される。2・5～8・10・21～23は斜行縄文、24が撚糸文である。抽出土器全体でみると、縄文はほとんどが0段多条である。非結束羽状縄文が主体で、次いで斜行縄文が多く、ループ文や撚糸文はわずかである。内面はナデが多く、ミガキや斜行縄文、条痕が少量認められる。

石器は13点出土した。打製石斧3点、磨石・敲石類10点が出土している。このうち打製石斧1点を図示した。打製石斧は左右対称で刃部がやや開くもので、一部研磨されていることから磨製石斧の未完成品の可能性がある(第30図1)。

②大別3層(5層・5層上面・4層)

抽出土器は51点、図示したのは24点で、器種はすべて深鉢である(第25・26図)。1～9は平縁で、

1は突起を有する。口縁部は1～3・5・6・8・9が外傾で、7が外反、4は弱い外反（4）である。25は数少ない底部資料で、丸底である。2は口唇部に刺突、3～8は口唇部や口縁上端に刻目を持つ。このうち8は刻目の傾きが異なり、両者が隣り合う部分は「ハ」字状となっている。文様はこれのみとなるものが多いが、撚糸圧痕（10・11）で口縁部に広い文様帯を形成するものがある。

縄文は2・3・10・12～18・24が非結束羽状縄文、1・4～9・19～23は斜行縄文である。抽出土器全体でみると、縄文は0段多条がほとんどで、非結束羽状縄文と斜行縄文が半々ずつを占め、撚糸文はわずかに認められる。羽状縄文の中には菱形に施文されるものがある。内面はナデが多く、ミガキや斜行縄文（9・10）、条痕（17）が少量認められる。

石器は17点出土した。石匙2点、鎹状石器2点、打製石斧1点、礫器1点、不定形石器3点、磨石・敲石類8点が出土した。このうち9点を図示した。石匙はつまみ部に対して先端部が縦型のもの（第30図2）と、斜方向に長いもの（第30図3）がみられる。打製石斧は全体の形状が楕円形を呈するもので、裏面は広く自然面を残している（第31図1）。礫器は節理面で分割された素材礫の端部に剥離が施されている（第31図4）。不定形石器は剥片に尖頭部を作出するもの（第30図4）や、縁辺に二次加工を施すもの（第30図5・6）がある。磨石・敲石類は円礫や楕円礫を素材とし、磨面や敲打痕を有する（第31図2・3）。

③大別2層（3層・3～6層）

抽出土器は93点、図示したのは33点で、器種はすべて深鉢である（第23・24図）。1～4・6～23は平縁で、5は波状縁である（5）。口縁部は1～4・8～16・18～20・22・23が外傾、17・21は外反、5～7は弱い内弯である。1～3は口唇部に刺突、4・6・8～20は口唇部や口縁上端に刻目を持つ。後者の中には、渦巻状・蕨手状の撚糸圧痕や沈線が単独（4・24）、もしくは短沈線（5～8）と組み合って口縁部に広い文様帯を形成するものがある。

内外面とも条痕が施された1を除くと、縄文は2・3・9～12・21・22・24～27・29が非結束羽状縄文、13～20・23・28・30～33が斜行縄文である。抽出土器全体でみると、縄文は0段多条がほとんどで、非結束羽状縄文と斜行縄文が半々ずつを占める。内面はナデが多いが、口縁部に広い文様帯を形成するものを中心にミガキが認められ、ほかに斜行縄文（20）や条痕がある。

石器は12点出土した。打製石斧2点、不定形石器1点、磨石・敲石類7点、石皿・台石類2点が出土した。このうち5点を図示した。不定形石器は先端部が縦方向に長い石匙の可能性もあるが、つまみ部の抉りが明瞭ではない（第32図1）。打製石斧は左右対称で刃部がやや開くもの（第32図2）と、左右非対称のもの（第32図3）がある。磨石・敲石類は楕円礫を素材とし磨面をもつ（第32図4）。石皿・台石類は無縁で断面が平坦なものである（第32図5）。

④大別1層（2層・1層・確認面）

抽出土器は30点、図示したのは17点で、器種はすべて深鉢である（第29図）。1～5は平縁で、5には小突起がつく。口縁部は2～4が外傾、1は弱い外反（1）である。3は口縁上端に刻目を持つ。1・2・6～12は、渦巻状・蕨手状の撚糸圧痕や沈線が単独もしくは短沈線と組み合って、口縁部に広い文様帯を形成する。また、13は半截竹管による押引文が認められる。

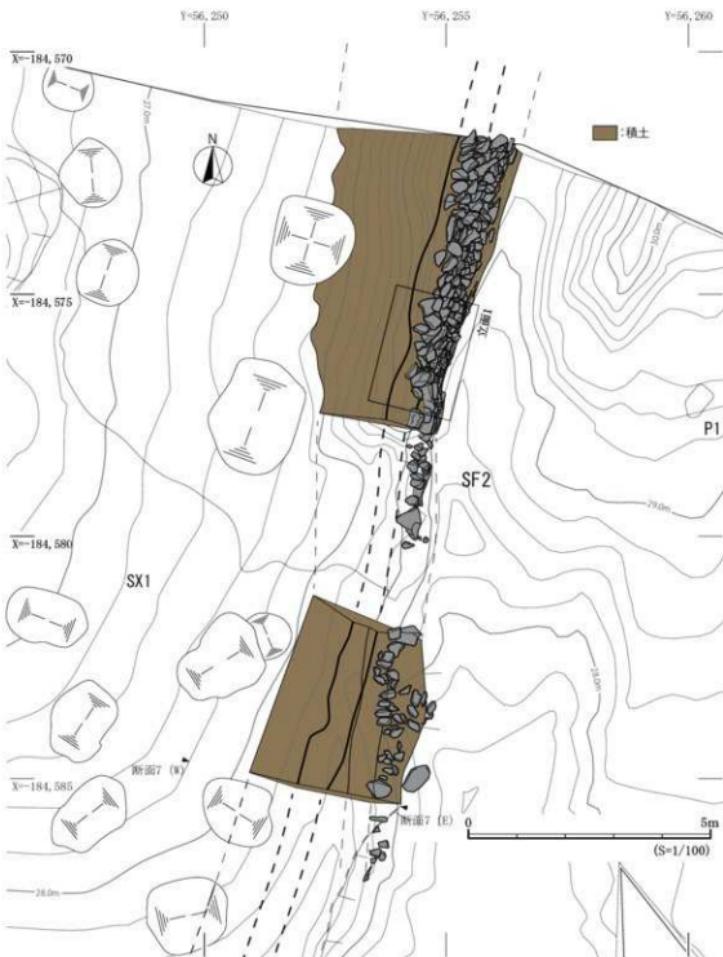
縄文は 13～15 が非結束羽状縄文、3～5・16・17 は斜行縄文である。抽出土器全体でみると、縄文は 0 段多条がほとんどで、非結束羽状縄文が主体を占め、ほかに斜行縄文がある。内面はナデが多いが、口縁部に広い文様帶を形成するものを中心にミガキが認められる。

石器は 5 点出土した。尖頭器 1 点、磨石・敲石類 4 点である。このうち 3 点を図示した。尖頭器は基部を直線的に調整しているものである（第 33 図 1）。磨石・敲石類は楕円碟を素材とし、磨面のみのもの（第 33 図 2）や、磨面と敲打痕・凹痕が複合的にみられるもの（第 33 図 3）がある。

(2) 近世以降

A. 土塁・石壁・石積み遺構

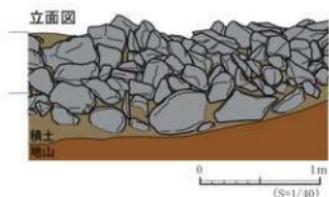
調査では4箇所で土塁や石塁等の遺構を検出した。これらは、積土による土手状の遺構を土塁、土塁表面を石積みで覆うものを石塁、裏込め等を作らず石を積んで斜面の土留め状に構築したものを石積み遺構とした。



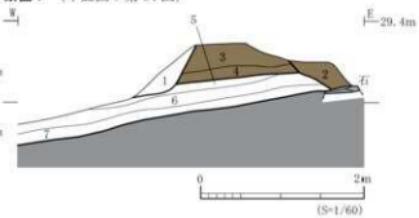
第34図 SF2石塁平面図

立面1 (平面図: 第35図)

平面図



断面7 (平面図: 第34図)



No.	土色	土性	鉱物など	備考
1	にごい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山層や小礫を含む	SF2 積土上
2	褐色 (10YR4/6)	シルト	地山層を含む	SF2-1 層 (右側方埋土)
3	褐色 (10YR4/6)	シルト	4よりしまり削い	SF2-2 層 (積土)
4	褐色 (10YR4/4)	シルト	しまり有	SF2-3 層 (積土)
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・施土・遺物を少し含む	SX1-1 層
6	黒褐色 (10YR2/2)	シルト	炭化物・施土・遺物を多く含む	SX1-2 層
7	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	炭化物・施土・遺物を含む	SX1-3 層

第35図 SF2石壁立面図(部分)、SX1包含層・SF2石壁東西断面図

【SF2石壁】(第34・35図)

I-B区東側で検出した南北方向の石壁である。SX1遺物包含層・SD6溝跡より新しい。調査前から地上顕在遺構として確認されていた。さらに調査区外の北側へ、200m以上にわたって延びている。

〔規模〕確認長約29.5m、上幅0.3~0.9m、下幅約1.5m、高さ約0.4~0.7mである。

〔方向〕南北方向で、北で東に15度偏し、南側は地形に沿って西側に向かってカーブしており、北で東に45度偏する。

〔構築方法〕地山を削り出した上に土を盛って土壁状にし、東側の面をSX1や地山部分を含めて削つて据方とし、拳大から人頭大の石を積んでいる。ただし、表面観察に留まるものの、調査区外北側では内部構造が積土よりも石積みが主体となっているようである。

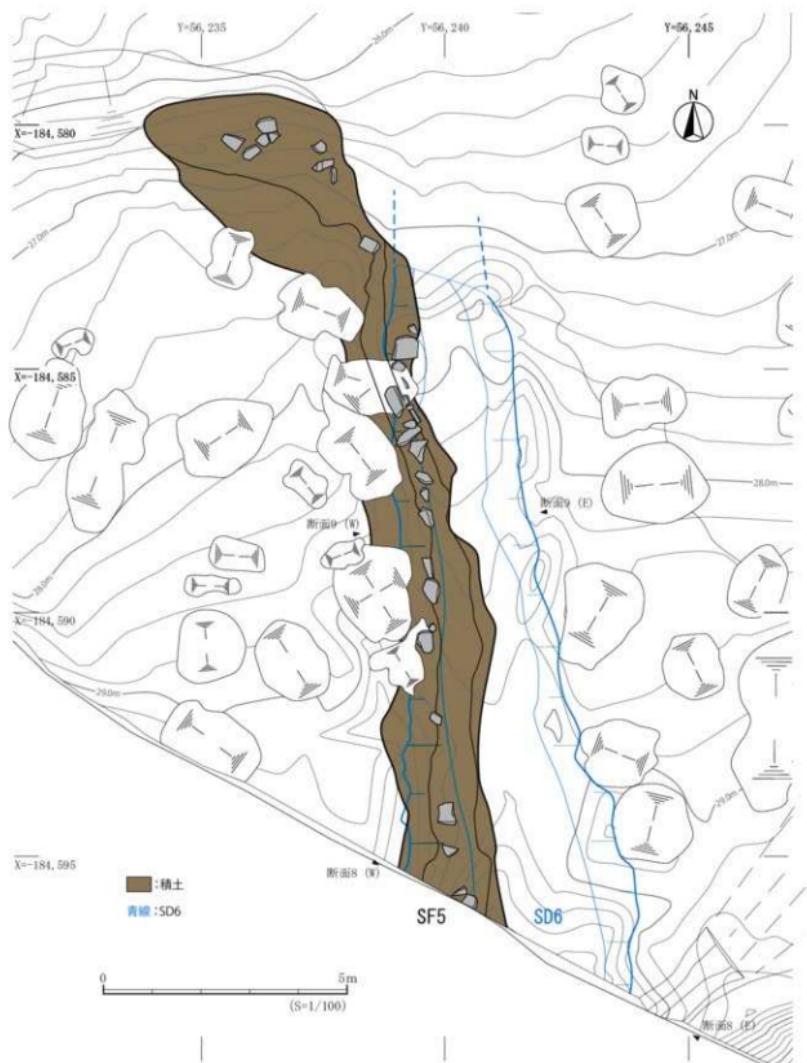
〔出土遺物〕遺物は出土していない。

【SF5石積み遺構】(第36~38図)

I-B区南側で検出した南北方向の石積み遺構である。調査前は段状の地形として確認されていた。SD6溝跡より新しい。

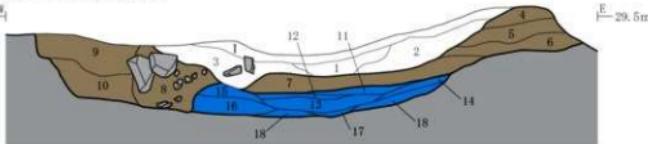
〔規模〕確認長18.4m、幅約1.6~3.0m、高さ約0.4~0.6mである。

〔方向〕南北方向で、北で西に9度偏するが、北側で北西にカーブし、北で西に45度偏する。

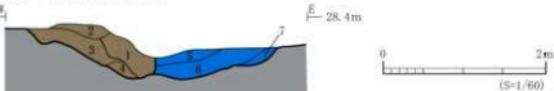


第36図 SF5石積み遺構・SD6溝跡平面図

断面8 (平面図: 第36図)



断面9 (平面図: 第36図)



No.	土色	土性	埋入物など	備考
1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	小礫を少し含む	SF2 砂壌土
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	小礫を多く含む	SF2 砂壌土
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	径5~20cmの礫をわずかに含む	SF2 砂壌土
4	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	小礫を含む	SF2-1層(植土)
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	小礫をわずかに含む	SF2-2層(植土)
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	小礫を多く含む。しまりやや強い	SF2-3層(植土)
7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	小礫を非常に多く含む。しまり強い	SF2-4層(植土)
8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	径5~50cmの礫を多く含む。しまりやや強い	SF2-5層(有機物理土)
9	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	小礫を少し含む	SF2-6層(植土)
10	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山にコック石を多く含む	SF2-7層(植土)
11	鵝色(10YR4/4)	シルト	小礫を少し含む	SF2-8層(自然堆積土)
12	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	砂粒を少し含む。粘性弱い	SF2-9層(自然堆積土)
13	鵝色(10YR4/4)	砂質シルト	砂粒を多く含む。粘性弱い	SF2-10層(自然堆積土)
14	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	小礫を含む	SF2-11層(自然堆積土)
15	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	小礫を少し含む	SF2-12層(自然堆積土)
16	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土質シルト	小礫を少し含む	SF2-13層(自然堆積土)
17	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	砂粒を少し含む。粘性弱い	SF2-14層(自然堆積土)
18	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	小礫をわずかに含む	SF2-15層(自然堆積土)
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	径5~50cmの礫を多く含む。しまりやや強い	SF5-1層(4箇所方理土)
2	にぶい黄褐色(10YR6/4)	シルト	小礫を含む	SF5-2層(植土)
3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	小礫を少し含む	SF5-3層(植土)
4	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山にコック石を多く含む	SF5-4層(植土)
5	鵝色(10YR4/4)	シルト	小礫を含む	SF5-5層(自然堆積土)
6	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	小礫を含む	SF5-6層(自然堆積土)
7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	小礫をわずかに含む	SF5-7層(自然堆積土)

第37図 SF2石壙・SF5石積み遺構・SD6溝跡断面図

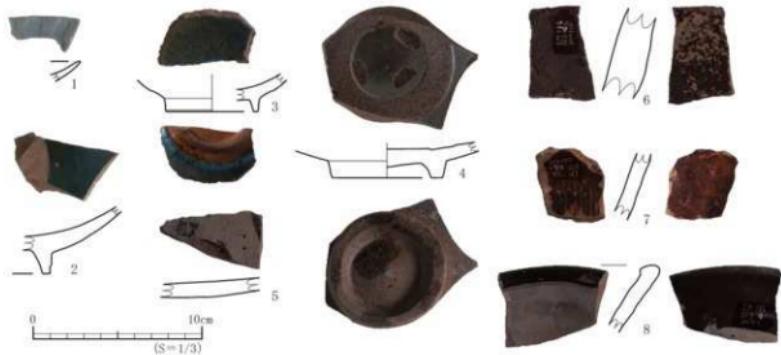
〔構築方法〕斜面を削り出して掘り方とし、にぶい黄褐色シルトの土とともに拳大から人頭大の礫を東面に積んでいる。

〔出土遺物〕積土から磁器1点、陶器8点の計9点が出土している。このうち8点を図示した（第38図1～8）。1は肥前産磁器の輪花小皿である。2は肥前産陶器小皿、3は産地不明の陶器小皿である。4は肥前産陶器皿で、見込は蛇の目釉剥ぎされた上に砂目の目跡が4箇所、高台に目跡の痕跡が5箇所確認できる。5は美濃産の灰釉鉢、6・7は産地・年代とも不明な壺・鉄釉擂鉢、8は瀬戸・美濃の煙硝捕とみられる。

【SF9土壙】(第39～41図)

II-A-C区北側で検出した南北方向の土壙である。調査前から地上顕在遺構として確認されていた。さらに調査区外の北側へ10mほど延びている。

〔規模〕確認長約20.8m、基底幅1.2～2.0m、高さ約0.8～1.3mである。



第38図 SF5 出土遺物

〔方向〕南北方向で、北で西に1度偏する。

〔構築方法〕凝灰岩質の岩盤から成る地山を削り出して基底部を造り、その上に土を積んで形成している。積土は3層に分けられる。下層の3層にはぶい黄褐色シルトで、小礫を少し含む。2層は黄褐色シルトで、拳大程度の角礫を多く含む。最上層の1層は、土壌北側では明褐色シルト層(1a層)で、土壌の中央では暗褐色シルト層(1b層)である。

〔出土遺物〕積土および崩壊土中から磁器9点、陶器7点が出土した。このうち11点を図示した(第41図1~11)。1~5は磁器である。1は内面外周に墨弾き技法が施された肥前産皿、2および3は見込に蛇の目釉剥ぎのある肥前産皿である。4は中国・漳州窯産の染付皿とみられる。5は肥前産蓋である。6~11は陶器である。6は肥前産のいわゆる呉器手碗、7は内面に銅錆釉を施した後に蛇の目釉剥ぎした肥前産皿、8は黄瀬戸菊皿、9は黄瀬戸の鉢である。10は肥前産刷毛目波状文鉢である。

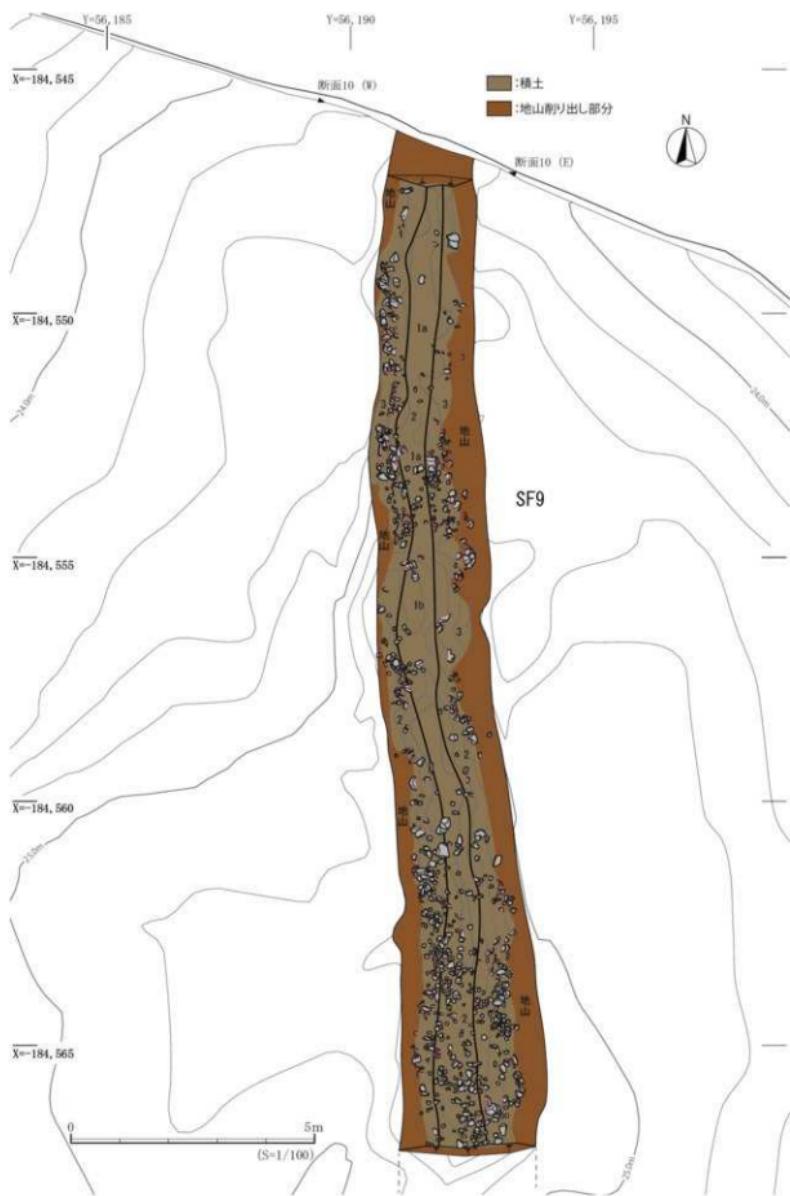
【SF12 石積み遺構】(第42~45図)

III-E区西北端で検出した。沖積地へ下る丘陵裾部を抑えるように構築されており、さらに調査区外の北側へ延びている。後世の擾乱により石積み遺構の背後(東側)がえぐれている箇所がある。

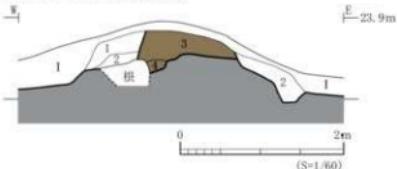
〔規模〕確認長約11.4m、高さ約0.8mである。

〔方向〕南北方向で、北で東に40度偏する。

〔構築方法〕斜面裾部西側を大きく削り、黒褐色のシルトを積みながら、基底部に人頭大の石を並べ、



断面 10 (平面図: 第 39 図)



No.	土色	土性	遺物など	備考
1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山縫多く含む	SF9 墓塗土
2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山縫多く含む	SF9-2 層 (埴土)
3	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山縫多く含む	SF9-3 層 (埴土)
4	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	シルト	地山縫少し含む	

第 40 図 SF9 土塁断面図

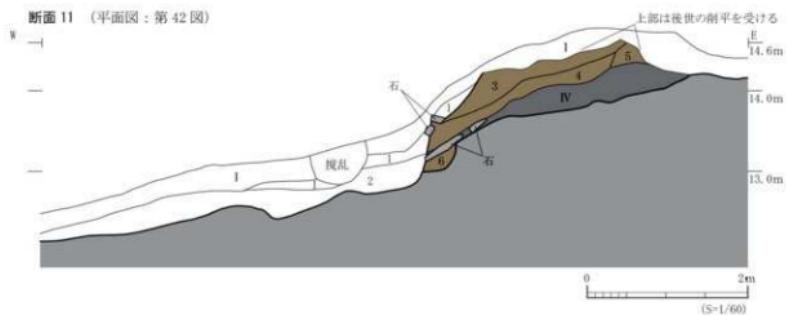


No.	造形・施文	種別	特徴	産地	年代	登録 No.
1	SF9 墓塗土	磁器	直 口径 (13.4) cm、底径 (8.3) cm、器高 3.0cm、染付、内面：外周思焼き、外面：草文	肥前	17C 後	17
2	SF9 3 層	磁器	直 染付、内面見込：蛇の目釉割ぎ	肥前	17C 前	18
3	SF9 3 層	磁器	直 染付、内面見込：蛇の目釉割ぎ	肥前	17C 前	24
4	SF9 3 層	磁器	直 染付、内面：草花文？、高台内砂付着	中国遼州	17C 後	25
5	SF9 墓塗土	直	口径 (9.1) cm、底径 (4.8) cm、器高 2.7cm、染付、内面見込：鉢底文、外面：朝顔文？	肥前	18C	16
6	SF9 3 層	陶器	直 径径 5.2cm、内外：灰釉、全体：輪郭線・貫入、瓦器手綱	肥前	17C 前	11
7	SF9 墓塗土	小皿	口徑 (11.5) cm、底径 4.0cm、器高 3.3cm、内面：網紋釉・見込軸の目釉割ぎ、外面：透明白釉	肥前	17C 後～18C 前	13
8	SF9 墓塗土	直	内面：灰釉、輪足、黃漬戸	肥戸美濃	17C	14
9	SF9 墓塗土	直	内面：灰釉、黃漬戸	肥戸美濃	17C	12
10	SF9 3 層	直	内面：網目目透状文	肥前	17C 後～18C 前	23
11	SF9 3 層	直	内外：灰釉			26

第 41 図 SF9 土塁出土遺物



第42図 SF12石積み遺構平面図



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	暗褐色 (7.5YR3/4)	シルト	小礫を少しあわせ	SF12 崩壊土
2	褐色 (10YR4/4)	シルト	小礫を多く含む	SF12-1 (植土)
3	暗褐色 (7.5YR3/20)	シルト	小礫を多く含む	SF12-2 (植土)
4	黒褐色 (7.5YR3/4)	シルト	角礫を多く含む	SF12-3 (植土)
5	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	風化礫の小粒を多く含む	SF12-4 (植土)
6	褐色 (7.5YR4/3)	シルト		

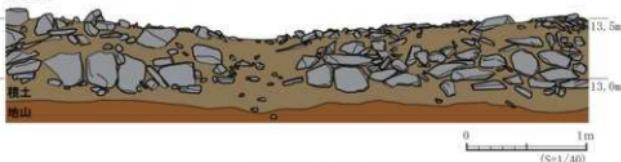
第43図 SF12石積み遺構断面図

立面2 (平面図: 第42図)

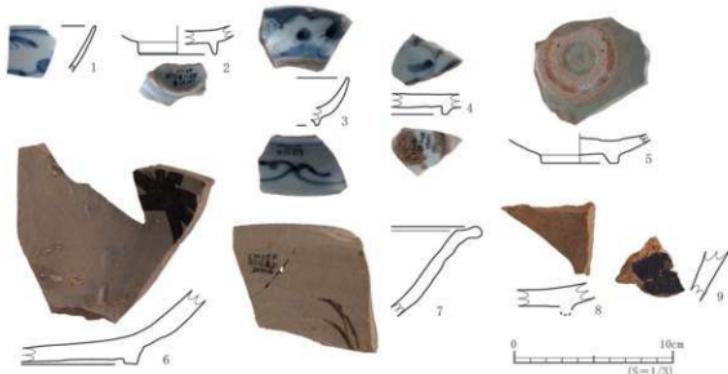
平面図



立面図

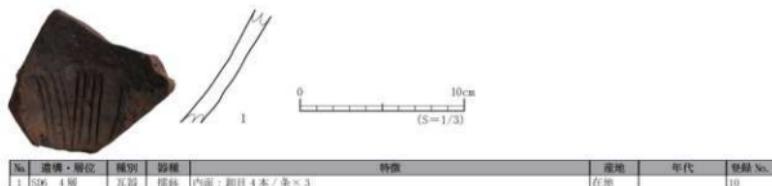


第44図 SF12 石積み遺構立面図(部分)



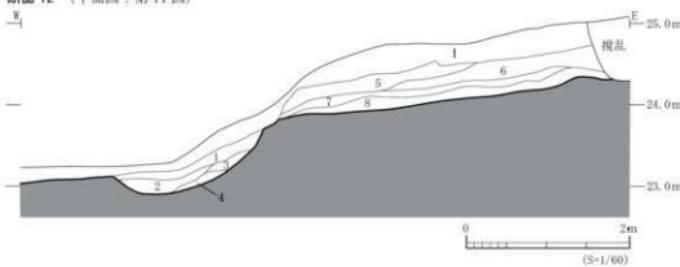
No.	遺構・層位	種別	詳細	特徴	产地	年代	登録No.
1	SF12 積土	磁器	碗 染付、外面：草花文		肥前	46	
2	SF12 石積上	磁器	盤 染付、外遍：團扇		肥前	49	
3	SF12 積土	磁器	盤 染付、内遍：梅花文、外面：唐草文		肥前	17C 後	45
4	SF12 磨礫土	磁器	盤 染付、内遍：草花文、外面高台内砂付着		肥前	17C 前	54
5	SF12 石積上	磁器	盤 底径4.7cm 内外：灰釉、内面見込：較の目袖剥ぎ・筋付着		肥前	17C 前	48
6	SF12 積土	陶器	大鉢 内外：灰釉、内遍：鉢沿草文・上げかに脚付掛け波しの一部確認		美濃	17C	43・44
7	SF12 積土	陶器	大鉢 内外：灰釉、内遍：鉢沿草文、6と同一個体か?		美濃	17C	40
8	SF12 積土	陶器	大鉢 内外：灰釉		關戸美濃		42
9	SF12 積土	陶器	小鉢 内外：鉢輪		關戸美濃		41

第45図 SF12 石積み遺構出土遺物



第46図 SD6溝跡出土遺物

断面12 (平面図: 第11図)



No.	土色	土性	混入物など	備考
1	黒褐色 (10YR2/3)	シルト	しまり無	SD8-1層 (自然堆積土)
2	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	地山ブロックを含む	SD8-2層 (自然堆積土)
3	褐色 (10YR4/6)	シルト	暗褐色シルトを含む	SD8-3層 (自然堆積土)
4	暗褐色 (10YR3/4)	シルト	地山ブロックを多く含む	SD8-4層 (自然堆積土)
5	黒褐色 (7.5YR3/2)	シルト	炭化物粒・遺物を含む	SX1-1層
6	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	炭化物粒・遺物を含む	SX1-2層
7	黒褐色 (10YR2/2)	粘土質シルト	炭化物粒・遺物を含む	SX1-3層
8	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	遺物を含む	

第47図 SX1遺物包含層・SD8溝跡断面図

その上に細長い角礫を小口積みに積んで構築している。

〔出土遺物〕積土や崩壊土から磁器13点、陶器6点が出土した。このうち9点を図示した(第45図1~9)。1~5は肥前産磁器の碗・皿である。5は内面を蛇の目釉剥ぎした後に砂が付着している。6・7は同一個体とみられ、鉄絵で草文が描かれた美濃産灰釉大鉢である。8は灰釉の大鉢で瀬戸・美濃産とみられる。9は小片のため年代・产地とも不明な鉄釉の擂鉢である。

B. 溝跡

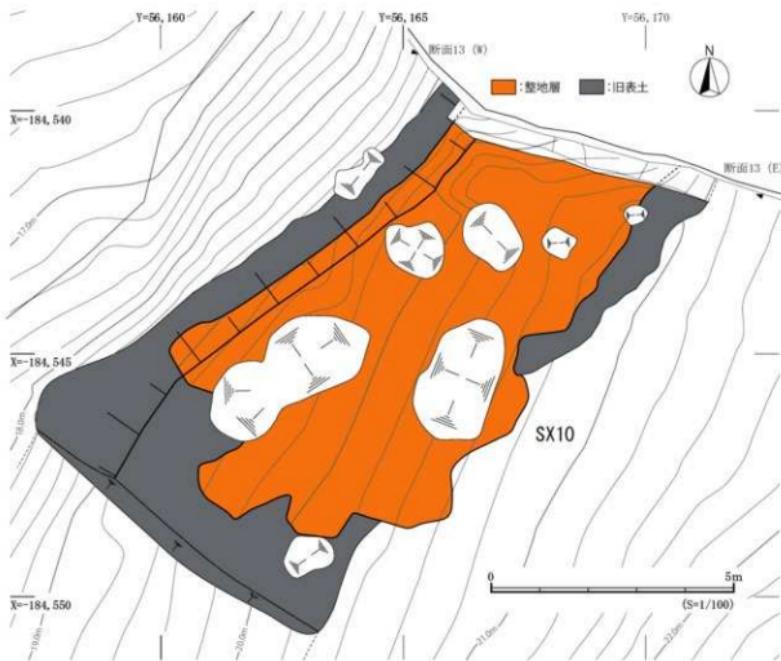
【SD6溝跡】(第36・37図)

I-B区南側で検出した南北方向の溝跡である。SF2石墨、SF5石積み遺構より古い。さらに調査区外の南側へ延びている。

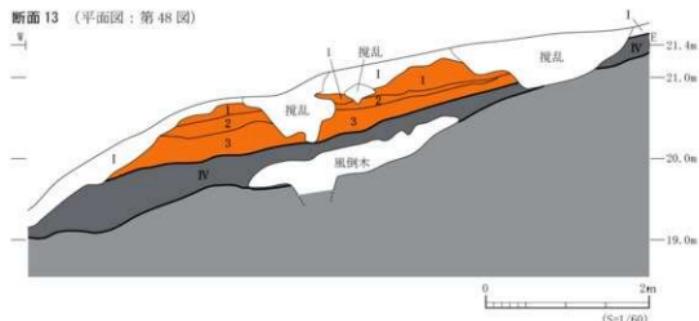
〔規模〕確認長14.5m、幅約2.6m、深さ最大0.6mである。断面はU字形を呈する。

〔方向〕南北方向で、北で西に11度偏する。

〔堆積土〕8層に分けられる。にぶい黄褐色シルトが主体の自然堆積土で、砂粒を含む層が多く認め

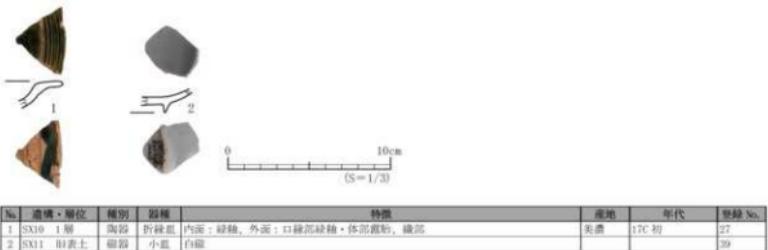


第48図 SX10 整地層平面図



No.	土色	土性	鉄入物など	備考
2	黄褐色 (10YR5/6)	シルト		SX10-1層
3	にぶい黄褐色 (10YR8/3)	シルト	小礫を多く含む	SX10-2層
13	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	小礫を多く含み、遺物をわずかに含む	SX10-3層

第49図 SX10 整地層断面図



第 50 図 SX10・11 整地層出土遺物

られる。

〔その他〕埋没後に上部を人為的に埋め戻して SF2 石墨や SF5 石積み遺構が構築されている。

〔出土遺物〕堆積土から瓦器製の擂鉢が 1 点出土している（第 46 図）。鉢目は 4 本単位で、太く刻まれている。下部は著しく摩滅している。在地産とみられる。

【SD8 溝跡】(第 11・47 図)

I -B 区北側で検出した南北方向の溝跡である。さらに調査区外の北側へ延びている。

〔規模〕確認長約 7.2m、幅約 1.8m、深さ最大 0.3m である。断面は U 字形を呈する。

〔方向〕南北方向で、北で東に 14 度偏する。

〔堆積土〕4 層に分けられる。暗褐色または黒褐色シルトで、自然堆積である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

C. 整地層

【SX10 整地層】(第 48 ~ 50 図)

II -C 区北側で検出した。さらに調査区外の北側へ広がっている。この上面で遺構は確認していない。

〔規模〕南北約 10.1m、東西 5.7m、残存する厚さは最大で約 0.9m である。

〔構築方法〕西側へ下る斜面の旧表土および地山の一部を削り出して、地山由来の土で盛土している。盛土は 3 層に分けられる。

〔出土遺物〕近世の磁器が 8 点、陶器が 2 点出土している。ほとんどが細片だが、うち 1 点を図示した（第 50 図 1）。縫部の折縁皿とみられる。

【SX11 整地層】(第 20 ~ 22・50 図)

I -A 区北側で検出した。石森城跡の主郭とみられる平場 1 の北側隅部にあたる。SX7 遺物包含層より新しい。この上面で遺構は確認していない。

〔規模〕南北約 6.3m、東西約 18.3 ~ 21.4m の範囲に広がり、厚さは約 1.0m 以上である。

〔構築方法〕SX7 遺物包含層の上に堆積した旧表土上に、地山由来の土を盛土している。盛土は 2 層に分けられる。下の 2 層は明黄褐色シルトで、軟質凝灰岩礫を多く含む。上の 1 層は黄褐色シルトで、拳大の軟質凝灰岩礫を微量、小礫を少量含む。



第 51 図 遺構外出土遺物

〔出土遺物〕 磁器が 1 点、陶器が 1 点出土している。うち 1 点を図示した（第 50 図 2）。磁器製の小皿で、文様等はない。

D. 遺構外出土遺物

表土等の遺構外から陶磁器が少量出土している。このうち中世陶器 1 点を図示し、近現代の磁器 2 点の写真を掲載した。第 51 図 1 は常滑産甕の体部とみられる。2 は戦時下の統制番号が入った皿で、3 の小杯は内面に「学校新築」の文字が入れられている。なお、2・3 は近現代に土取りされ宅地となっていた I - C 区で出土したものである。

6 総 括

(1) 繩文時代

A. 遺物

a. 繩文土器

縩文土器は、遺物包含層や遺構堆積土、表土などからテンパコで 24 箱出土したが、ほとんどは遺物包含層からの出土である。すべて胎土に植物纖維を含み、小破片が多く全体の器形を復元できた資料はない。このため、口縁部と胴部は一辺が 5 cm 以上の破片、底部は全点抽出して属性を調べた。さらに、それらのうち文様や縩文の残りの良いものについて採拓し、断面図を作成した。抽出した縩文土器は 338 点で、本書に掲載したのは 141 点である。縩文以外に文様がないものが多く、ある場合でも口唇部や口縁上端の刺突または刻目に限られるものが多数を占める。このため、SX1 と SX7 それぞれの特徴を述べ、両者を比較しながら編年的位置づけを考えてみたい。

① SX1 遺物包含層出土土器の特徴（第 13～15 図）

縩文土器は大別 2 層に分けて提示したが、両者の器種構成・器形・文様に大きな違いは認められないことから、一括して特徴を述べる。

【器種構成・器形】深鉢のみで、すべて平縁である。口縁部は外傾するものが多く、ほかに弱い外反や内弯するものがある。

【文様】縩文だけのものや口縁上端の刻目の下が縩文となるものが多く、渦巻状・蕨手状の撚糸圧痕や短沈線で広い文様帯を形成するものは少ない。縩文はほとんどが 0 段多条で、地文が分かれる抽出土器（62 点）の大部分は斜行縩文 33 点（53.2%）と非結束羽状縩文 21 点（33.9%）が占める。これらに次ぐのがループ文 7 点（11.3%）で、撚糸文は 1 点（1.6%）ときわめて少ない。

【内面調整】ほとんどがナデであるが、口縁部に広い文様帯を形成するものにミガキが多い傾向が認められる。

② SX7 遺物包含層出土土器の特徴（第 23～29 図）

縩文土器は大別 4 層に分けて提示したが、器種構成や器形、文様の主体を占める口唇部や口縁上端の刺突・刻目、縩文には共通点が多い。そこで、先に全体的な特徴を述べ、その後、大別 3・4 層と 1・2 層にみられた違いについて述べたい。

【器種構成・器形】器種は深鉢がほとんどで、鉢がわずかに伴う。深鉢は平縁が多く、突起がつくものや波状縁は少ない。口縁部は外傾するものが主体で、ほかに外反や弱い外反、弱い内弯がある。

【文様】縩文だけのものや口唇部に刺突または口縁上端に刻目を持ち、その下が縩文となるものが多く、口縁部に広い文様帯を形成するものは少ない。後者の文様は、1 段の撚糸圧痕や沈線による渦巻状・蕨手状文が短沈線と組み合うもの、半截竹管による押引き文、2 段の撚糸圧痕による文様などがある。このうち、1 段の撚糸圧痕や沈線などで広い文様帯を形成するものは、口縁部が弱く内弯する器形に多く認められる。

縩文はほとんどが 0 段多条で、地文が分かれる抽出土器 240 点の内訳は非結束羽状縩文 135 点

(56.3%)と斜行縄文 101 点(42.1%)大部分を占め、ほかにループ文 1 点(0.4%)や撚糸文 3 点(1.3%)がわずかに認められる（註 A）。また、羽状縄文の中には菱形に施文されるものがある。

【内面調整】ナデが多いが、口縁部に広い文様帯を形成するものにミガキが認められ、ほかに斜行縄文や条痕がある。

大別層位に基づく違いとしては、3・4 層が 2 段の撚糸圧痕による文様がみられるのに対し、1・2 層は 1 段の撚糸圧痕による渦巻文、1 段の撚糸圧痕または沈線で描いた渦巻文・蕨手文と短沈線が組合う文様が多く、それと結びつきが強い口縁部が弱く内弯する器形や内面調整にミガキが多い。口唇部に刺突や刻目を持つ土器が多い。内面に斜行縄文や条痕が施されるものが認められる点を指摘しておきたい。

以上のほかに、口唇部に刺突を持ち、両面に条痕が施されたものがあるが、後述する理由から古い時期の混入と考えられる（第 27 図 1）。

③ 出土土器の比較と編年の位置づけ

< SX1 遺物包含層 >

SX1 出土土器の特徴は、胎土に植物纖維を含む。平縁の深鉢のみで口縁部は外傾するものが多い。縄文だけのものや口縁上端に刻目を持ちその下が縄文となるものが多く、ほかに渦巻状の撚糸圧痕や短沈線で広い文様帯を形成するものが少量認められる。縄文はほとんどが 0 段多条で、斜行縄文と非結束羽状縄文が大部分を占め、ループ文がこれに次ぐ、などの点があげられる。

類例としては、七ヶ浜町左道貝塚 H 区遺物包含層下層（七ヶ浜町教委 1991）、角田市土浮貝塚第 V・VI 層群（東北大学考古研・角田市教委 2008）、七ヶ宿町原頭遺跡第 II 群土器（宮城県教委 1986b）などがあげられ、縄文時代前期初頭の上川名式第 2 段階（早瀬 2017）に位置づけられる（註 B）。

第 2 段階と SX1 出土土器を較べると、SX1 には口唇部に刺突を持つ深鉢や内面の斜行縄文・条痕がなく、外面はループ文が多くなる。この中で、口唇部に刺突がなくループ文の割合が高い点は、上川名式第 2 段階より新しい傾向を示すが、第 3 段階の特徴である複数条の撚糸圧痕で渦巻文や蕨手文が描かれ、その空間部に矢羽根状沈線や円形竹管文が施される。結束羽状縄文が卓越する、といった点は SX1 に認められない。したがって、SX1 出土土器は一部に新しい要素が認められるものの、上川名式第 2 段階と理解しておきたい。同段階では、先述した渦巻状の撚糸圧痕や蕨手状の撚糸圧痕・沈線が短沈線と組み合う文様が典型的に認められる。

< SX7 遺物包含層 >

SX7 出土土器の特徴は、胎土に植物纖維を含む。器種は深鉢がほとんどで、鉢がわずかに伴う。深鉢は平縁が多く、突起がつくものや波状縁は少ない。口縁部は外傾するものが主体で、ほかに外反や弱い外反、弱い内弯がある。文様は、縄文だけのものや口唇部に刺突または口縁上端に刻目を持ち、その下が縄文となるものが多く、口縁部に広い文様帯を形成するものは少ない。後者の文様としては、1 段の撚糸圧痕や沈線による渦巻状または蕨手文が短沈線と組み合うもの、半截竹管による押引き文、2 段の撚糸圧痕による文様などがある。このうち、1 段の撚糸圧痕や沈線などで広い文様帯を形成するものは、口縁部が弱く内弯する器形に多く認められる。縄文はほとんどが 0 段多条で、斜行縄

文と非結束羽状縄文が大部分を占める。また、羽状縄文の中には菱形に施文されるものがある、などがあげられる。

こうした特徴は、SX1と共に共通点が多いことから縄文時代前期初頭の上川名式第2段階（早瀬2017）を中心とすると考えられる。一方、大別3・4層には2段の撫糸圧痕による文様や口唇部に刺突や刻目を持つ土器が多い。内面に斜行縄文や条痕が施されるものがあるなどの点は、山元町北経塚遺跡SI25 穫穴住居跡やD区基本層VI層（山元町教委2010）、A区遺物包含層III層（山元町教委2004）に類例が求められ、上川名式第1段階に位置づけられている。しかし、同段階の良好な例は他に名取市泉遺跡第2遺物包含層出土土器（名取市教委2010）があるので本遺跡周辺に認められないこと、他の特徴については大別1・2層と共に共通点が多いことから、現時点ではSX7出土土器をは上川名式第1～2段階と理解し、早期末葉から前期初頭の時期と考えておきたい。その場合、石森城跡の南に位置し、上川名式第2段階が主体で第1段階を含む中沢遺跡第1群土器（石巻市教委2018）とは、同じ時間幅の中で捉えられる。

このほか、大別3層から出土した口唇部に刺突を持ち両面に条痕が施された深鉢は、早期末葉と考えられる。

註A SX7の3～6層と確認面出土土器は、層位が限定できなかったため、点数の集計は行っていない。

註B 宮城県域を中心とした上川名式の変遷案は相原1990と早瀬2017があるが、本遺跡の南に位置する中沢遺跡は土器の考察に後者を採用している（石巻市教委2018）。このため、本書でも両遺跡の関係性を比較するためにも早瀬案に従って分析を行うこととしたい。

b. 石器

石器は、未報告の破片や表土出土の資料も含めると、計155点出土した。それぞれの出土点数の内訳は第1表に示すとおりである。

このうち石匙は、両側辺に抉りを入れて作出したつまみ部を有し、つまみ部に対して先端部が縦型のものと斜め方向に長いものが認められる。いずれも正面は全面に調整刺離が施されているのに対して、裏面は素材面を大きく残す。裏面に打面調整刺離を作り出し、その刺離面を打点として正面に薄く奥まで入る調整刺離を施している。このような石匙は、中沢遺跡や羽黒下遺跡でも前期初頭から前葉の遺物包含層から出土しており（石巻市教育委員会2018・2021）、いわゆる「松原型」として縄文時代早期後葉～前期前葉の東日本に特徴的なものとされている（秦1991）。

遺構番号	石鏃	尖頭器	石匙	菱状石斧	打削石斧	穀器	磨製石斧	板状石鋸	圓形石器	不定形石器	磨石・敲石類	石器・台石類	剥片	石核	石棒・石剣類	その他の石製品	計
SX1	2		3	1	8		1	1	1		10	6	24	2	2	1	62
SX7	1	2	2		6	1				4	30	2	18	3		2	71
その他 の遺構		1			2						1	1	2				7
表土							1				5	1	7	1			15
計	2	2	5	3	16	2	1	1	1	4	46	10	51	6	2	3	155

第1表 石器・石製品集計表

また、打製石斧は平面形が楕円形を呈し、片面に自然面を大きく残すものが認められる。このような形態の打製石斧は、中沢遺跡や羽黒下遺跡でも確認されており（石巻市教育委員会 2018・2021）、縄文時代早期末葉～前期前葉に特徴的にみられる形態であると指摘されている（中島 2002）。

B. 遺構

今回検出した遺物包含層の分布範囲や遺物量は、SX7 に対し SX1 は比較的小規模であると言える。形成時期は、SX7 が縄文時代早期末～前期初頭（上川名式第 1～2 段階）、SX1 は前期初頭（上川名式第 2 段階）で、SX1 の方がやや新しい様相を呈する。現時点では SX1 と SX7 の供給源に前後関係があるのか、並立していた時期があったのか判断することは難しい。

C. 小結

これまで中世の城館跡として登録されていた石森城跡だが、今回の調査によって縄文時代早期末～前期初頭における遺物包含層の存在が明らかとなった。

2箇所の遺物包含層はその位置・方向・周辺の地形から、形成過程が異なると考えられる。SX1 遺物包含層は、南東から北西に向かって傾斜する斜面に分布しており、その形成に関与した居住域は I -C 区周辺に存在したと想定される。ただし、I -C 区は近代に小学校校庭造成のために大規模な土取りが行われ、その後は住宅地として利用されており、今回の調査では遺構・遺物とも全く検出できなかった。さらに東側の斜面上にあたるIV区でも、遺構・遺物は検出されていない。SX7 遺物包含層は、南から北に向かって傾斜する斜面に分布しており、その形成に関与した居住域は I -A 区に存在したと想定される。今回の調査では I -A 区の大半が調査区外であり、供給源としての居住域等の実態は不明である。

周辺の遺跡をみると、中沢遺跡で早期末～前期初頭（上川名式 1～2 段階）の遺物包含層が検出されている。石森城跡では前期前葉（大木 1 式）以降の縄文時代の遺構・遺物は検出されていないが、中沢遺跡やその南側に位置する羽黒下遺跡では灰跡や遺物包含層がみられ、特に前期中葉（大木 4 式）以降になると中沢遺跡では大規模集落が形成されるようになる。石森城跡の遺物包含層を形成した早期末～前期初頭の集落は比較的小規模で、その後の前期前葉以降には南側の中沢遺跡や羽黒下遺跡の集落に統合されていったと想定される。

（2）近世以降

A. 遺物

出土遺物は、石器・土器・石積み遺構から出土したものが大半である。

磁器では皿類が多く、碗などがわずかに含まれる。17世紀代の肥前産の製品が主体を占める。SF5 石積み遺構では 17世紀中頃の肥前産輪花小皿（第 38 図 1）が、SF9 土器では 17世紀前半の肥前産皿（第 41 図 2）や中国漳州窯産染付皿（同 4）のほか、墨弾きの施された 17世紀後半の肥前産皿（同 1）が出土している。SF12 石積み遺構からも、17世紀代の肥前産の碗・皿（第 45 図 3～

5) が出土している。18世紀以降とみられる資料としては、SF9 土壘の崩壊土から出土した肥前産染付蓋が挙げられる（第41図5）

陶器では皿類が多く、鉢類がこれに次ぐ。皿類は17世紀代の製品が主体を占め、肥前産や瀬戸・美濃の製品が含まれる。砂目の認められる17世紀前半頃の肥前産皿（第38図4）や、織部の折縁皿（第50図1）などがある。鉢類では、SF12 石積み遺構から17世紀代の美濃産灰釉鉢（第45図6・7）が出土しているほか、SF5 石積み遺構やSF9 土壘でも灰釉鉢の破片が出土している。

瓦器では、SD6 溝跡から壠鉢が出土したが年代は不明である。

この他、中世陶器とみられる甕の体部破片がI-B区表土から1点だけ出土した。

B. 遺構

調査では、石壘・土壘・石積み遺構、整地層、溝跡などを検出した。以下、遺構ごとに考察する。

①石壘・土壘・石積み遺構

石壘等については4箇所で確認した。

SF2 石壘は調査前から地上顕在遺構として確認していたもので、確認長約29m、上幅0.3～0.9m、高さ0.4～0.9mである。地山を削り出した上に土壘状に土を積み、東側を削り据方とし、拳大から人頭大の石を積んでいる。遺物は出土していない。この石壘は調査区外の北側へ200m以上続いており、そのほぼ全てが片面だけでなく全体を石で覆うような構造で、特に北半部は内部も石積みにより構築されているとみられる。ただし、幅や高さはほぼ変わらない。この石壘は既に藤沼が「猪除け」の可能性に言及しているが（藤沼1981）、同様の長大な石壘は鮎川浜の御番所山周辺にも「鹿馬除け」として複数存在するとの記述が『牡鹿町誌』にあるほか、十八成館跡の北側にも存在する事が分布調査で報告されている。SF2 石壘については、主要な平場群と方向等が全く異なることや、周辺の類例等から、城館に関係するものではなく、シカなどの獣除けの施設と考えられ、近世以降の構築とみられる。なお、町誌には石壘の東側に沿って空堀があるとされるが、今回の調査ではやや浅く窪んでいることは確認できたものの、底面からビニール製品が出土している。地元住民によれば、近年まで石壘に沿って北側へ抜ける生活道が存在したことである。

SF5 石積み遺構は主郭とみられるI-A区東側にある自然地形の盛り上がりの縁辺に巡らされており、確認長約18m、幅1.6～3.0m、高さ0.4～0.6mである。SD6 溝跡と重複し、これより新しい。積土から17世紀代の磁器や陶器が出土している。SF5 石積み遺構は西側の斜面裾を抑える土留めのような構造物とみられ、17世紀後半頃の構築とみられる。

SF9 土壘は南北方向の土壘で、地山を削り出した基底部の上に礫を多く含む土を積んで構築している。確認長約20m、基底幅1.2～2m、高さ0.8～1.3mである。積土などから17世紀代の肥前産の染付皿や漳州窯産染付皿が出土しており、構築年代は17世紀後半頃とみられる。方向が南側の平場群と異なり、北側へ張り出した緩い尾根上の頂部に立地し、その先の斜面までは続かないこと、現在の地籍図でもこの土壘が地境の線上に位置していることから、土壘は平場群に伴う防衛施設ではなく、地境の目印ではないかと推測した。

SF12 石積み遺構は丘陵脚部に位置するⅢ-E 区平場の縁辺部を抑えるように構築されている。確認長約 11m、高さ約 0.8m である。出土遺物には 17 世紀代の肥前産染付皿や美濃産灰釉鉢などがある。構築年代は 17 世紀後半頃とみられる。他と違い細長い角礫を比較的多く使用している特徴を持つが、やや粗雑な積み方である。調査区外北側の残存状況や崩壊土中の礫の量などを勘案しても、1 m程度の高さの石積みであったと考えられ、土留めとして機能したとみられる。

②溝跡

SD6 溝跡は南北方向の溝跡で、確認長約 14m、幅約 2.6m、深さ最大 0.6m、断面は U 字型を呈する。出土遺物には瓦器製擂鉢があるが、体部破片のため年代は不明である。SF2 石塙・SF5 石積み遺構と重複しこれより古い事から、構築年代は 17 世紀以前と推測した。主郭の東側を区画するような溝跡ではあるものの、規模が小さく浅い事から、堀のような施設であったとは認められない。

SD8 溝跡は南北方向の溝跡で、確認長約 7m、幅 1.8m、深さ最大 0.3m、断面 U 字型を呈する。遺物は出土していない。この場所には、近年まで北側に抜ける生活道が通っていたとの事である。

③整地層

SX10 整地層は II-C 区北端で確認した。南北約 10m、東西 5.7m、厚さ最大 0.9m である。出土遺物には 17 世紀初頭頃の美濃産折縁皿などがある。出土した遺物がわずかで、いずれも小片であることから、構築年代は 17 世紀以降としたい。上面でピット等は検出できなかった。整地の方法は、後述する SX11 と比較してかなり粗雑な印象を受ける。SX10 整地層の周辺にはいくつか平場状の段が存在するが、各段差は低く、いずれも上面は緩斜面となっており、南側の主郭等の造作とは様相が大きく異なる。これらの段については、紫桃や藤沼の図でも平場として表現されていないことから（紫桃 1973、藤沼 1981）、城館の平場ではなく、その周縁部の土地利用（耕作など）に伴うもの可能性が考えられよう。

SX11 整地層は、主郭とみられる平場 1 (I-A 区) の北側隅部で確認した。確認した範囲は南北約 6.3m、東西約 18 ~ 21m、厚さは最大約 1m である。北側から入る沢 (II-D 区) に堆積した旧表土の上に、軟質凝灰岩の礫を含む 2 枚の層を盛土して構築している。出土遺物には陶磁器が 2 点あるものの、細片で年代を特定するには至らなかった。上面でピット等は検出できなかった。平場 1 の北側を整形するための盛土であったと考えられる。

C. 小結

以上、検出した遺構には石塙や土塙があるものの、中世城館の防衛施設ではなく、近世以降に区画や土留め、獣除けのために構築されたものとみられる。また、今回の調査区内では I-A 区北側隅部を除いて明確な平場は確認できず、建物に伴うような柱穴等の検出もなかった。事前に行った地形観察や測量では、平場 1 ~ 4 (I-A・C・D、III-D 区) が平場群として認められたが、平場の間に切岸といえるような急傾斜もなく、堀や土塙等も存在しない。紫桃が指摘しているように（紫桃 1973）、城郭よりも屋敷地の様相が強い。平場群の北や北西には、造作のゆるい平場状の段がいくつ存在するが、これらは屋敷周縁部の土地利用（耕作など）に伴うもの可能性が考えられる。大原

湾を望む丘陵端の頂部に平場群を造成して屋敷とし、その北側斜面に地境の土塁や土留めの石積みを作り、川沿いの低地部を田地として利用するような景観が想定される。

出土した陶磁器類は 17 世紀代のものが主体を占める。漳州窯産や初期伊万里の皿のほか、いわゆる笠原鉢と呼ばれる美濃産の灰釉鉢など、高級品ではないものの、当時の一般的な庶民層では所有が難しいような製品も含まれている。これら出土遺物の年代や内容は、御仮屋守や大肝入も務めるなど、特に近世前期にその活動が記録される石森氏の存在とも重なり、近世の地域様相を考える上で興味深い資料といえる。

なお、『牡鹿町誌』は石森城について、元は中世に築城されたと述べている。とするならば、石森城の構造は、①平場群を含む地上顕在遺構はすべて近世初頭に築造された可能性と、②地上顕在遺構のうち平場群は中世城館として築かれ、近世初頭に改修されるとともに、土塁や石塁等をともなう範囲も付加された可能性の、両方が考えられよう。そしてその検証については、調査対象範囲外であった平場群のさらなる調査・検討を待ちたい。

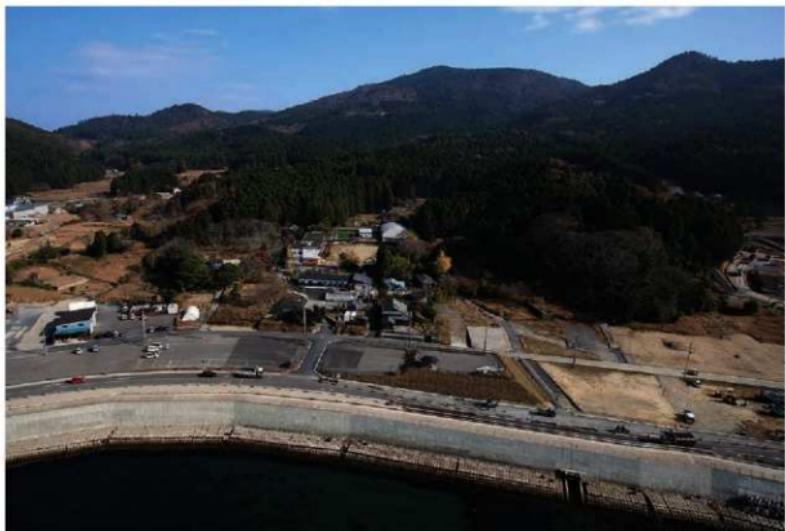
(3)まとめ

1. 石森城跡は、宮城県北東部、石巻市大原浜字台町屋敷に所在する。遺跡は牡鹿半島南部に位置し、仙台湾に面する大原湾に沿って連なる複数の小丘陵の一つに立地している。
2. 今回の発掘調査は、東日本大震災からの復興事業である県道石巻鮎川線給分浜復興道路事業に伴い実施した。調査面積は 5,150m²である。
3. 調査の結果、縄文時代では前期初頭の遺物包含層 2 箇所、近世以降では土塁・石塁等 4 条、溝跡 2 条、整地層 2 箇所、ピット 1 個を検出した。出土遺物は縄文土器、石器、中世陶器、近世陶器などである。
4. 縄文時代の遺物包含層 2 箇所は、出土遺物から前期初頭の上川名式 1 ~ 2 段階に位置づけられる。
5. 近世以降の土塁・石塁等は、17 世紀以降に位置づけられる。遺物は 17 世紀代の陶磁器が主体を占め、漳州窯産や初期伊万里の皿のほか、瀬戸美濃産の皿や鉢などがある。これら遺構・遺物の年代は、近世前期に記録される石森氏の活動時期と重なる。
6. 石森城跡は中世の城館跡として登録されているが、今回の発掘調査では中世の遺構は検出できなかった。また、発掘にあたり実施した地形観察や測量調査の結果も合わせて考えると、4 段の平場から構成される屋敷地のような縄張りが想定された。
7. 調査成果から想定される石森城の構造としては、①平場群を含む地上顕在遺構はすべて近世初頭に築かれたという可能性と、②地上顕在遺構のうち平場群は中世城館として築かれ、近世初頭に改修されるとともに、土塁や石塁等をともなう範囲も付加されたという、2通りの可能性が考えられる。

【引用・参考文献】

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後半から前期前葉にかけての土器編年」『考古学雑誌』第 76 卷第 1 号 pp.1 ~ 65
- 石巻市教育委員会 2018 『中沢遺跡』石巻市文化財調査報告書第 14 集
- 石巻市教育委員会 2021 『羽黒下遺跡』石巻市文化財調査報告書第 16 集
- 石巻市史編さん委員会 1996 『石巻の歴史 第一巻 通史編（上）』
- 出光美術館編 1998 『大皿の時代展－宴の器』
- 大崎市教育委員会 2008 『東要害貝塚』大崎市文化財調査報告書第 3 集
- 大橋康二 2014 『文様別 小皿・手塙皿図鑑』青幻舎
- 大橋康二・西田宏子監修 1988 『別冊太陽 63 古伊万里』
- 牡鹿町誌編纂委員会 1988 『牡鹿町誌 上巻』
- 加藤孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究—東北地方縄文式文化の編年学的研究（1）—」『宮城学院女子大学研究論文集』 pp.183 ~ 199
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』
- 興野義一 1967 「大木式土器理解のために（1）」『考古学ジャーナル』第 13 号 pp.16 ~ 18
- 楠本政助 1973 「石巻市田代島仁斗田貝塚」『石巻地方の歴史と民俗』 pp.5 ~ 24
- 後藤勝彦 2006 「南境貝塚妙見地区の調査—陸前地方縄文時代早期末前期初頭の編年学的研究—」『宮城考古学』第 8 号 pp.55 ~ 92
- 佐藤洋 2002 「仙台市内出土の陶磁器集成—近世—」『仙台市博物館調査研究報告』第 22 号 pp.1 ~ 16
- 七ヶ浜町教育委員会 1991 『左道貝塚』七ヶ浜町文化財調査報告書第 7 集
- 七ヶ浜町歴史資料館 2018 『大木式土器の世界』
- 紫桃正隆 1973 『史料 仙台領内古城館 第二巻』宝文堂
- 白鳥良一 1974 「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の考古歴史論集』 pp.1 ~ 54
- 仙台市教育委員会 1980 『三神峯遺跡—東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部 C 地点緊急発掘調査—』仙台市文化財調査報告書第 25 集
- 仙台市教育委員会 1997 「大貝中遺跡」「相ノ原・大貝中・川添東遺跡」仙台市文化財調査報告書第 217 集 pp.163 ~ 258
- 多治見市文化財保護センター 2011 『笠原跡－直径 33 センチのキャンバス』
- 田中則和 2005 「東北地方中世墓の様相と画期」『東北中世史の研究 下巻』 pp.51 ~ 119
- 弦本美菜子 2016 「日本における漳州窯系陶磁器の流通・消費」『中近世陶磁器の考古学 第三巻』雄山閣 pp.137 ~ 151
- 東北大大学院文学研究科考古学教室・角田市教育委員会 2008 『阿武隈川下流域における縄文貝塚の研究 土浮貝塚』角田市文化財調査報告書第 33 集
- 東北歴史資料館 1989 『宮城県の貝塚』東北歴史資料館資料集 25
- 東北歴史資料館 1990 『解説 葛西家文書』東北歴史資料館資料集 28
- 東北歴史資料館 1994 『里浜貝塚IX—宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚梨木東地点の調査—』東北歴史資料館資料集 36
- 中島誠 2002 「群馬県における縄文時代早期から中期初頭の打製斧形石器」『石斧の系譜—打製斧形石器の出現から終焉を追う—予稿集』 pp.57 ~ 62
- 名取市教育委員会 2010 「泉遺跡」「泉・前野田東・北代遺跡他 一愛島東部第二土地区画整理関係発掘調査報告書 第一分冊』名取市文化財調査報告書第 59 集
- 鳴瀬町教育委員会 1977 「金山貝塚」「亀岡遺跡・金山貝塚」鳴瀬町文化財調査報告書第 1 集

- 秦昭繁 1991 「特殊な剥離技法をもつ東日本の石匙—松原型石匙の分布と製作時期について—」『考古学雑誌』第76卷第4号 pp.359～387
- 早瀬亮介 2017 「仙台湾周辺における前期初頭縄文土器の変遷と空間変異」『物質文化』97 pp.35～57
- 藤沼邦彦 1981 「宮城県」『日本城郭体系 第3巻』新人物往来社 pp.181～415
- 瑞浪陶磁資料館 2003 『特別展 美濃の鉢』
- 宮城県教育委員会 1969 『埋蔵文化財緊急調査概報—南境貝塚—』宮城県文化財調査報告書第20集
- 宮城県教育委員会 1981 「宇賀崎貝塚」「金剛寺貝塚」「宇賀崎貝塚」「宇賀崎1号埴他」宮城県文化財調査報告書第67集 pp.55～182
- 宮城県教育委員会 1986a 『今熊野遺跡II 繩文・弥生時代編』宮城県文化財調査報告書第114集
- 宮城県教育委員会 1986b 「原頭遺跡」「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書II 小柴川遺跡遺物包含層土器編 原頭遺跡 薊源寺跡 大熊南遺跡』宮城県文化財調査報告書第117集 pp.897～932
- 宮城県教育委員会 1987 「前田遺跡」「中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡他—東北横断自動車道遺跡調査報告書II—」宮城県文化財調査報告書第121集 pp.523～594
- 宮城県教育委員会 1993 『下南山遺跡』宮城県文化財調査報告書第155集
- 宮城県教育委員会 2006 「浦宿B遺跡」「東山官衙遺跡周辺地区ほか」宮城県文化財調査報告書第208集 pp.47～84
- 宮城県教育委員会 2009 『石森館跡』宮城県文化財調査報告書第220集
- 山元町教育委員会 2004 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第3集
- 山元町教育委員会 2010 『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第4集



道跡遠景(南西から)



道跡遠景(北から) 正面は大原湾で、遠くに田代島がみえる

図版1 石森城跡航空写真(1)



図版2 石森城跡航空写真（2）



道路南側完掘後（北西から）



道路南側完掘後（南西から）



道路南側完掘後（北から）



道路北側完掘後（南西から）



道路南側のベルト（西から）



SX1とSF2石壁の重複状況（南西から）



道路南側の南北断面アップ（西から）



調査風景

図版3 SX1 遺物包含層



完掘後（北東から） 北から入る沢にSX7が形成され、それを第IV層が覆い、さらに緑色のSX11整地層で埋め戻された



完掘後（上から） 上が南で、左はSP9土壌



道路北側の石積み（南東から）



SF2・SX1断面（南から） 黒色層はSX1、黄褐色層がSF2積土



SF2とSX1遺物包含層（北西から）



調査区南端の断面（北から）



調査風景

図版5 SF2 石壁



SF5 遺構確認状況（南東から）



SF5 中央部の断割り部分（南から）



SF5 と SD6 北端部の重複状況（北から）



SF5-3 層陶器出土状況



SF5 完掘後（南から）



SF5・SD6 断面（調査区南壁。北西から）



SD6 完 挖 後（南から）



SD6 完 挖 後（北から）

図版6 SF5 石積み遺構、SD6 溝 跡



全 景（南東から）



中 央 部（南から）



調査区北壁の断面（南西から）



3層陶器出土状況



調 査 風 景

図版7 SF9 土 壁



全 景 と 調 査 区 北 壁 の 断 面 (南から)



全 景 (南西上空から)



調査区北壁の断面 (南西から)



中央部断面 (南西から)



積土陶器出土状況

図版8 SF12 石積み遺構



SX8 溝跡断面（調査区北壁、南から）



SX10 整地層（南西から）



SX10 整地層断面（調査区北壁、南西から）



SX11 整地層（西から）



SX11 整地層（北西から）



SX11 整地層断面（西から）



II-A 区東斜面（南東から） 左の土手は SF9



P 1 断面（東から）

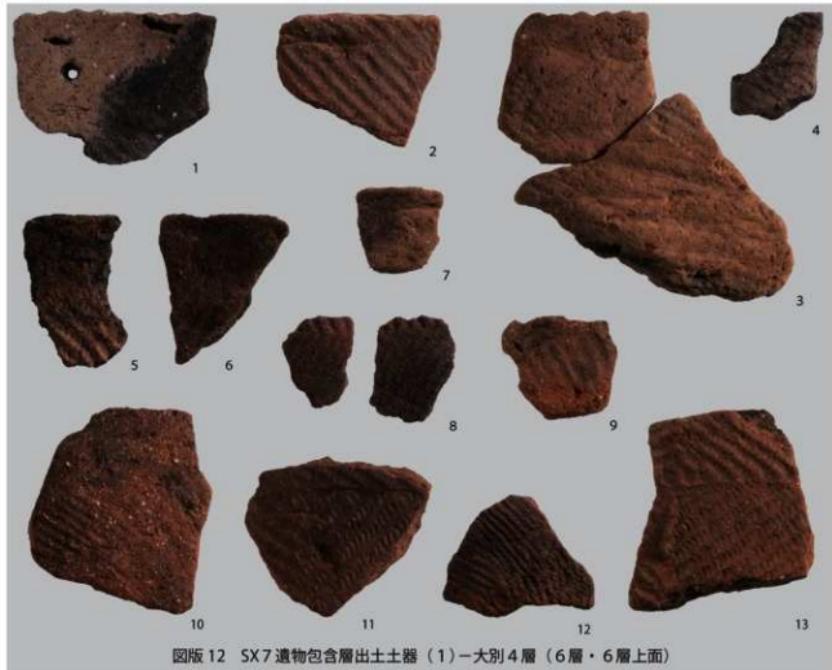
図版9 その他の遺構



图版 10 SX1 遗物包含层出土土器 (1)一大别 2 层 (3 层・2 层)



図版 11 SX1 遺物包含層出土土器 (2)－大別 1 層 (1 層・確認面)



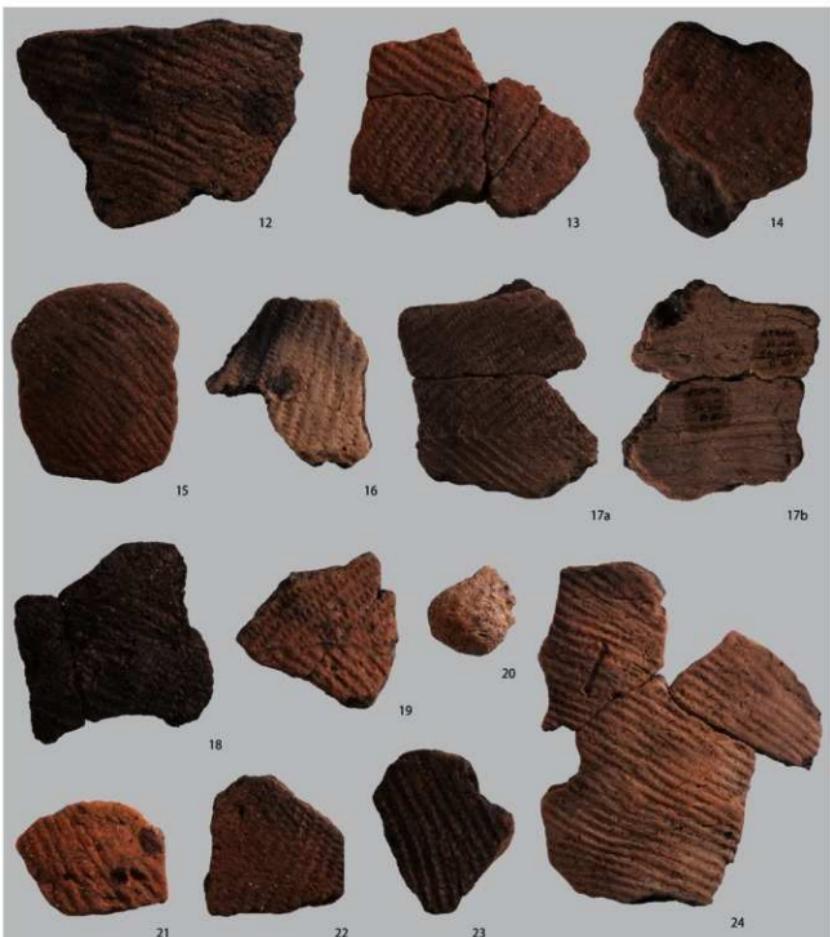
図版 12 SX7 遺物包含層出土土器 (1)－大別 4 層 (6 層・6 層上面)



図版13 SX7 遺物包含層出土土器(2)一大別4層(6層・6層上面)



図版14 SX7 遺物包含層出土土器(3)一大別3層(5層・5層上面・4層)



圖版 15 SX7 遺物包含層出土土器 (4) — 大別 3 層 (5 層・5 層上面・4 層)



圖版 16 SX7 遺物包含層出土土器 (5) — 大別 2 層 (3~6 層・3 層)



図版 17 SX 7 遺物包含層出土土器 (6)一大別 2 層 (3 層)



図版 18 SX 7 遺物包含層出土土器 (7)一大別 1 層 (2 層・1 層・確認面)

2・3層



1層・1～3層

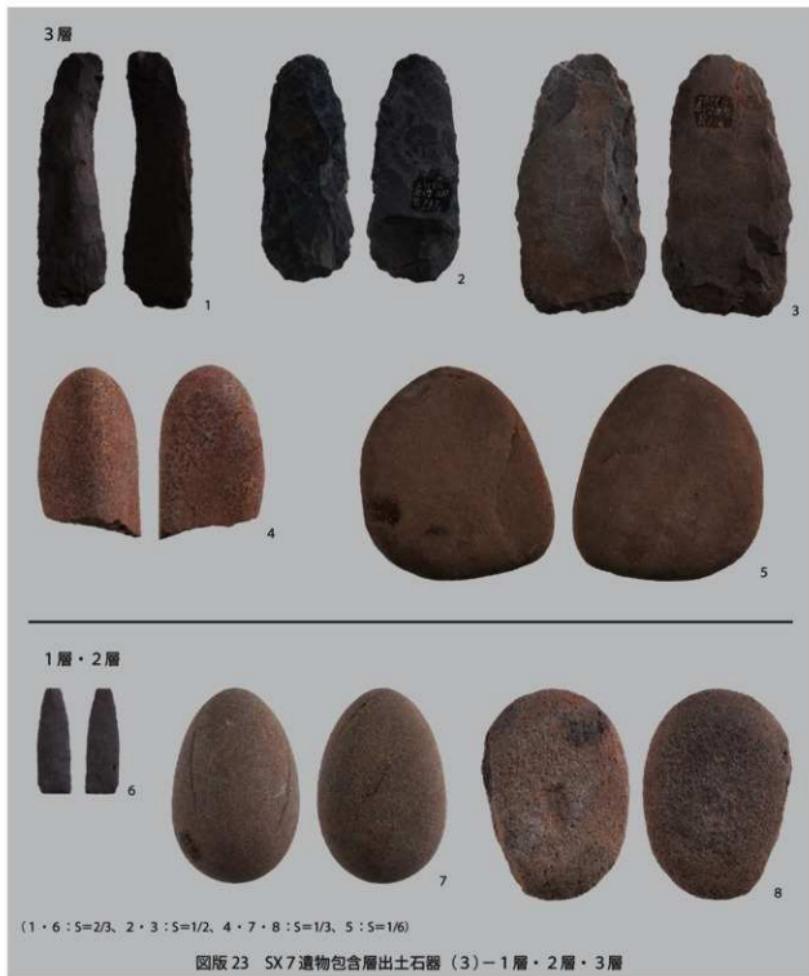


(1~4・8・9・11:S=2/3、5・6・10:S=1/2、7:S=1/3)

図版 19 SX1 遺物包含層出土石器 (1) - 1層・2層・3層







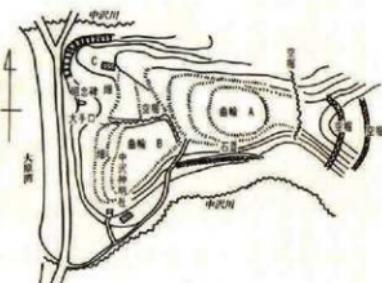
第4章 中沢館跡

1 中沢館跡の歴史と現況

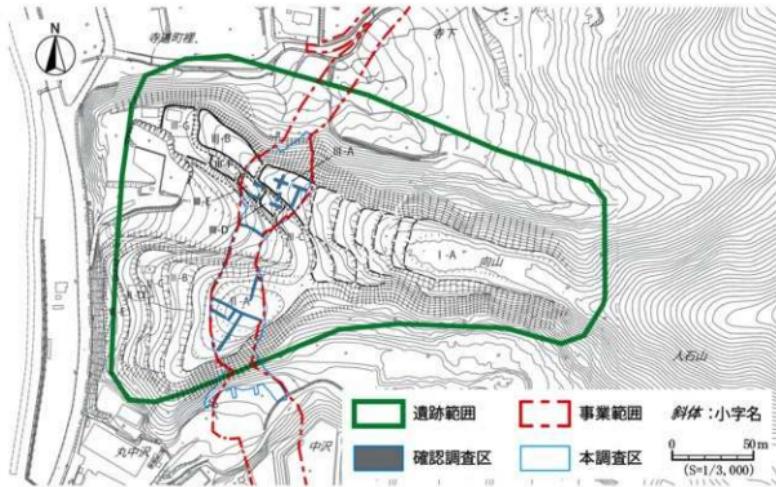
中沢館跡に関する記録は、中世および近世の文書には認められない。中沢館跡は昭和 60 年（1985）に当時の牡鹿町教育委員会が、城館等に造詣の深い郷土史家の紫桃正隆に調査を依頼し、現地踏査の結果城館跡とされ（牡鹿町誌編纂委員会 1988）、後に埋蔵文化財包蔵地として新規登録されたという経緯を持つ。それまでこの場所に城館跡等の伝承は存在していない。

城跡の南西斜面には中沢神明社と呼ばれる小社がある。藩政期までは丘陵の頂部が社地で、元はそこに鎮座していたと伝えられている。この神明社には、天正 16 年（1588）に葛西晴信から戦勝祈願状が寄せられているが、その名宛に中沢左近丞の名が記されている（宮城県史編纂委員会 1958）。この人物は当地の有力者であったとみられ、天正 18 年（1590）には晴信からの黒印状により網一張の特権が与えられている（石巻市史編さん委員会 1996）。中沢館跡の発見に際し、南西斜面にこの中沢左近丞に関わる神明社があることから、左近丞の居城に比定されたとみられる。

今回の調査に当たって事前に踏査を実施



第52図 中沢館跡略図 (『牡鹿町誌』所収)



第53図 中沢館跡の地形と調査区配置図

し、地形観察を行った結果が第53図である。東側に最も大きい平場Ⅰ-Aがある。東西に細長い形状で、平坦というよりは緩い尾根状に傾斜を持つ。その西側にはいくつか狭い平場状の段差が認められる。南西部のⅡ-Aも緩やかな山なりの地形で平坦とは言い難い。その西側にも、かつて畠地だった平場状の段差が続く。北西部のⅢ-A～Gは南北両側に急傾斜を持ち、平場状の段差があるが、ここも近年まで畠地や果樹園として利用されていた。ⅡとⅢの間には浅い沢が西から入り込んでいる。Ⅰの東端部、またはⅠとⅡの間に、堀切状のものは確認できない。『牡鹿町誌』の図（第52図）ではⅠ-A東端に空堀が示されているが、昭和50年撮影の航空写真を確認すると、石森城跡東側から給分浜に向かって直線的に走る送電線管理用とみられる作業道の位置と重なる事から、この作業道の痕跡を空堀ととらえた可能性がある。また、町誌にはⅠ-Aのさらに東側に二重の空堀があると記されているが、Ⅰ-A東端から80mほど登った斜面の途中に、緩い尾根を横断する幅1mほどの溝状の崖みが2条あるものの、堀切状に地形を斬ち切れる規模でも位置ではなく、現状は歩道として利用されている。以上、中沢館跡は踏査の結果、平場状の段が連続して認められるものの、切岸や堀切などの地上顕在遺構は確認できなかった。

2 調査の方法と経過

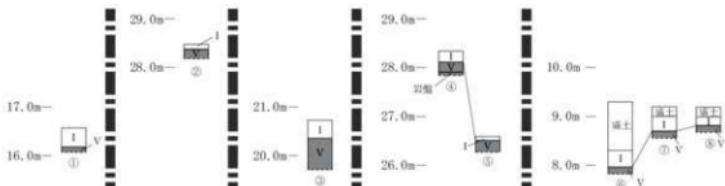
調査対象地は遺跡範囲の西側、Ⅱ-A区およびⅢ-A～E区が含まれる。県道石巻鮎川線給分浜復興道路は、この場所を南北に貫くルートで計画されている。平成30年9月12～14日に確認調査を実施し、その結果を踏まえ、約4,990m²を調査対象とした。発掘調査は、平成31年度に南半部、令和2年度に北半部を対象として実施した。

平成31年度の調査は8月5日から開始した。まず城跡の縄張図を作成し、その後重機でⅡ-A区とその南北斜面の表土を除去し、遺構の確認と精査を行った。その結果、柱列跡1条、ピット5個を検出した。10月11日にはドローンによる空中撮影を行い、10月30日に調査を終了した。

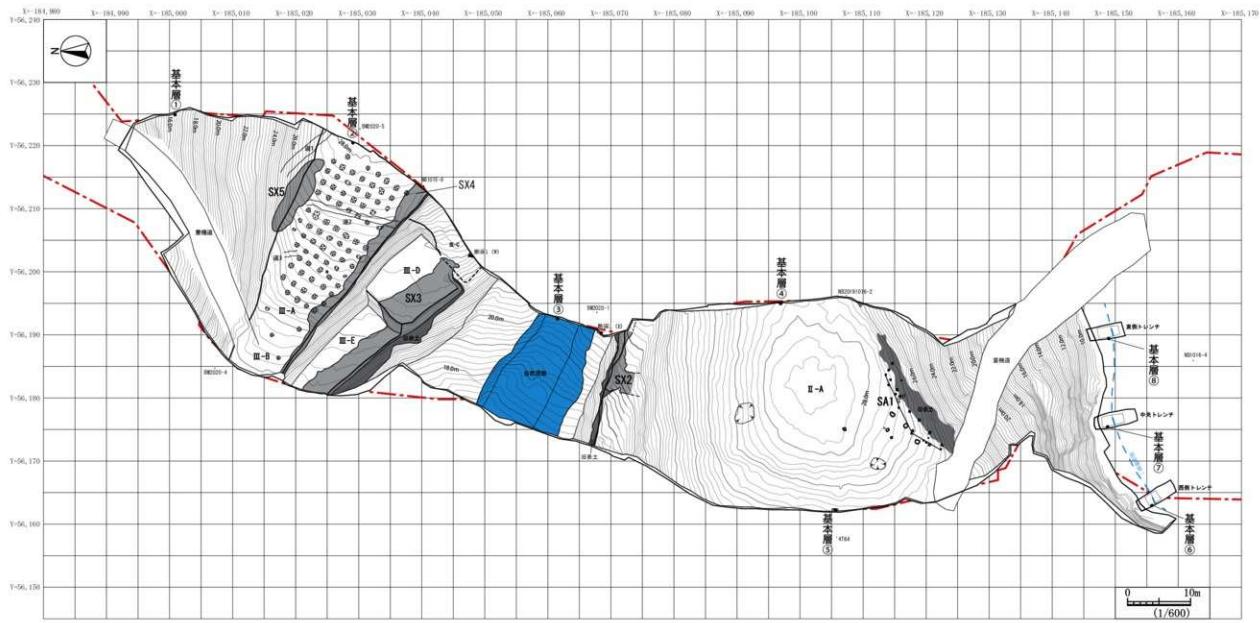
令和2年度の調査は6月8日から開始した。Ⅱ-A区の北側斜面裾部から重機による表土掘削を行い、遺構の確認と精査を行った。その結果、整地層4箇所を確認した。7月27日に調査を終了した。

調査区や遺構の平面図作成には電子平板を使用し、測量に際しては事業者が打設した基準点等を使用した。主な基準点は以下の通り。

BM2020-1 X=185067.771 Y=56193.579 BM2020-4 X=185007.183 Y=56184.749



第54図 中沢館跡基本層序柱状図（縮尺1/100）



第55図 中沢館跡遺構配置図

NB1016-4 X=185162.371 Y=56185.931 4 T64 X=185105.795 Y=56157.917

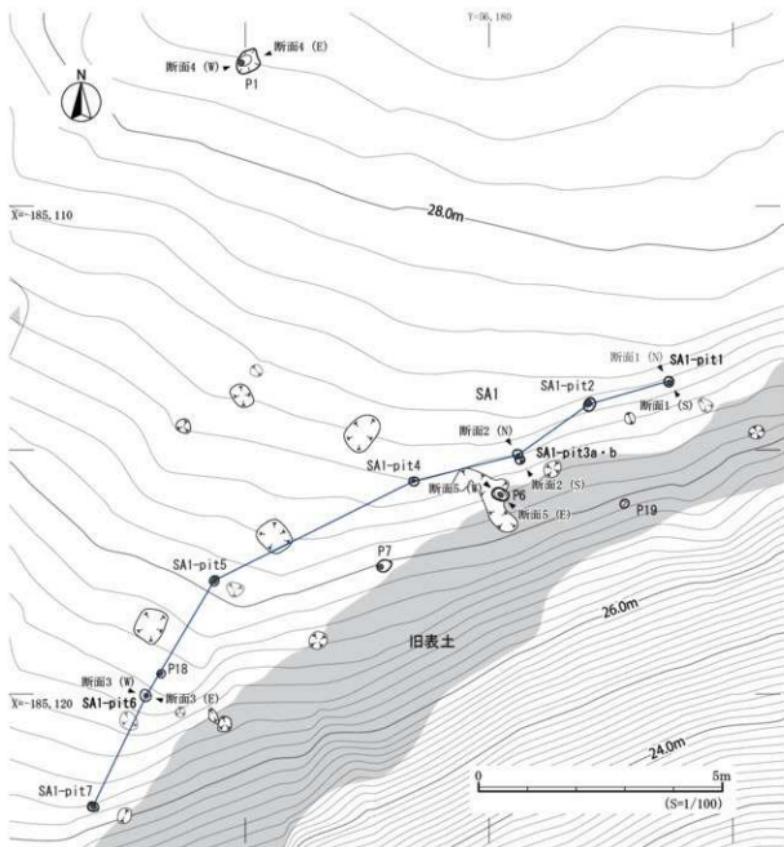
また、断面図は1/20の縮尺で手実測により作成したが、一部電子平板も併用した。写真撮影には2,416万画素のデジタルカメラを使用した。

3 基本層序

I : 表土。灰黄褐色(10YR4/2)シルト。層厚10~50cm。

II : 自然流路堆積土。黒褐色(10YR3/2)粘土質シルト。谷状地形で確認した。層厚25cm。

III : 旧表土。黒褐色(10YR3/1)粘土質シルト。平場状部分の端部で確認した。層厚20~30cm。



第56図 SA1柱列跡平面図

IV：地山崩落土。褐色(10YR4/4)粘土質シルト。II-A区の南斜面上部で確認した。層厚30cm。
V：地山。黄褐色(10YR5/6)粘土質シルト、またはにぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。礫を多く含む。

4 検出遺構と遺物

柱跡 1 条、整地層 4 箇所、ピット 5 個を検出した。遺物は表土等から近世・近代の陶磁器が出土しており、総量はコンテナ 1 箱である。

A. 柱列跡

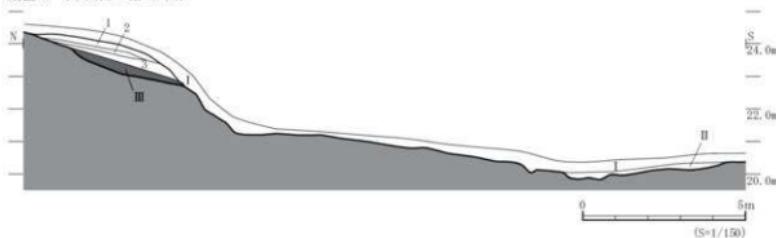
【SA1 柱列跡】(第 56・57 図)



No	土色	土性	潜入物など	備考
断面1	黒褐色 (10YR3/1)	粘土質	地山粒を少し含む	SA1-1 杖痕跡
	灰黒褐色 (10YR4/2)	粘土質	地山粒を多く含む	SA1-1 鹿力埋土
	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を少し含む	
断面2	黒褐色 (10YR3/2)	シルト		SA1-3a 杖痕跡
	灰黒褐色 (10YR4/2)	粘土質	地山粒を多く含む	SA1-3a 鹿力埋土
	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒を少し含む	SA1-3b 杖痕跡
断面3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を少し含む	SA1-3b 鹿力埋土
	黒褐色 (10YR3/1)	シルト	地山粒を少し含む	SA1-6 杖痕跡
	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	地山粒を少し含む	SA1-6 鹿力埋土
断面4	褐色 (10YR4/4)	粘土質		P1 杖痕跡
	褐褐色 (10YR4/4)	粘土質	粘土ブロックを多く含む	
	褐色 (10YR4/4)	シルト	地山粒を少し含む	P1 鹿力埋土
	こぶし 黄褐色 (10YR4/3)	シルト		
断面5	黒褐色 (10YR3/2)	粘土質	地山粒を少し含む	P6 杖痕跡
	暗褐色 (2.5YR4/2)	シルト	地山粒を少し含む	
	灰黒褐色 (10YR4/2)	粘土質	地山粒を多く含む	P6 鹿力埋土

第 57 図 SA1 柱列跡・ピット断面図

断面6 (平面図: 第55図)



No.	土色	土性	固入物など	標号
断面 B	灰褐色 (10YR5/2)	砂質	小礫を少し含む	SX2 砂場地 1 部
	黒褐色 (10YR3/2)	砂質	小礫を少し含む	SX2 砂場地 2 部
	深褐色 (10YR5/2)	砂質	小礫を多く含む	SX2 砂場地 3 部

第58図 SX2整地層：自然流路調査区北壁断面図

II -A 区南斜面際で検出した。東西 6 間の柱列跡である。

〔規模〕 総長 14.7 m、柱間寸法は 1.7 ~ 4.6 m である。

〔方向〕 北側 4 間が北で東に 67 度、南側 2 間が北で東に 29 度偏する。

〔柱穴〕 挖方は平面形が径 20cm 前後の円形、深さは 20 ~ 40cm である。柱痕跡は径 8 ~ 14cm 程の円形である。

〔遺物〕 出土していない。

B. 整地層

整地層は 4 箇所検出した。地山上または旧表土上に地山由来の土を盛土して構築している。いずれも上面で遺構は確認していない。また、遺物も出土していない。

【SX2 整地層】

II -A 区北側斜面裾部で検出した。

〔規模〕 南北 3.8 m、東西 9.6 m、厚さは最大約 0.3 m である。

【SX3 整地層】

III -D・E 区南辺で検出した。

〔規模〕 南北 6.0 m、東西 29.6 m、厚さは最大 0.5 m である。

【SX4 整地層】

III -A 区南辺で検出した。

〔規模〕 南北 2.8 m、東西 36.4 m、層さは最大 0.4 m である。

【SX5 整地層】

III -A 区北辺で検出した。

〔規模〕 南北 3.9 m、東西 13.4 m、層さは最大 0.4 m である。

C. ピット

II -A 区南側で 5 個検出した。P1 は長辺 42cm の不整形で、深さ 16cm、柱痕跡が径 12cm の円形である。その他は掘方が径 18 ~ 35cm の円形で、柱痕跡は径 10 ~ 13cm の円形である。

5 総括

今回の調査では、柱列跡 1 条、整地層 4 箇所、ピット 5 個を検出したが、いずれも遺物は伴わず、年代は不明である。

II -A 区および III -A ~ E 区は、平場と想定して調査したが、城館の平場として判断できるか難しい。II -A 区は中心部を頂点として山なりに緩斜面を広げており、平坦面を認識できない。II -A 区の南側は急斜面となっているものの、北側は頂部から比較的ゆるやかな自然地形の斜面が続いており、西側から入る作業道で裾部が段状になっている箇所以外は、人為的な痕跡に乏しい。II -A 区の頂部は、藩政期まで現在南西斜面にある神明社の社地であったと伝えられており、今回検出した柱列跡やピットは神明社にかかる遺構の可能性も考えられる。III -A 区については、地山を削平した上で縁辺部に盛土整地を施して平坦な面が造り出されているものの、この平坦面は西側へ向かって緩やかに傾斜

する斜面となっている。平面精査では近代以降の植栽痕を多数発見した。Ⅲ・A区周辺は、近年まで畑地や果樹園として利用されており、その痕跡とみられる。Ⅲ・B～E区は平坦面で、南側は切岸状に急傾斜が形成されているが、ピット等の遺構は確認していない。

以上、今回の調査では中世にさかのぼるような遺構・遺物は確認できなかった。表土等、遺構外から出土した遺物も、近世末～近代にかけての陶磁器である。事前に行った地形観察の結果も合わせて、明確に城館等と関連するような情報は得られなかった。

ただし、今回調査した範囲は城館と考えられている範囲の一部であり、主郭とされる東側のⅠ区は調査対象外であった。また、西側の平場Ⅱ・Dからは応永8年（1401）の紀年銘をもつ板碑が採集されている。これら平場等の位置づけや、その存続時期については、将来のさらなる調査・検討を待ちたい。

【引用・参考文献】

石巻市史編さん委員会 1996 『石巻の歴史 第一巻 通史編（上）』

牡鹿町誌編纂委員会 1988 『牡鹿町誌 上巻』

宮城縣史編纂委員会 1958 『宮城縣史 26（資料篇4）』



II A 区 遠 景 (南西から)



調 査 区 遠 景 (北から)

図版 24 中沢館跡遠景写真



II A 区 全景 (上から) 左が北



II A 区 全景 (東から)



II A 区 南側完掘後 (北東から)



II A 区 南側斜面 (南東から)



II A 区 北側斜面 (北東から)

図版 25 II A 区



調査区全景（南から）



III A区全景（東から）



III A区全景（西から）



III D・E区全景（東から）



III E区全景（南東から）

図版 26 III A～E区



II A 区 SA1 柱列跡完掘後（西から）



SA1-pit 1 断面（東から）



SA1-pit3a-b 断面（西から）



SA1-pit 6 断面（西から）



P 1 断面（北から）



P 6 断面（西から）



III C 区 調査区東壁 SX3 整地層断面（西から）



調査区東壁自然流路跡断面（西から）



南側斜面下トレンチ全景（北西から）



南側斜面下中央トレンチ断面（東から）

図版 27 SA1 柱列跡、SX3 整地層など

報告書抄録

石巻市文化財調査報告書第17集
石森城跡・中沢館跡
—県道石巻鮎川線給分浜復興道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ—

令和4年3月25日印刷

令和4年3月31日発行

発 行 石巻市教育委員会
〒 986-8501 石巻市穀町14番1号
☎ 0225-95-1111（代）

印 刷 株式会社コアシステム
〒 986-0859 石巻市大街道西一丁目2番51号
☎ 0225-95-6283
